

IT 7N 89

目次

出發(廣島).....	一
軍の乗船埠頭(宇品).....	五
下等室(全、第一八幡丸).....	一〇
日本の歴史上の光景(全、出發當時の光景).....	二二
門司の海峡(門司).....	一六
怒濤澎湃たる玄海灘(玄海灘).....	一八
對馬の山影(對馬).....	二三
勇しき軍を護れ(對馬の山影を失ひし時).....	二七
浪花節、一口嘶、浪花節(船中の生活).....	二九
舷尾(全).....	三三
海軍根據地、海軍根據地(海州灣).....	三六
東郷司令長官(海州灣所見).....	四一

鎮南浦(鎮南浦).....	四四
上陸地點(全).....	四六
亡國の民(全).....	五〇
森軍醫監(全).....	五四
風呂の裡(全).....	五七
諸君、鴨綠江の戰報(全).....	五九
敵前上陸(全).....	六二
大同江の濁流(全).....	六五
解纜(全).....	六九
假泊の地(椒島).....	七三
船の行進序列(全).....	七六
第二軍の上陸地點(楸大澳).....	八〇
わが日章旗(全).....	八四
怒濤の中に三時間の漂泊(全).....	八七

上陸(全、猴兎石).....	九二
ハイネの詩から俄かに軍歌(全).....	九五
顔を洗ふ水(最初の宿營地勇家屯).....	九九
昨日戰死(大姚家屯附近、桂中尉以下の火葬).....	一〇三
タンビージャ(大姚家屯民家の舞器).....	一〇七
實に壯觀(大兵金州街道に集る).....	一一〇
最初の砲聲(十三里臺子の戰、車家屯).....	一一五
人間の事業の最も壯大なるもの(全、車家屯より金州途上所見).....	一二一
電話(全、鎮家店).....	一二五
車家屯の敵襲(車家屯).....	一三〇
附近の地理(金州、十三里臺子、關家店、韓家屯).....	一三三
東清鐵道の線路(十三里臺子).....	一三六
敵の巨砲(十三里臺子の山背).....	一四〇
老虎山登山(遼東の名山).....	一四三

大戦の朝(金州南山の戦、劉家店、韓家屯、十三里臺子).....	一四九
初めて臨んだ戦争の大舞臺(全、十三里臺子の山背).....	一五三
迷子になつては大變！(全、十三里臺子、韓家屯、鐘家屯).....	一五七
この風雨、この雷光雷鳴の中(全、鐘家屯).....	一六二
肖金山(全、老虎山山塊中の一獨立山).....	一六五
機關砲の響(全、南山敵壘).....	一六八
負まいとする心、勝たうとはやる念(全、戦闘酣なる時).....	一七二
感極るの至聖境(全、戦勝後).....	一七七
悲惨の極、酸鼻の極(全、翌日に於ける南山の戦後).....	一八二
青泥窪(青泥窪).....	一九〇
若い日本婦人(全).....	一九五
タルニー市街の見物(全).....	二〇〇
言ふに云はれぬ諧調(青泥窪、支那劇).....	二〇五
彼我の大勢(林家屯).....	二一三

南瓦房店の停車場(南瓦房店).....	二一八
戦闘の大局面(得利寺の戦、王家店).....	二二二
狹隘なる谷地(全、温家屯、龐家屯).....	二二三
得利寺停車場(全、復州河).....	二三〇
沛然たる驟雨(全、復州河).....	二三二
敵襲！敵襲！(尖山子).....	二三八
輸送の困難(北大崗寨).....	二四五
新聞縦覧所(全).....	二五〇
玲瓏玉のごとき温泉(熊岳城、正白旗).....	二五七
蓋平攻撃(蓋平の戦、前安平).....	二六一
蓋平盆地(全、古家子).....	二七一
第五師團司令部(于家屯).....	二七五
丸てロスキ一のやう(大石橋の戦前、關家店).....	二八二
敵に對する作戰計畫(大石橋戦前).....	二八五

砲彈の遞傳(大石橋の戰、馬家溝)……………二九二
 拜むやうにして得て來た米二升(全、馬家溝)……………二九六
 一面に爆裂する砲彈(全、羊草溝)……………二九九
 觀戰山の麓(全、羊草溝)……………三〇六
 わが山砲陣地への突撃(全、羊草溝)……………三一二
 畑中に電話所(全、羊草溝)……………三二六
 太平岑の陣地(全、太平嶺)……………三三一
 捕虜になるかも知れん(全、三元井)……………三二六
 大石橋の市街(大石橋)……………三二九
 第三師團方面の戰況(大石橋の戰、中央隊)……………三三五
 悲惨なる戰鬪の影(全、青花峪)……………三四五
 月夜の大格闘(全、勉汗溝)……………三四八
 遼河の畔(營口)……………三五七
 最も繁華なる處(全)……………三六三

柞木城攻撃の日(營口より大石橋に至る途上)……………三六七
 海城の城壁(海城南門前)……………三七三
 送別會(海城々外箭樓子)……………三七七
 海城兵站病院傳染室(海城停車場附近)……………三八二
 甘泉堡、鞍山站、首山堡(海城病院)……………三八九
 東烟臺(遼陽途上)……………三九五
 鞍山站の險(全)……………四〇一
 首山の激戰(全)……………四〇六
 遼陽の高塔(全)……………四一二
 橋少佐戰死の狀況(遼陽の戰後)……………四一七
 遼陽城(全)……………四二五
 新戰場(歸國途上、首山堡)……………四三二
 避難者の群(全、沙河)……………四三五
 彎形なせる古關門(全、鞍山站)……………四四三

目次終

第一軍從征日記

田山花袋著



發

午後一時自分等寫眞班一行は、廣島島屋町の中野といふ旅館を出發して宇品へと向つた。宇品！

自分等はいかに宇品乗船の時の來るのを渴望したてであらうかの狭い、汚ない旅館の一室、寫眞機械、活動寫眞の機械などの寝る處もない程につめ込まれてある一隅に、自分等は殆ど忍び難い耐忍の情を抱いて、一刻も早く其の大活動を待ちあぐんで居た。旅館を出て、時計商の角を曲ると大手町の大通、歩兵が行く、騎兵が行く、砲車が行く、其の雑踏は眼を驚かすばかり、商肆にはまた出征軍人の必要品——水筒、金梳、背囊、帶皮、フランネルの汗衫其他あらゆるものが並べ立てられて、第一軍の近衛からは随分澤山金銭は落ちたが、今度の第二軍は法令嚴明で更に旨い汁は吸はれぬなど、狡猾な商人共の滴して居るにも拘らず、肆には兵士の群がいつも跡を絶たぬといふ有様、その

特 69
119

活動、大活動は實に名狀するに言葉が無かつたので、それを見る度に、其附近を散歩する毎に、自分の胸は烈しく波立つ。

その波立つ心は、今、第二軍の活動と共に更に一層の盆涌、一層の澎湃を來らしめたので、昨日午前十時に、愈々明日出發！との秘密なる命令を管理部の大越副官(兼吉)から受取つた時には、一行思はず万歳を三唱した。愈々乗船、愈々上陸、この軍は何でも非常なる事業を遺るとのことは兼ねて小耳に挟んでも居り、副官部の松岡少佐(保太郎)からは、一週間位は飯などは遣られぬから、其覺悟で携帶口糧を準備しろ……と威されても居るので、兎に角愉快なることを遺るには相違ない。旨く行けば、大々の事業、失敗すれば報國一死！などと、二三日來、廣瀬中佐の壯烈なる最後、マカロフ提督の悲惨なる戦死などの號外に、耳熱し、氣昂れるこの身は、何の事はない、尤て狂したかのやう。

想像して御覽なさい、軍國の精神を集めたとも言ふべき廣島の市街、大手町の司令部を始めとして、砲兵部、管理部、軍醫部、經理部、金櫃部、乃至は各町毎の重立つた旅館に白布を翻へせる師團、旅團、聯隊本部は、昨日から既に大濤の翻へるがごとく宇品へくと活躍して居るので、わが旅館の前には川、元安橋、其對岸の大なる旅館に司令部を置いた第一師團なども、この黎明に、幾

度か万歳の聲を擧げて一隊々々出發して行くのが、極めて勇ましく、殆ど血を湧かさずには居られぬばかりに聞き取られたので、自分等の車を並べて宇品へと赴いた時には、既に處々昨日に異なる師團、旅團、聯隊本部の白布の翻れるのを認めた。

空はまた思ひ切つた快晴。春にはこんな日は實に珍らしい。廣島市の附近を繞れる山々には既に四條派の畫に見るやうに美しく装はれて、河の岸に叢生せる柳の絲は、遠征の人の別意に堪へざるがごとく離々として打靡き、菜花の青なる色は路傍に美しく連り渡つて、さらぬだに、美術家、詩人の心を惹くのであるのに、到る處の活動、到る處の喧囂は更にまた一種の幻境を畫き出して、宛然これ一幅魔人の畫圖。

宇品街道の橋を向ふに渡ると、廣島郊外の疎らなる人家。其前を過ぎやうとして、自分はまたはツと撲たれた。其處には小學校の生徒が五六百名ばかり、與第二軍司令官の一行を送らんが爲め、整然と兩側に列を作つて居るのであるが、自分等一行及び其後に續ける多少の人馬をその先驅とも思つたか、皆一同に萬歳を唱へた。萬歳！萬歳！自分は思はず暗涙の胸に上るのを禁じ得なかつた。幼き國民よ、將來は爾等の手腕を煩すこと更に多からん、健在なれ、わが幼き國民！

廣島測候所の前に出ると、もう宇品は一目。嚴島の山から懸けて、碧瑠璃盤上の幾青煤、連り渡

宇品の向山は、刷毛もて巧に描き出したるやうに展開せられて、其東の湾口には、幾多の帆橋、幾多の烟筒。その烟筒からは、幾筋ともなき煤烟の盛に渦上するのが認められるので。

その壯觀と言つたら、無い。

其壯觀は、京橋川に架けたる虹霓のごとき大橋を渡るに及んで、更に層一層を加へたので、それより通ずる外宇品の街路、その真直な路には、四方から集つて来た歩兵やら、騎兵やら、砲車やらが隊を爲し、列を作つて、黄い砂塵は春の日の影に舞ひ上り、埠頭から聞えて来る汽笛の響は、絶えず征人の胸を轟かしめて、人馬共に皆な港へ港へと急いで走り行く。自分等の人車はその活動、その難選の間を右に抜け、左に抜けて、辛うじて其の大埠頭の前へと来たが、昨日大越副官から聞いて置いた十三の埠頭、其處には赤い小旗が建てられてある相であるが、之れは何處であらうと聞きながら辿つて行くと、砲車は砲車、馬は馬、騎兵は騎兵、砲兵は砲兵と皆その乗船する埠頭が異つて居つて、孰れの埠頭にも一として物の動いて居らぬ處は無い。砲を運んで来て端舟に積込む爲め大騒ぎを爲て居るもの、兵士七八名總懸りて頻りに砲を運んで居るもの、馬を舟に乗せやうと苦心して居るもの、千態萬狀容易に状すべからざる光景である。三四町来て、十三の埠頭はとある將校に聞くと、顧み指點して、彼處に大きな建物があるだらう、その前が

軍の乗船埠頭

てあると丁寧に教へて呉れた。

行つて見ると、果して赤い小旗。其周囲には、箱包、蓆包、其他の荷物が山のやうに積まれてあつて、其埠頭の入口に、橋管理部長(周木)が嚴肅なる態度で立つて指揮して居られるのを認めた。後に遼陽首山の戦に於ける橋少佐と言へば、軍神とまでたへられて、兒童走卒も猶其名を知らぬ者は無いのであるが、自分の相識に爲つたのは、忘れもせぬ四月の十三日、從軍寫真班の行李荷物のごとで、由比第二軍參謀次長(光衛)の紹介を得て、その管理部に訪問し、初めて面晤の榮を得たので、其の嚴肅なる態度の中に、よく人をなつかしむる温順のところあるのは、自分は一方ならず敬服したのである。あゝ橋少佐、自分は君のことを考へると、殆ど堪へ難い熱い涙の双頬に下るのを覺ゆるのである。けれど、今は記すべき處では無い。

少佐(戦死後中佐に陞叙せられたのである)の姿を認めたので、其前に行つて、指揮を乞ふと、「ヤア、博文館の寫真班か、君方の荷物は何許あるか、……む、よし、よし。それでは其處に、他の荷物と一緒にならぬやうに區別して置き給へ、今少し經つと指揮するから。」

て、自分等は命ぜられたる處に、八個の荷物を卸し、それとなく傍を見廻すと、箱包を高く重ねた上に秋月中尉(胤逸)が白い襷を肩から胸に巻いた勇ましい姿で立つて指揮して居るのが見えるし、其すぐ側には乃村騎兵曹長(久綱)が同じく事務に執掌して居らるゝのを見た。否、大越副官、澤田副官も皆この埠頭附近に居られたので、管理部長即ち輸送指揮官は今しも全力を擧げて、軍の輸送を計られて居るのである。自分は傍に水筒に詰める爲めに大釜に湯が沸してあるのを発見して、水筒に熱い熱い湯を詰めたが、打渡したる宇品港頭の光景は、言ひ知らず自分の胸を動かしたので。

見ると、わが前なる埠頭には、十五六艘の端舟密集し、軍夫船頭は荷物の積込に忙しく、その先には、碧なる海に黒き煤烟を靡かせつゝ二三艘の端舟を引き行く五六の小蒸汽、其の向ふには、島の碧なる影と入海の静かなる波とを後景にして、大運送船の相連ること前後三四十隻、孰れの船にも、端舟、小蒸汽が砂糖に密集る蟻のやうに取附いて、双眼鏡で見ると、遠い遠い處に懸つて居る常陸丸の右舷に頻りに軍馬を載せやうとして居るのも鮮かに眼に映る。彼處に正面を向いて居るのが目尾丸、その向ふに少し斜になつてかゝつて居るのが鎌倉丸、向ふのはあれはせいりん丸、りよじゆん丸、其の右に、それ、今小蒸汽の取附いた大きな船は何だらう。なの字が見えるが……

など、言つて居ると、眼の好いので自慢な柴田君が少時それを見詰てから、

「しなの丸、……しなの丸……あのなの字が一番大きく見えるが、次にのの字が、そら見えるだらう」

と言つた。

「成程、信濃丸！」

と中君は合せた。

「あれに、十八聯隊が乗つてゐるんだナア」

「左様だ」

十八聯隊は名譽の聯隊、日清戦役に於ける佐藤少將の驍名は國民の皆知れる所であるが、この聯隊が丁度柴田君の故郷に當るので、其縁故で、聯隊長石原大佐(應恒)を識り、廣島滞在中、其聯隊の記念撮影を爲て遣るやら、其の送別の宴會に聘ばれるやら、随分よく訪問しては邪魔を爲た。出發の二三日前、出来上つた寫眞を持つて行くと、聯隊長は「ヤア、よく出来た、誰の顔も分明に……これでは勇ましい戦陣が出来てせう。また、戦地に行つたら、ちよいと遣つて來給へ、面白い寫眞を撮らせて遣るから……」と言つて、莞爾と笑つて、「何うも我々はしつかり遣らんけりや

ならんよ、聯隊が名高い聯隊だからナア』と加へられた。あゝその名高い、勇しい尾三遠の勇士は、實にかの船に乗つて居ると思ふと、自分等は一種他と異なる情を覺ゆるのであつた。

我々の便乗すべし船は、第一八幡丸。(寫眞の二)噸數は四千五百噸で、信濃丸など、比べると小さいが、其速力、其裝飾は郵船會社が歐洲航海に用ゆる大船の中でも最もすぐれて居るといふ事で、一等客室の立派さ加減などは到底他に求むることが出来ぬとの話。其船は何處に……と自分等は彼方此方と飽かず双眼鏡を捻くり廻したが、船が重り合つて居るのと、斜になつて居るのとで、よく解らぬ。けれど沖合八百米ばかりの處に、今頻りに黒煙を擧げて居る船が少しく正斜角に横つて居て、右舷には端舟、小蒸汽が幾つとなく取附いて、甲板の上には美々しい軍服を着けた士官が幾人となく往來して居る。あの船がや無いかしらん……などと噂して居ると、傍に居る管理部の備人らしい人が自分等に向つて、

「第一八幡丸ですか？」と訊く。

「え、」

「あれです、あれが左様です」

帆檣の具合、ブーブの光景、あれが第二軍の首腦を乗せ行く船！と自分等は久しくそれに見入つ

て居たが、不圖、寺崎廣業君が門生の三浦北峽君と二三箇の包を携へてすぐ前に違つて来て、橋部長と話を爲て居るのを見付けて、自分は其傍に歩み寄つた。氏とは流山の旅行家懇親會以來の知己で、五六日前、氏の今回の從軍を新聞にて知り、何うかして逢ひ度いと思つて居たので、自分は喜んで聲を懸けたのである。

少時互に談話をして居る間に、段々混雜が加はつて來た。橋少佐は頻りにその大輸送の指揮を取つて居られたが、やがて自分等の方に向ひ、「ちや、諸君の方を先にしやう、そろ／＼乗り給へ」自分等は其儘勇んで命を聽き、管理部の備人の一部と共に、急いで端舟へと飛乗つた。跡から更に乗りし兵士七八名、其儘に端舟はゆる／＼動き出して、二三町漕ぎ出たと思ふと、其處に待つて居た小蒸汽は、直にその舟尾の綱を結び取つて、かくて自分等は愈々陸から海へと難なく移し了らるゝのであつた。

端舟より本船に移る時の困難、ことに自分等一行は寫眞機械やら、種板やら、荷物が非常に多いので、人馬を以て上へ下へと混雜する船の甲板の上に更に一方ならざる混雜を來したのであるが、しかも自分等は久しくこの一刹那を待たぐんで居た身の、難なくその困難をも通過して了つて、やがて管理部の軍曹に導かるゝまゝ、豫め定められたる、寫眞班一行の船室へと赴いた。

最初上りしは、粧飾美々しき上甲板。

それを下ると一段低くなつたところがあつて、船の右舷左舷の兩側に急造の厩がすらりと並んで、馬が既に七八頭も入れられてある。中央には帆檣を上下させる機械が混雑と固つて、ツツクの硬々した幕の下からは、

下等室

の船倉の一部が明かに覗かる。猫の額のやうな下甲板には、兵士がひとつと言ふほど塞つて、喫煙處と記された處には、兵士の吸合ふまづい煙草の煙が氣味悪く籠つて居る。何處に連れて行かるとか、部長の話では、「何うも君方は公然大本營の許可を得て来て居らんのだから、言はゞまア、第二軍がこつそり連れて行くやうなものだから、とても充分なる待遇を與へることが出来る。八名の席だけは取つて置いたが、不平を言はれては困る」とのこと。「イヤ、此際伴れて行つて頂かさへすれば、此上もない幸福です。不平などは言ふどころではありません」と立派に答へて置いたは置いたもの、誰しも醜汚いところの厭なのは人情である。何うか、少しでも好いところ、横に位なれるところと心の中に念じて行つたその希望は水の泡。喫煙處から細い細い鐵の壁とすれくにな

らなければ通れぬ程の細い間を辛うじて抜けると、いきなり突當りは便所。船の一種の臭氣が既に一方ならず自分の鼻を刺撃して居るのに、これはまた烈しき惡臭、自分は殆ど堪へ難い心地が爲た。否そればかりならまた好いが、自分等寫眞班の室は、その便所からまだ一段下の、下等室の中でも最も悪い、上からWCの木管の通つて居る一室では無いか。(寫眞の一)

けれどこれも戦地と思へば、あきらめも附くが、六疊敷よりもまだ狭い一室に寫眞班八名の札を張られたのはしたゝか困つた。第一、多い荷物を入れて何うして此處に入名が入れやう。横になるところか、座ることすらも出来ぬのである。室の傍、階段の下に、大綱を蛇の蟠つたやうに巻き重ねたのが場を占めて居るから、其上に機械や荷物を置くにしても、それでも八名は到底難かしい。仕方が無いから、乃村曹長に此旨話すと、曹長はそれは成程無理だと點頭いて、隣の憲兵の居る間を一しきり丈け明けて呉れたが、其代り寺崎廣業君の從者を此處に一人混せて呉れと頼んで行つた。かくて三浦北峽君は自分等と一緒に其下等室に同居することとなつたのである。

一かたづけして、自分は一人上甲板へと昇つた。上甲板へは將校以下の昇降を禁じてあるのであるが、何の彼のと理由を附けて、辛うじて昇つて見ると、恰も好し、奥司令官以下の諸將官を始め、參謀佐官尉官の人々は今しも左舷の第二梯段から乗船しやうとして居るところで、自分の始め

て見た時には、奥司令官は下から十五六段目のところを上へ上へと登つて來らるゝ際であつた。後から續く落合參謀長、税所砲兵監、片山主計監、森軍醫監、由比參謀次長と段々上つて來て、軍帽、軍服、佩劍の美々しき粧飾は、をりからの美しき春の日の海の光と相映發して、其處に一場のあもしろき活畫を幻出した。

此等の人々の任務は重いのである。わが祖國の運命の一部は確かにこれ等の人々の肩に懸けられてあるのであると思ふと、自分はこの一場の光景が單に一時のものではなくて、わが

日本の歴史上の光景

てはあるまいかと、じつとそれに見入つたのである。

船中の混雜、上へ下へとの喧しき騒ぎも未だ止まぬのに、沖にかゝつて居る常陸丸は早動き始めて、わが八幡丸も頻りに錨を巻き始めた。さて、十五分間ばかりで巻き終つたと思ふと、ゆるくと右から左へと先づ大回轉を爲て、そして徐かに進行を始めた。

時計を見ると、午後三時三十分。

耳を敬てたなら、陸には此船を送る萬歳の聲が聞えたであらう。けれど、船には勇しき門出を奏

する樂器もなく、軍歌も無く、海軍の出發などに比して、それは實に淋しいものであつた。只、混雜と喧争、其職に携はれる人は、殆ど何時宇品を離れたかも知らぬ位。

『何んだ、もう動いてるのか』

『餘り早過ぎるナ』

『餘り飽氣無いぢやないか』

などの聲が各方面に起る。

そして、せめては別れ行く本國の見納め！と態々甲板まで出懸けて行つた人もあつたが、船は時の間に、向宇品の山の陰を透つて、其儘嚴島に見える内海へと進んで行つたので、充分に其の宇品の山々と別離を惜しむ暇すら無かつた。自分はそれでも一人甲板に出て見て居つた。別離！別離！軍國の別離！

自分の胸は少なからず波立つた。

自分の想像では宇品出發の際は、それは頗る壯觀で、何十隻の運送船が舳艫相合せて勇しく出帆するであらうと思つて居たのに、前に常陸丸が唯一隻煤烟を擧げて進んで行くばかり、跡には續いで出帆して來る船の影も無く、普通の航海に少しも違はぬ嚴島の山陰も兎角する中に次第に遠く、

岩國あたりと思ふ沖より、日影は漸く西に傾き、霞みに包まれし大空も次第に晴れ、肌に着る風もそころに寒くなつて来た。自分は詮なく室へと下つた。

下等室の光景、これまた面白いところが無いでもない。自分等の居る下等室は、五坪ばかりの船倉を中央にして、其の周圍に、丁度劇場の棧場のやうに、約六疊敷位の一間を二段に長く連ね渡して居るのであるが、船倉の一隅には、更に下階に下るべき急な高い階梯が懸けられてあつて、其下には、馬——司令官以下各將校の馬が幾頭となく繋がれて居るのである。従つて、此下等室に居るものは、多くは馬卒、備人、それに上等兵以下の兵士等で、その喧争は實に夥たしい。やれ、上から水を懸けたと言つては怒鳴る、やれ、馬の取扱が悪いからと言つては怒る、殆ど終日かれ等の聲を立て、居らぬ時は無いと言つても好い位。それでも、彼等の間には江戸見が多いので、喧嘩をするにも江戸辯のちやきく、をりくは長歌やら義太夫やらを唸り出して、船の鐘が鳴ると、それ、三ツ番だ！ 火事は近いなど、叫ぶ。その一方ならぬ混雑に對して、管理部の將校副官などはことにこの下等室の統御に心を勞し、もし、失火でもあるやうなことがあつては……と、一切煙草を室内で喫せしめぬばかりか、ある時などはマツチを一つ一つ奪つて行つたことのあるのを記憶して居る。

それから、夕暮になつて、食事の鐘が鳴る、この食事が又一方ならざる雜物で、自分は船中に居る間、既に從軍の苦のいかに堪へ難さかと思ひ當つた。室の前、階段の下に、船の事務員は下等室の食事分配所を設けて、豫め渡して置きたる木札を證に、一々憲兵とか寫真班とか砲兵とか部を分けて食を分配するのを例と爲たが、その食はバスケットの中に入られた粗悪の米、粗悪の菜で、多くは肴が臭かつたり、米が半熱であつたりして居て、腹が空くから食事は待つが、そのバスケットを見ると、うんざりして了ふといふ始末。椀は剥げ、茶椀は黒い汚點がついて居て、フッキの古い罐に入れて来る茶は丁度馬の小便同様——敢て贅澤を言ふのではないが、實際これには皆困つた。美しき夕陽も漸く薄く、空は更に眉のやうな月を以てこれを照したが、これもやがてはかくれて了つて、夜は眞の闇、唯、船の水を漕つて快駛する音が聞えるばかり。

上甲板から、將校の一二を訪問して見やうとは思つたが、終日騒いだ勢れが出て、其儘肩を並べて熟睡。

かくてわが從軍の最初の夜は過ぎたのである。

四月二十二日（金曜日）晴

昨夜十二時頃、銃を下す音を夢現のやうに聞いて居つたが、夜が明けて、眼が覺めて見ると、果して船が停つて居る。何うか爲たのかと船員に聞くと、いや別に意味は無い。

門司の海峽

は常てさへ危険であるのに、今は水雷を大分沈設してあるので、此處に着くとすぐ、銃を下して、夜の明けるを待つて居た。出て御覽なさい。昨日先に出た常陸丸も銃を下して居りますからと教へて呉れたので、其儘、中甲板へと自分は出懸けた。景色よりも何よりも、先自分の眼を惹いたのは、兵士がその甲板で頻りに顔を洗つて居る光景で、彼等は船員の柄杓から一杯のはかり水を貰つて、そして顔を洗つて居る。中に、一杯では足りぬから、今一杯呉れると言つて、あらく怒鳴られた兵士がある。

「はかり水は一杯と極つてます！」

「まア、今少し、今少し。御性だ、顔をまだ半分しか洗はんのだから」

「上げられません」

と船員はえらい權幕。

水一杯も餘計には呉れられぬとは、これが戰地であらうと自分は思った。自分も仕方が無いからそのはかり水で、猫の面を洗ふやうに顔を洗つて、そして愈々甲板に上つた。

曉の門司海峽の景——自分は思はず手を拍つた。

何たるすぐれたる風景であらう。九州の山は既に近く右に聳え、其の蜿蜒として海に至る突角は門司の港、其港には今しも朝霧が半ば晴れかゝつて居て、其の絶間々々から林のやうに立つた帆船が、東のオレンジ色にさながら印したやうに浮き出て居るのが見える。左を見ると、周防の海の懐はやゝ廣く、向ひに、馬關の粉壁數十家がこれも薄い朝日の光を受けて、丸て畫か何ぞのやうに見渡される。常陸丸は？と見廻すと、昨日わが前に進んだにも拘はず、今日は二千米突ばかり背後に碇泊して居て、其の太い烟筒からは、薄い黒い烟が透蛇として靡き渡つて居た。

自分等門外漢にはよく解らぬ。否、當時は軍人軍屬の人々でもこの船の進退に就いては更に聞き知るところが無かつたであらう。ことに、この門司海峽は至要の關門、一度此を出て玄海灘に向へば、何時敵艦が襲つて來るかも知解らぬので、軍司令部の參謀諸將は尠くとも此の海峽を過ぐるに就て、十分慎重なる態度を取つた上、更に大膽なる決意を有して居つたに相違ない。何も知らぬ自分等は、やれ風景が好いの、やれ通信を爲せて貰い度いと、無邪氣極ることを言つて居たが、司令

官以下の人々の心労はそれは一方で無かつたに相違ない。

船の碇を擧げたのは午前六時二十分。

右に馬關、左に門司、その曉の風景の美しかつたことは今だに忘れぬ。あれが日清戦役の際國際談判を開いた春帆樓、今度も首尾よく外敵を屈伏せしめて、出来る丈け光榮する結果を収め度いなど互に語り合つて居る中にも、船は進む、海峡は通過する。前にひろけられたるは、

怒濤澎湃たる玄海灘

今日もよく晴れて、空には殆ど一點の陰翳だに無い。深碧なる海のところ／＼、波が畝を作つて白く亂れて居る彼方には、六連島の面白い形した青螺が屹として聳えて、此島を過ぎると、對馬まではもう陸の影は見えぬとのこと、其島の周囲の濱には、波濤が白く縁取るやうに亂れて、鷹らしい鳥が無數に飛んで舞ふて居るのが見える。

大海のどよみは常にわが思を惹くところ、先年三河の伊良湖崎に遊んで、志摩海峡の怒濤の烈しいのを見、海と陸との自然の戦争の永久に止むべからざるを思ひ、座ろに戦闘といふものゝまことの意義に觸れたやうな心地が爲たことがあつたが、今、その考がふとまた胸に浮んだ。戦闘！戦闘

！人生は終古の戰場であるのである。

六連島のなつかしい影が微かになり始めた頃より、波濤は稍高く、船の動搖も少しく烈しくなつた。けれどあたりの風景の壯大なのと、故國に別るゝ情の綿々として盡きざるとに、流石甲板を下らうとせず、その儘じつと大海のどよみに見入つた。十時頃、壹岐が見えさうなものななどと互に語り合つたけれど、船は遠く沖合に走つて居るものと見えて、その勢をだに認め得なかつた。

自分は下等室のことをのみ記したが、爰に少しく船の全體の光景を描き出して見やう。先、下等室の中甲板を行くと、將校の外昇降を禁ずと記されたる木札の懸つた階級が船の左舷右舷の二ヶ所にあつて、それを上ると、上甲板。其甲板の上はことに眺望に富んで居るので、參謀の徵號着けたる佐官尉官、副官の肩章を帯びたる佐官尉官、其他管理部、砲兵部、經理部、憲兵部、高等通譯の人々が常に三々五々往來して、殆ど其影の見えない時は無いのであるが、其長い甲板を通りがてら粧飾せる船窓からそれとなく覗くと、最初の大きな室は食堂らしく、其處には夜は熾熱燈が點せられて、美しい卓の周圍には、將官らしい人々が葉巻を燻らしながら、頻りに談話に耽つて居るのがちら／＼見える。司令官始め、各將官各參謀の室は、大抵この下及び階級の下に設けられたる一等室を以てこれに宛てゝあるので、司令官は松岡副官（保太郎、當時大尉、今少佐）と共にその奥の

室に居られた。落合參謀長、由比參謀次長、山梨參謀(半造)、當時少佐、今中佐(石坂參謀(善次郎、少佐)河村高級副官(正彦、少佐)等の人々は皆其附近に室を占め、税所砲兵監の室と森軍醫監の室とは右舷に相對して居るのを見た。管理部は階級の下から左舷に行つたところで、輸送指揮官の紙札の懸つて居るのは橋少佐の室、其前には澤田、大越、秋月などの尉官の室があつた。自分のよく訪問したのは、橋少佐、秋月中尉などの室で、森鷗外先生の室にもよく御邪魔に出懸けて行つては長話を爲た。藥師川憲兵大尉(常義)の室にも時々訪問して、いろく新聞雜誌に掲載せる小説のとなどの話を爲たともあつた。兎に角、夜になると、この將校室は賑かなもので、熾熱燈の晴がましく照りかやく室毎から、愉快らしい笑聲が絶えず洩れ聞えて、これが戦闘に赴く船であると如何にしても思へぬのである。上甲板の上(寫眞の三)には、籐製の椅子が五ツも六ツも据ゑられてあつて、二三の佐官尉官が終日交る／＼甲板球戯を遣つて居るが、折々は赤帽の將官も交つて試みて居られるのを見た事がある。右舷の上甲板の中央に、海軍の監督將校の室があつて、その前を眞直に階級を下ると、左舷には馬の首の並んだ厩、右舷の廣場は船の炊事場として用ゐられてあるらしく、はつびを着た男が米を四斗桶に入れて一生懸命に磨いて居つたこともあつたし、里芋の皮、蓮根の皮などを削いて居るのを見たこともあつた。舷尾には、中等客の甲板——この甲板が中々趣味が

あるので、自分等は暗い下等室に踞して居るのが厭さに、大抵はこの二等甲板の上で日を暮すのを例として居つたが、其の甲板の突角には、船の航走里程を計る機械が長い線を海中に曳きながら終日ぐる／＼と廻轉して居て、其のすぐ前が Wheel Room。即ち舵器のある所であるが、それが時々思ひ出したやうに、けた／＼ましい響を立てる。その室をぐるりと廻ると "Salon entrance" と記された扉があつて、其れを排して中に入ると、廣さ十五六畳ばかりの二室、其一隅からは長い階段が中等室の食堂則ち Salon に通して居るが、其階級の上の處に一臺のオルガンが据ゑられてある。このオルガン一臺、これが頗る趣味が多いので、大海をひとり行く運送船の舷尾、計手、軍曹、通譯などの拙い調子が終日絶えずさびしい海波に響いて居るとは何と面白い光景ではないか。

海の氷こゝる北國も

春風今ぞ吹渡る、

三百年來跋扈せし

ロシアを討たん時は來ぬ。

十六世紀の末つた

ウラルを踏えし昔より、

その精銳をつのりたる

奥大將の第二軍

森軍醫部長、鷗外先生の吟せられたる第二軍の軍歌は、實に終日このオルガンの拙い調子に合は

せられて居るので、奥大將の第二軍……と合せ終つて、あゝ何うしても出来ん、出来んと慨嘆して立上る軍曹の顔は今でも眼の前に見えるやうな。その音楽室を通り抜けて左舷に出ると、曹長、計手、軍曹、通譯などの群が寄つて、たかつて、かの圍投といふものを遣つて居る。けれどその下手さ加減と言つたら、實に可笑しい程で、五つの圈が一つとして入るものもなく、さる計手が漸く一つ入れたのを、此上もない成功のやうに賞め立てて居る。……けれどこの下士、通譯（寺崎君もこの下の室に居るので）の群には、段々惡意になつて、自分等もよく此處に来て日を暮すこととなつた。

ことに、夜の講談——これは後に記さう。

對馬の山影

が見えろと人が教へて呉れて、忽惶と甲板の上に出たのは、丁度午餐を済ました時であつた。甲板に上ると、果して見える！丁度船の左舷約七千米位のところに、鯨が海中に其脊を顯はして居るやうに、黒く黒くあらはれて見えるのがそれ、其の山影の遙かに連つた一部が少しく凹形を爲し、それから又高い山影がをりからの白い雲を其頂に靡かせつゝ、遠く遠く連つて居る。

「竹敷はどの方角に當つて居るでせう」

と船員に訊くと、

「丁度あの凹んだ邊になつて居るでせう。此處からはまだ十里もありませうか。船は丁度今對馬の南角を横さりつゝ進航して居るから」

對馬對外寇のことはすぐ胸に浮んで來た。日本國中恐らく此國位外寇との緊要なる歴史を有して居る國はあるまい。元寇入來の時は元より、其他折につけ時に觸れて、先づ日本の神經を刺激するのは此國である。維新の際、英人が今我々の過ぎつゝある所のすぐ上の處に上陸して、其の國旗を建て、永久占領の意をほめかしたことがあつた相であるが、實際わが祖國に取つて、これ程緊要な島は無いと言つても好いので、この島に住へる人民の敵愾心の強いのも當然である。自分はこの名譽ある島、この歴史的の國の山影を仰ぎつゝ、無限の感慨に撲れて、暫しは風景の移り行くのをも知らずに居たが、ふと見ると、船は既に漸く其陸に近く、山の樹、岸の漁村、漁舟などの微かながらも辨せらるゝ邊に來て居る。前には岩山、其半腹に白壁造の際立つて高い望樓。

聞けば、神崎の望樓である相で、其岩山の陰の處に豆酸村があるといふことである。其處に上陸したこのある船員が語つて言ふには「豆酸といふ處は中々面白い處です。風俗も違つて居ります

し、家の構造なども餘程他と異つて居りますし、それに、第一、女の好い處です。村は三百軒ばかり、岩山の陰になつて居る處にあつて……料理店は……」

「あゝ、又惚話を始めな」

と傍から一人の船員か口を入れた。

「まア、好いから黙つて居給へ」

「君の豆酸も久しい者だせ、もう止し給へ」

素刃抜けたので、先生少しく悄氣で、其儘言葉を留めて了つた。船は愈々陸に近く、近く、果ては其の灣を成して居るところから奥の人家が見えるあたりまで進んで行つたが、其處から急に正西に轉して、かくて對馬のなつかしい山影に別れ行くのである。

此時、天末に煤烟二三本、續いて船舶一隻。

「敵艦？」

と言つた者がある。

「馬鹿を言へ、この對馬界限で敵艦に邂逅すやうな馬鹿なことがあつて堪るものか、ちやんと上村艦隊がこの附近に見張つて居るからナア。敵が來りやそれこそ囊の中の鼠だ！」

「それにしても日本の海軍は豪いナア」

「それア、豪い。この大海を、たとへ制海權を握つたにしろ、軍司令部を載せた船が、軍艦にも護衛されずに唯獨り悠然と通過して行くなどは實に面白い。これなどは、日本軍人でなければ打てぬ幕だナア」

これは乃村曹長。

「本當です、僕等が露國なら、一か八ても冒險して、酷めて遣るのですがね。浦鹽に艦隊を三隻持つて居ながら、首を出せんとは、實に意氣地の無い奴だ！」

「本當ですナ」

「けれど、これでもひよつくり出られたら、困るだらう」

「それは困る！けれどそんなことは有りはせんから大丈夫だよ」

「親船に乗つた氣で居るサ」

やがてその船舶は和泉丸であることが解つた。

「それから、先刻西に駛つて居る二本マストの船があつたが、あれは何だらう。大分大きな船であつたがナア」

「何でも英國の船だつて言つたぢや無いか」

「英國の——左様かナ」

海軍が全く制海権を握つて居るから、そんな危険は無い、必ず無いと心の底では信じて居りながら、天末に二三本の煤煙がスーと揚ると、もしや敵艦！と何となく薄氣味が悪いので、かういふ會話は幾度となく中等室の甲板上、又は音楽室などで繰返されるのである。後に、常陸丸、和泉丸の遭難があつたので、自分等はよくあの時一人であの海上を渡つて來たものだ、もしもの事があつたら、それこそ日本は何んなに恐ろしい損害を受けなけりやならんか知れぬのに、……。我々はそこに行くとは暢氣な者だつた。敵艦々々とはよく冗談には言つたもの、そんなとが有らうとは夢更思はなかつたからチア……と常にそれを語り合つた事である。

艦は對馬を出て、愈々速力を加へ、西へ西へと快駛した。對馬の山影が一分毎に次第次第に遠く微かになつて、殆ど天末に没し去つて了つたのは、丁度航走里程計が馬關から九十八海里半を駛つて居る時で、自分の時計は二時五十分を指して居た。あゝもうわが日本の最後の山影も遠く大海のどよみの彼方になつて了つたのである、わが祖國の八百萬の神々よ、この孤往獨邁する

勇しき軍を護れ

自分は舷尾に立つて久しく祖國のことを思つた。

船は渺茫たる大海を走ること猶數時間、あまりに快晴なりし空は、四時頃より稍曇りて、見んと思ひし夕陽の美しさも見えず、只、舵器のをり／＼轟く響と船の水を截りて進む音ばかり、午後六時頃には、船は既に朝鮮近海に近づきたりと覺しく、面白き形したる突兀たる島山一つ二つ顯はれ出した。

國が變れば地形もかくまで變るものかと思はるゝばかりの島の姿。突兀として柱を立てたることさもの、岩石の斷層面そのまゝを見るやうなるもの、或者は劔拔矗立、あるものは斷崖絶壁、突角鋭角の形を爲したものが甚だ多く、それが皆な船の左舷を掠むるばかりに一つ一つ過ぎて行くので、奇景と言へば中々の奇景。

巨文島は最早見えさうなもの、濟州島がもう近いならうなどと、猶少時見て居つたが、日が暮れて、微雨至り、甲板の上はしど／＼に飛沫に濡れ始めたので、其儘自分は下等室に戻つた。

夜、音楽室に行つて見ると、例の曹長、軍曹、計手などが處狭ましと集つて、頻りに談話に耽つ

て居た。吾班の技師柴田常吉氏は話好きで、題目にも富んで居るので、其群に交つて、頻りに面白い話を遣り始めた。自分は二十分ほど其處に居て、歸途に寺崎廣業君を其室に尋ねたが、何處かに行つて居らぬので、其儘上甲板を自分の室へと戻つて來た。船外渺茫、濃霧咫尺を辨せずといふ光景で、甲板の上は半ばほどそのじぶさに濡れ渡つて居る。階級を蔽つたツツクの雨覆の濡れたる下を佻しくくつて、兎に角に自分の室に入つて眠に就いた。

四月二十三日（土曜日）雨、後晴

朝、起きて見ると、雨がしどくに降つて居る。船は走つては居るが、此處は何處であるか、如何なる島の附近を駛つて居るか、濃霧がすつかり封して居るので、薩張分らぬ。地圖の上から考へると、今は大方双子海峡あたりを駛つて居るのであらう。

午前十時頃、二等室に風呂が沸いてるといふのを聞いて、小笠原君と二人して行つて浴した。けれど温くつて、何時まで入つて居ても出られぬのは閉口した。

此日も一二度雨を犯して音楽室に行つたが、別段これと言つて肥すほどの事も無くて過ぎた。夕暮から天氣はあがり始めて、星の光など雲の間から閃耀と見え出した。雨はもう四時頃からは

つたり止んで了つたので。——とつぶり日が暮れた頃、自分は柴田君と俱に二等室に出懸けて行つた。これは、二等室の食堂で演せらるゝ筈の講談を聞く爲めて、柴田君は昨夜もそれを聞いた相だが、馬卒の中に、中々隅には置けぬ藝人があつて、

浪花節、一口噺、義太夫

など、頗る巧みなものがあるといふ。ことに、森林黒猿の北清戦争談は實驗だけあつて、極めて面白いから行つて聞いて見たまへとの柴田君の勧めに、三等室の暗い處に居るよりはと自分は遣つて來たのであつた。行つて見ると、まだ時刻が早い故か、二等室の食堂には二三の曹長連が烟草を煙らして居るばかり、容易に始まり相にも覺えられぬので、其儘音楽室へと登つて行つて、例の面白い無邪氣なしかも際限の無い談話を始めた。なにかし軍曹は先の日から頻りにオルガンに熱中して、何うか第二軍の軍歌を旨く調子に合せ度いものと、暇さへあれば遣つて來て、あやしい拙い音を立て、居るのであるが、今も既に、自分等に背を向けて、頻りにそれに苦心して居る。傍に寄つて、『何うです？中々旨くなつたですナ』

と言ふと、

「いや、何うも合はん、三百年來跋扈せしと長く引くところが何うも合はんです」

「何うも歌の調が合はんのですか」

「いや、そんな事は無いですけれど、……一體、樂器などを弄ちる人間では無いのですからナ」
かう言ひながらも、猶厭さず、倦まずに、その拙い調を繰返して始めるのである。戶外は闇、海の色は黒く、折々碎くる波頭は白く、絶海の唯中にこの音樂室と下等室と一等室とを載せて、唯さびしく進行する船！空想の豊富なる詩人ならば、立派な傑作が出来てあらう。
忽ち喝采の聲が下階に聞えた。

「また始めたナ」

と乃村曹長は言つた。

「今夜も先は浪花節かしらん。黒猿の方を先にして呉れると好いけれど、どうも前座は拙いものに極つて居るから、仕方が無い」

これはなにがし計手。

「浪花節も面白いぢやないか。」

「いやア」

「義太夫は何うだ」

「うん、あれは中々聞かせる、三絃が無いから遣り悪いと言つて居たが、先生は餘程遣つた者に相違ない。昨夜は嫩軍記を遣つたが、中々旨かつた。」

「先生は旨い」

と傍から賛成の意を表した者がある。

浪花節、淨瑠璃を語るのは、いづれも馬卒の夥伴で、自分等と同じく三等室の暗い臭い室に居るものであるが、藝を遣るものだけ特に許されてこの二等室に出入するのである。始つたら、まア、行つて見やうと、自分は柴田君を促し立て、階段を降つた。と、熾熱燈の美しくかゝやいた中等室の食堂には、尉官、曹長、軍曹、通譯などがずらりと並んで、中央には、小造りの、瘦肉の、鼻の尖つた一人の男、これが今しも浪花節を唸つて居る。聞くと、それは岩見武勇傳、重太郎が暗陲の眞似を爲て山中の仙人に劍術を學ぶといふ一段で、父も母も其の馬鹿なのに呆れて了ふところを得得として語つて居るので、その一種古風な、野卑ではあるがしかも無邪氣な調子は聴者の耳を聳たてしめるに充分である。ことに、文句が文章に變つて、祭文のやうな調子になる所謂さわりの邊は、鳥渡口では言はれぬ可笑みがあつて、聲の抑揚、調子の頓挫なども中々よく心得て居る。一段済む

とまた一段と、何でも一夜に三段位は遣らせられるのであるが、その後が森林黒狼の新講談——即ちかれが北清にて實見したる戦争談が始まるのであつた。岩見武勇傳の後に北清事變、その反映の妙なるを自分は一方ならず興あることに覺えた。渠の語つたのは、天津停車場の苦戦、橋本少尉が奮闘して名譽の戦死をするところであるが、中々御手に入つた者で、船中の爵を散すのには、此に越すものありとも覺えぬ。その次が淨瑠璃。これは肥つた、身丈の高い、大きな男で、その聲も素人とも思へぬ太い錆た聲が出る。

其後が一口話、長歌——凡て寄席にても行つたやう。

自分は中途で其處を出て、其儘階級を中甲板へと昇つた。何たる寂寞、何たる風景。甲板の上には出て居る人の影はなく、船の前には暗碧の色を爲した小島が三つ。その波打際に當つて碎ける波の白い色も鮮かに見えるばかりに、船は其傍を快駛して居るので、帆檣の上には微かなる眉月が得も言はれぬ薄い覺束ない光を投げて、波頭のところくはさながら白銀の閃めきたかのやう。

自分は一人

舷尾

に佇立した。

この舷尾は、對島の山影を失つてから、絶えず自分の物と思ふ處となつたので、自分は日に幾度となくその附近を往來して、常にさまざまに郷國のことを考へるのを例として居た。けれど今宵のやうに、深い深い感に撲たれたことは無かつたので、自分はこの快絶なる一瞬時を以てわが世の總てに更ゆるも敢て惜くないと思つた。自分は久しく舷尾の欄干に凭つて、じつと船の進んで行く光景を見て居つたが、海の色は全く總て白銀色で、只船の波を截つて進む路だけ白くさやかに泡立ち、その縁は暗黒色を以てこれを塗つて居るやうに見られる。

自分は立つて何を考へたか。祖國のこと、家郷のこと、遠征のこと、妻子のこと、其他あらゆることが混雑と胸に上つて来て、殆ど留め度が無い程であつた。けれど最も深く、最も明かに、しかも最も痛切にわか頭腦を刺撃したのは、西南の役、即ちわが六歳の時に、御船附近の戦に名譽ある戦死を遂げたるわが父のこと。

戦死した父のことに就いては、自分は母から種々なことを聞いて居る。戦死したといふ報知が來ても、もしや生きて居て、何時かひよつくり歸つて來はせんかと久しく經つまで其念を去ることが出来なかつたといふことや、後に殘された三人の子供をかへて、不幸なる母が如何に浮世の辛酸

を嘗めたかといふ事や、父の戦死は非常に勇ましく、隊長もこれを惜むこと一方ではなかつたといふ事や、其他悲惨なることは幾度か聞かせられて、よく耳に熟して居る。けれどことに常に自分の記憶に存して忘られぬのは、父の多い遺留品の中に一つの手帳があつて、其の手帳には戦死した日(四月十四日)がちやんと書けられてあつて、下に、晴と書いてあることであつた。否、自分は現に其手帳を翻して幾度父の戦死を思つたか知れぬ。それが今、自分が軍に従ふにつけて、其日其日の感情を記さうと思つて、隠袋の奥深く藏めた懐中日記、もしやこれがある日——日記中のある日の處に、晴とか曇とか記して、それで最後になつて了ふやうなことが無いであらうか。そして、わが妻とわが子とは二十七年前にわが母とわれ等三人の孤兒との受けたやうな悲惨な運命に遭遇せねばならぬのではあるまいか。無いとは言へぬ。或は有るかも知れぬのである。自分は先の日、日記をつけやうとして、ゆくりなくこの深い感慨に撲たれ、殆どわれを忘る、ばかりであつたが、今、またこの船尾の散歩に、これを思ひ出したので。

戦死！其結果は皆われ等の嘗めたやうな孤兒寡婦の苦い味を世間の人に與へるのである。かう思ふと、軍人の戦場に趣くのは、實に不自然極るやうな心地が爲て、思はず暗涙に袖を濡した。戦死？これ、われ等が研究せねばならぬ大なる問題であると自分は少時して翻つて考へた。

蒼茫たる海、船は唯行くのである。

四月二十四日(日曜日)曇、後雨

昨夜は月の光、雨はすつかり晴れたと思つたのに、今朝はまた薄霧に包まれて、何方を見ても灰色の佻しい色ばかり。仁川の沖は昨夜の通過した筈、今は何處を船は駛つて居るであらうか。と思つて居る間に、蒼茫際限なき海はいつか島山の兩岸に見える灣口らしい處へと變つて、近づけば近づく程、何處かの港近いと言ふことが明かに想像される。仁川に上陸するやうな事は無いと極つて居る。さりとて鎮南浦に着するのには餘りに早い、何うした譯かと二三の將校に訊ねては見たが、全く知らぬのか、それとも又秘密の中の秘密として置くのか、其返答が孰れも曖昧模糊で、頓と要領を得ざること夥しう。

其疑問の決せぬ中に、船は次第に灣口深く入つて、左方の陸地の突角に、面白い形を爲た朝鮮の漁家、白き衣を着けた朝鮮人の群などが手に取るやうに靡然と自分等の双眼鏡に映じ始めた。珍らしいので、頻りにそれを見て居ると、不圖、西北に開いた大きな灣口が次第々々に顯はれ出して、蔽ひ冠さるやうな灰色の曇天に、先、見えたのが、二三隻の軍艦。

否、見よ、見よ——

忽ちにして絶大なるパノラマはわれ等の前に展げられたのである。灰色の怪しい雨雲を以て包まれたる一大湾口には、幾隻とも知れぬ軍艦が順序正しく整列して、其の楫、其の烟筒——その烟筒から涌上する黒い烟は幾筋となく天を蔽ひて、其の壯觀、奇觀、實に何とも言ひやうが無い。ことに、空はぼんやりと曇つて居るのが、また一種慘愴悲壯の情を強うせしめたので、眼に見ゆるもの總て是れ灰色、鼠色、暗黒色、碧なる海の色さへ何となく暗い一種の色を呈して居た。

海軍根據地、海軍根據地

と言ふ聲は船中に聞え渡つた。

『それにしても、此處は何處だらう！』

『根據地の所在地は？』

など、人々騒立て、其の地名を知らうとして居る。けれどある者は仁川沖と言ひ、或者は鎮南浦といひ、或者は椒島附近と言ひ、容易に其のまことの地名を知ることが出来ぬ。船の舷尾に働いて居た一人の水兵、『君は海軍でよく知つて居たらう、かうなつてはもう秘密も何も無いから教へて

呉れ給へ』と迫つた。渠は最初は知らん知らんと言張つて居たが、餘りに熱心に問ひ詰めらるゝので、遂にこれは、海州湾口で、仁川の沖を西に十五六里出たところと教へて呉れた。

海州湾——これがわが勇しい海軍の根據地。

船は愈々其の灣口に近く、近く、丁度軍艦の勢揃をして居る中に割つて入るかと思はるゝばかりに進航して、漸く一萬噸以上の大軍艦の並列して居る附近に行つて碇を下した。左舷から見ると、最初に一萬噸以上の多分初瀬艦であらうと思はれる鼠色の大軍艦が巨鯨のごとく横つて、其次に朝日型の一戰艦、それから殿島らしい巡洋艦、それから彼方は帆樫相連り、烟筒相重るといふ具合で、右にも左にも巡洋艦やら砲艦やらが幾つとなく駢列し、それがまた孰れも戦備準備で、煤烟が黒く高く其の烟筒から漲り渡つて、殆どこの灣口が煤煙と雨雲とで塞がれて了ひはせぬかと疑はれる位——壯觀、壯觀！

これがわが海軍、勇しい海軍。旅順の敵艦を撃破し、旅順の港口を閉鎖し、軍神廣瀬中佐を出し、敵將マカロフを戦死せしめた海軍であると思ふと、自分には今迄會て経験したことのない悲壯の威が胸も狭しと集つて來て、わが祖國の爲めに奮闘せる戦艦及び其乗組員に對して思はず萬歳を唱へ度くなつた。

わが船の信號臺に信號旗が擧がつたと思ふと、やがて松島艦（わが船の前に碇泊して居た）から、一隻の小蒸気が纜を切つて勇ましく遣つて來た。さてわが船の左舷をぐるりと廻つて、舷尾の方へと近寄つたが、其の小蒸汽に乗組んで居た少尉候補生らしい青年士官がふとその舷尾のところにあはれて、頻りにわが方に向つて言葉を懸ける。

「何ですか、何か御用ですか」

と二等室の甲板から自分等が聲を懸けると、やがて其少尉候補生は聲を一層張り上げて、

「今、信號旗が擧つて、御用があると言ふ事ですが、其御用を私が承りませう」

と言ふのであつた。

其旨管理部から參謀部へ通ずると、其小蒸汽を左舷の第一梯段へ廻せとの事である。て、其の小蒸汽はその命ぜられたる處へとつけて、よくもあの荒波の中と思はるゝばかり、その青年士官の姿は上へ下へと動搖しつゝ——少時其處に漂つて居たが、やがて、奥司令官を始め、參謀の肩章を帯びた將官佐官がその長い梯段を下り始めて、一人々々その小蒸汽へと乗り移つた。此時、雨は細くしぶき始めて、黒い雲と黒い煤烟とは愈々低く海波の上に舞つた。

言ふ迄も無い、これは作戦上海軍との打合せを爲すべく、司令官が自から旗艦三笠へと趣くので

ある。上陸地點の便不便、それに對する敵の防禦、海軍のそれに對する掩護上の作戦など、最も重大なる事件は、今これから正確に定められやうとしつゝあるのである。かく思つて見て居ると、小蒸汽はやがてわが八幡丸から進航を始めて、松島艦の右方、初瀬艦の左を指して、次第に遠く遠く、戰闘艦、巡洋艦の幾箇となく連れる間をも越えて、越えて、殆ど豆粒のごとくなつたと思ふ頃、これも双眼鏡でじつとこの行衛を見送つて居つた柴田君は、

「やア、あの軍艦に着いた、あれが三笠艦だナ」

「どれ〜」

「そら、朝日型の向ふに、巡洋艦が一隻二隻三隻連つて居て、それから少し右に離れたところに、小さい砲艦らしいものが横になつて懸つて居るのが見える……ねえ、見えるだらう、其向ふの大きな軍艦、あれが旗艦三笠だ」

「うん、あれが三笠か」

「それ見給へ、今小蒸汽から司令官が上つて行く」

自分は柴田君の双眼鏡を取つて、其方面をじつと見詰めた。成程其大軍艦の甲板の上には、海軍の士官らしい人が黒くなつて見えて居て、其梯段の中央を今しも人の影が五六名ほど上つて行く。

艦の舷側には、果してかの小蒸汽が……。

空想勝なる自分の心は實に限りなきの面白さを覺えた。東郷提督と奥司令官との會合、この結果は果して如何なる活劇を演ずるの基となるであらうか。日本の運命の一部は確かにこの今の會合にかゝつて居るのであるまいか。否、この光景は、他日歴史の一頁となるに相違ないのである。其の歴史の一頁の光景を目撃した自分は、何等の幸福、また何等の好運。

兎に角寫眞を撮らうと思つて、自分等は二等甲板の上に四つ切、カビネ、ハノラミツクの諸機械を据ゑて、頻りに度合をはかり始めた。けれど、無難に撮影し得たのは、二三葉ばかり、やがて參謀部の佐官から『こんな秘密な處を寫眞に撮るなどとは無神経も程がある！』と一喝せられて、其盛機械を疊ひて了つた。寺崎君も寫眞機械を据ゑたが、えらく叱られて一枚も撮らなかつたと後に語られた。

それも其等。海戰の輸贏未だ全く決せざる中に、其根據地の所在を敵に曉らるゝ程危険な事はあるまい。もし、敵がこれを正確に知り得たならば、間隙を覗つて夜襲をも懸けることも出来るし、水雷をも發射することも出来るし、それは實に豫想外の結果を來すのは知れたこと。秘密の上に秘密を加へるのも道理である。

自分は司令官の三笠艦から歸つて來たのを知らなかつたが、三時頃に

東郷司令長官

が八幡丸に訪問して來て、一時間ほど經つて歸つて行かれたといふことを後に聞いた。寺崎君は參謀、副官の將校連と、八幡丸から一番近い距離に居る初瀬艦へと訪問した。

歸つて來ての寺崎君の話に「實に、海軍は勇ましい。僕は今まであのやうな悲壯な感を感じたことはない。世間では、海軍は其の軍艦の中に矢張り平時に見るやうな立派な艦長室や、士官室や、次士官室やを備へて居ると想像して居るかも知れん。いや、我々も行く時は平日品川沖などに見物したまひのものと思つて居たが、行つて見て驚いた。實に、これ程までにして祖國の爲めに戰つて居るかと思ふと、涙が滴れたです。何うです、艦中立派な室などと言ふものは、すつかり取拂つて仕舞つて、欄干なども一つも無い。階子を辛うじて上に登ると、艦中には火藥の香が盛んに鼻を衝いて、其處此處に砲彈の痕。十五日の海戰に受けたのは随分大きく、其時の光景を想像して、自分は思はずツツとしたです。それに、夜は點火を禁じられてあるから、作業を爲るにも、丸て闇の中で、その慘憺たる光景は實に想像に餘りあるです。まア、何の事は無い、自から戰爭に臨んだやうな氣

が爲たので、あれを見ちや、海軍々人の心勞を構はずには居られなくなる』
勇しきわが戦艦！

夕暮になると、戦艦も巡洋艦も皆な舷側に水雷防禦の網を下して、一點の燈火なく全く闇の暗い色の中に包まれて了ふ。其間を燕のやうに快駛する哨艇、水雷艇。

この悲壯なる光景、何うして自分は忘れやう。

夜、二等室に行つて、昨夜と同じく講談を聞いた。十時頃になつてそれが済んだが、寺崎君とスコット會社製のウイスキーを一瓶、こつそりボーイから買つて、十二時近くまで飲み且談じた。中途から、森林黒猿氏も來て、段々話のはづんで、下等室に歸つて眠つたのは、何でもあれは二時過てあつたらう。

四月二十五日（月曜日）曇、雨、夜晴

壯絶快絶なる海州の根據地を出帆したのが、午前七時半。空は矢張り曇り勝り、をりく碧空が見えながら、しかも快晴にはなりさうにも無いといふ模様。

八幡丸が碇を巻いて徐かに進行を始めた時、遙かに根據地を顧みると、各軍艦は大抵信號旗を掲げ

て居て、それは何でも「第二軍の健在を祈る」といふ意味である相な。自分も心中にわが海軍の健在と成功とを祈りつゝ、次第に海州灣頭を離れて行つた。三十分の後には、その黒い凄じい煤烟の影も見えず、堂々と相並んだ橋の形も全くかくれて、附近は唯尋常の岩、尋常の島——この荒涼たる山陰にわが有力なる海軍が隠れて居やうとは夢にも思はれぬので。

一時間ばかりして沖に出たが、曇天は雨になつて、海を渡る風も中々寒く、宇品を發つた時の春は何處に行つたかと怪まるばかりである。自分等は一度脱ぎ棄てた外套を被て、僅かにこれを凌いだ。だが、これを以て見ても滿州の地はいかに寒いかといふことが想像される。それに航路も既に黄海の一部に近づいたと見えて、海の色も昨日一昨日のやうな美しい深碧は消えて、何處となく黄いやうな佻しい悲しい色と變つた。そればかりならまだ好いが、十一時頃から濃霧があたりを封じて、殆ど咫尺を辨ぜぬ。

それにも拘らず、船は進みに進んで、やがて鎮南浦に到着するであらうとの噂は船の各室に遍ねく傳へられたが、午後四時頃、甲板に出ると、濃霧は既に全く晴れて、船は既に入江の中に入つたと覺しく、島やら、山やら、漁村やらが兩側に見えて、海の水も以前とは一層黄い、濁を帯びた色になつた。

聞くと、もう鎮南浦は近い相で、船は今大同河口から二三里上流のところを駛つて居るとの事である。鎮南浦は日清戦役よりわが常に耳にせるところ、殊に、九連城方面に向つた第一軍は其地から上陸したと聞いて居るので、何となく早く見たいやうな氣も爲て居たのである。

鎮南浦

に到着したのは、午後五時。その港は大同江の海に入る前に最後の屈曲を爲したその一角に當つて居るので、運送船やら、朝鮮船やらが陸續として碇泊し、活動の氣が附近に溢れて居るのが一日で解る。進み入る船の兩岸、先づ自分の眼を惹いたのは、疎らに松の生えた赤土山で、其上には一箇の洋館があつて、確か米國らしい國旗が翻々として翻つて居るが、それから三百米突ばかりの丘陵が蜿蜒と連り渡つて、其麓に蕭然たる一箇の漁村。睡を凝すと朝鮮の土人の家屋に交つて、日本式の家屋が建てられてあるのが見える。漁村の海に面したあたりには、一道の棧橋が長く通じて、其附近には朝鮮苦力が運送船から頻りに物品を陸揚して居る。更に畔を右方に移すと、蜿蜒たる丘陵の盡きたるところに、一ところ野とも川とも鳥渡わからぬものが横つて居て、其猶右に、全く松樹を以て蔽はれた瘡のやうな丸い風情ある岩山が聳えて居る。思ふに、其處には朝鮮の土俗の神が祀

られてあるであらう。

朔風肌に寒く、夕暮より全く晴れ渡りたる空の深碧。午前中の濃霧は何處に消えたかと思はる、ばかりに空氣は透徹して、西の山際に春つき行く夕日の閃耀、黄なる大同の流は一面に美しい金波を漂はせて、碇泊林立せる運送船の黒く其間に浮び出でたる、如何なる名手と雖もこれを満足に描き出すことは出来まいと思はれた。願れば、夕日を帯びた連山の頂は、或は濃紫に、或は深碧に、或は茶褐色に、光線の具合によつて、種々の彩色を施して居るが、其連山の中には、わが日清戦史上忘れ難い、かの平壤の都會もあるのである。

運送船は既に七八隻来て居たが、聞けば、軍は此處で少時運送船の揃うのを待合せる相で、少くつて二三日、ことに由ると一週間位は滞在するとの事である。

夜、月漸く明かに、萬感交々胸を衝いて起つた。

四月二十六日 (火曜日) 快晴

宇品出發以來、快晴の二字を用ひたのは今日が始めて、こんなによく晴れた空は、日本では到底見ることが出来ぬ。空氣ははつきりと淨玻璃を張りたるごとく、物の影は皆濃く印して、大同江

の黄なる流は一種記すべからざる印象を自分に與へた。海州灣では暗濛たる景色の極致とも言ふべきものを味つたが、此處では明徹極る快活なる風景に接して、自分は自からわが腦の緊縮せらるゝごときを覺えた。大陸的、實際日本などにはこの荒涼、この廣漠、この明快は求めることは難いので、塞外といふ感は言ひ知らずわが世馴れざる胸を刺撃せずには置かなかつた。

上陸地點

に關しては、廣島に居る頃から浮説百出、或は旅順附近、或は花園口附近、或は大孤山附近、いや、軍は今少し突飛なことを試みるに相違ないなどと、更にその歸着するところを知らなかつた。けれど自分等は乗船しなへすれば、上陸地點は必ず明瞭になること、信じて居た。處が、乗船してからも益々不明、益々秘密、誰に聞いてもこれと分明した返答を爲る者はなく、管理部長などすらも頓と知つて居るやうな様子が見えない。噫では旅順を目的に進むといふのが一番有力で、従つて花園口附近から貔子窩界隈が今度の上陸地點であるであらうとのこと。成程、これは一番真に近い説であらうけれど、大孤山に上陸するといふ説も決して無意味ではない。第一軍の成蹟が解らぬ今日、この第二軍が突飛に懸離れて旅順に向ふと言ふのは、ちと受取り悪い話で、日清戦役の時のやうに、

第一軍の平壤が陥落し、此方面は其軍だけが澤山だと、ちやんと成算が立つた上なら知らぬこと、今日の場合ではとてもそんな思切つた事が出来ぬのに極つて居る。即ちこの軍は何うしても第一軍と連絡を保つやうにしなければ、互に危険に陥るやうなことが無いとも限らぬ。此點から推すと、大孤山あたりに上陸して、一面第一軍と連絡を保つと共に、一面岫巖、柞木城の路を前進して、敵を海城遼陽の地に壓迫するといふことは、頗る軍事通らしい觀察である。て、自分は大孤山説に傾いて居た。

それにしても第一軍は何うして居るであらうか。其の大軍は既に義州に達し、鴨綠江を隔て、敵と相對し、其斥候は絶えず互に衝突して居るとの號外は、廣島を發つ時、既に讀んで來たのであるが、今だに其の大戦は始まらぬのか。或は今時分始めて居るのではあるまいか。それとも又この第二軍の行動に待つところがあるのであらうか。

考へれば實に心細い話。

船の上の生活は相變らず暢氣なもので、二等室の甲板に行くと、右舷の風の當らぬところには、例の曹長、軍曹、計手の面々が例の圍投を組んで遣つて居つて、負けたものは、竹箆を打たれる定めになつて居る。見ると、連中も餘程上手になつて、最初から熱中して居た計手は五ツの中で四ツま

的中させることが出来る。音楽室には矢張オルガンの拙い調が聞えて居て、其室に入ると、寺崎廣業君は副官部の雇員、其他二三の人々に取巻かれて、紀念にするのだから……との口實の下に頻りに唐紙の揮毫を餘義なくさせられて居る。

自分は舷尾に立つて物を思つた。

今日は快晴の代りに、終日寒い烈しい風が吹いて、大同江の濁流はすさまじい波を擧げ、船は碇を下して居るにも拘らず、絶えず右舷に偏つて廻轉した。そして其の廻轉する度に、鎮南浦の風景が左に見えたり、連山の波濤が右に見えたりして、これがまた多少の興を添へた。何でも今日の午後の事であつたと思ふ、上陸を嚴禁されて居るにも拘らず、寺崎君が將校二三名と共に鎮南浦上陸の特許を得たと聞いたので、自分等も何うかしてその許可を得たいものと、寫眞撮影を口實に、頻りに管理部長に懇請した。けれどこれは許されなかつた。

夕に至ると、烈しい風は漸く風ぎて、波も少しは静かになつたが、黄なる河水の色は光線の加減によりて淡黄色に變し、夕日の山々は淡々としてさながら畫にても描いたやう。日が暮れると、月の光、その明かな月に乗じて、運送船の入來るもの無慮十數隻。

四月二十七日（水曜日）快晴

終日碇泊。

當分通信は禁ぜられては居るが、餘りに記事が溜ると困るから、少しなりと書いて置かうと思つて、此日始めて觀戰前記の稿を續いた。新聞社の喧しい編輯室や、決して汚い裏店の一間や、旅行中の旅店の一室や、随分色々なところで筆は執つた経験はあるけれど、船の中の下等室、八名押塞つた一隅に小さくなつて業に就いたのはこれが始めて、種板を荒縄で絡げたものを二つ重ねて机と爲し、硯を其上に置き、原稿紙を小さく丸めて、さて静かに筆を取り始めた。始めては見たが、周圍が非常に喧しいので、何うしても筆が進まぬ、一度は困つて止めやうとまで思つたが、いや、これが所謂戰地通信の困難と、勉めて其筆を續けたので……。前に當れる空氣窓、その小さい間からは、鎮南浦の風景が、船の絶えざる廻轉によつて、或は漁村、或は棧橋、或は風情ある岩山と常に少しづつ變化して見らるゝのであるが、自分は其の風景を見つゝ、終日長く如何に進まざる筆を續けたであらうか。

美しい日影、珍らしい家屋、詩趣あり氣なる岩山——自分は昨日寺崎君三浦君の鎮南浦視察の

を聞き、スケッチして来た手帳をも見せられたので、其の見るを得ざる光景がをり／＼頭楯に上つて来て、文を書きながら、色々空想を逞うした。松原の中に梅と櫻が一緒に咲いて居ると言つた、其處には美しい鳥が面白い春の調を囀つて居りはせぬであらうか。白壁造の面白い建物があると言つた、其處には世に知れぬやさしい戀が隠れて居りはせぬであらうか。ことに長煙管をくはへ、白衣を着て、悠々と街頭を歩き行く亡國の民、自分の空想はいかに深く其

亡國の民

の上に及んだか知れぬのである。

終日筆硯に親しんだので、一度も甲板の上に出て見なかつたが、夜になつてから、一人して二等室の甲板へへ行つた。運送船は今日も五六隻入つて来て、上流下流に碇泊せる燈の光は、暮れ渡つた河水に美しく映じた。陸には棧橋のあたりと思はれる邊に最も燈火の影が多く、誰やら軍歌を歌ふ聲が手に取るやうに聞える。頭を擡げると、月も既に光を放つて、空には夕陽の影が微かに、江を繞るの山々は黒く——思はず夜泊の詩が口に上りさうになる。

四月二十八日 (木曜日) 晴

終日碇泊、午前は矢張空氣窓に對して、頻りに觀戰前記の稿を續いた。昨日であつたが、寺崎君は或將校と共に折から来て居る扶桑艦へも訪問したが、今日はわが寫眞班の柴田君が其處に行く許可を得たといふ。自分は行き度かつたけれど、書き懸けて居るので、巨君に其同行を勧めた。二人は正午頃から行つて、夜になつて歸つて来たが、頻りに海軍士官の快活なることを説き、細谷司令官始め參謀長其他以下を集めて紀念撮影を爲たことを語り、最後に、閉塞決死隊の種板の現像を頼まれて来たとのこと。聞くと、今回は又第三回の旅順閉塞を遺るので、其の決死の士は扶桑艦から若干名、現に今夜あたり出發するのである相な。勇ましいのは閉塞隊、頼もしいのは決死の士。

「何でも今回遺る閉塞は餘程大規模で、成功しなければ全決死隊皆な生還せぬ覺悟であるさうな。無論、この軍の上陸運動に關係した計畫であるには相違ないので、何でも此軍の上陸する時は艦隊を以て旅順の敵の艦隊を壓迫し、港口から出られなくするのだとの事です。實際、決死隊は勇ましい、私は其人々の寫眞は撮らんかつたが、其中の豊田中尉に面會して、色々話を爲たです。死に行くのかと思ふと、實に何だか氣の毒で、其の勇ましい言葉を聴けば聴くほど涙が胸に縋つて来る

です。君の爲めに死ぬのだから、もう少しも思ひ残す所がない……などと言はれると、何う言つて挨拶して好いのか、實に返答に困つたです』

と柴田君は語り續けた。

それに、無線電線と探海燈とを遣つて見せて貰つた相だが、無線電信は中々面白かつたとのことである。

四月二十九日（金曜日）晴

終日碇泊。

手帳に拙い歌が書いてあるから、此處に擧げて見やう。

なつかしき對馬の山は消えたれど猶去りがたき船の舷尾かな

霧ふかく雨降しきりから國のいづくの沖を今か行くらん

から國のあれたる沖を獨り行くわか船かなし雨の降れれば

船窓に當れる山の影を見て春の日長くけふもくらしつ

大君のみいくさ船の煙よりかすみそむらんから國の浦

隔たりて雁だに行かぬ夕暮の海にこひしきわが妻わが子

月今宵千里隔てしわが庭の竹の葉越の花に照るらん

船にして見るぞくやしきから國の柳櫻の春のとまりを

曇り果て、日影もさくぬにこり江の帆影わびしき此夕かな

此海の夕の波をわかれ行きてつひに歸らぬ人をかなしき

ふるさとの沼のつゝじの咲く頃を潮風寒くひとり行く船

此海の歌は海州灣で廣瀬中佐のことを思つて咏んだものである。けれどもどうも尋常の別後の情に陥つて了つたのは遺憾である。ふる郷の沼の鷺、これは自分の故郷は上野國館林町で、其城沼の

岡は鷺岡の名所であるので、それを思ひ出したのである。曇り果て、日影もさくぬにこり江、これ

は、運送船の周圍を終日朝鮮船が佗しい古い楚帆を擧げて往來するさまで、ある日ある時そのやう

な佗しい景色を見たことがあつた。けれどこの帆影は日本の白帆では感情がうつらぬので、楚帆の

古い暗いのを曇天のうすら佗しいのと河水の濁つたのにと取り合はせた積である。

今夜は曇つて、あたら名月が見えなかつた。

四月三十日（土曜日）曇

同じく碇泊。

鎮南浦に来てからもう五日になる。兵は迅速を貴ぶと言ふに、軍は何を爲て居るのであらうか。こんな處にまご／＼して居る間に、露探でもあつて、上陸地點が敵に知られたり、又は航海途中を襲撃せられたりしたら、何うする積りであらうか。早く出發すれば好いになアなど、そろ／＼同じ處に居るのが倦きて來たので、彼方でも此方でも、そのやうな繰言が聞える。

二等室の寄席では、浪花節の岩見武勇傳がもう餘程進んで、昨日が重藏の返討になるところであつたから、今夜はお辻が女郎に賣られて兄の重太郎に邂逅する所であらうなど、柴田君は言つて居た。

鎮南浦には運送船が愈集つて、その盛なること、丸て支那の大きな港へても來たかと思はれる。此夜、一等室に

森軍醫監(鷗外先生)

を訪問した。醫監には、廣島で一才御目にかゝつたさき、同じ船の中に起臥して居りながら、今日まで面晤の榮を得なかつたのである。いろ／＼東京の話やら、戦地の話やらを爲したが、段々外國文學の話に移つて、マアテルリンクや、ダモンチオや、ハウフトマンや、ズウデルマンのことに就いてさまざまなる御説を聞いた。先生が獨逸に居られた頃はズウデルマンはもう「名譽」の劇を世に公にして居つたが、ハウフトマンはまだそんな人が獨逸にあるかをすら知られなかつたので、全く渠の名譽は近く揚つたのであるとの事である。「沈鐘」は無論傑作で、ゲエテのファスト以來だと評されたのも尤もだと思ふ。近作「アルメ、ハインリヒ」も中々面白い作で、最後の一節などは頗る新しい。ダモンチオか、タモンチオは「死の勝利」といふのを讀んだが、何うも餘りに細工に過ぎて、何だか文章ばかりのやうな氣が爲る。かれの傑作では、ウアクネルの事を書いたものがあるが、中々疑つて書いたものだ。けれど左程の天才であるか何うかは疑問である。マアテルリンク、あれも近頃は大分評判だが、其の評判の原因は何か他にあるのではあるまいかと思ふ。只、あの人が多く厭世作者の中に、樂天的の思想を有して居るのは、變つた現象には相違ない。

イブセンに就いても随分多く語つた。「名匠ソルネス」の女主人公の性格の不思議なことや、「幽靈」の餘りに極端なる描寫に陥つたことや、寫實派と言ひ條、何うもあまりに極端であるといふ事

や、殆ど盡くるところを知らなかつたが、『ロスマルスホルム』が一番面白い興味深い作であるといふことには自分も満幅の同意を表したので、其の新舊思想の衝突に就いての説には大に耳を傾けたのである。

それから、最後に話題に上つたのが、瑞典の詩人アウグスト、ストリントヘルヒで。その皮肉な、厭世な、思ひ切つた女人憎悪は大に吾人の思想に面白味を興へたので、『父「ユリー嬢」のことなどを繰返し繰返し語つた。先生の言はるゝには、「此間死んだ縁雨なども、今少し大いと、あれになるのであるが、何うもあれまで發展せずに死んで了つたのは惜しい事だ。ストリントヘルヒのあれは何か言つた作だが、獨逸の北境の温泉で、女が男を玩弄にして氣死せしめる處を書いたものがあつたが、あれなどは實に凄、すさまじい作で、短い者ではあるが、驚くべきある思想を其中に籠めて居る』

醫監の室は、船の右舷——自分はその迷惑をも忘れて、いかに長い長い談話に耽つたであらうか。別を告げて、甲板に出ると、船の燈火は既に少く、處々の窓は皆な暗くなつて居た。階級の下の瓦斯燈で見ると、時計は既に十時三十分。

五月一日(日曜日)快晴

同じく碇泊。

午前に聞くと、今日は一等室の下に風呂を立てるから、皆な浴せよとのこと。久しく入らぬ身體は汚れて居るので、時刻を待つて、自分は喜んで出懸けて行つた。一等室の向ふの階梯を下りて、細い間を左に入ると、其處が風呂で、見ると、其前には、入浴希望者が十人ばかりも詰め懸けて居る。裸で風呂の前に立つて、誰か出て来る隙を覗つて、そして飛込む位に爲なければ、何時まで待つても到底入浴することは覺束ないのである。仕方が無いから、一度はやめて歸らうかと思つたが、まゝよ、何うなるものかと、其まゝ裸で其中に飛込むと、折よく右の浴場から一人出て来たので、其代りに入ることが出来た。

風呂の裡

は三人四人、丸て芋を洗ふかのやう。

これも戦地の光景であらう。

否、戦地ではこの風呂をすら得ることが出来ぬであらうと思ひながら、其中に入つて居た。此日は喜ばしい日、我々よりも寧ろ司令官が何れ程喜ばれたか知れぬのは、今日のこの日！何故？

言ふにや及ぶ、此日は九連城の大勝利。

其捷報の最初に聞えたのが、午後の二時。浴後の身の心地すがくしう、二等室の甲板の上を歩いて居ると、なにがし曹長が遣つて来て、「君、快報があるぜ！」といふ。「何ですか？」と聞くと、

「今、鴨緑江で味方が遣つてるぜ！」とのこと。

鴨緑江を何でも昨夜の中に渡り了つて、今朝から本攻撃に懸つた相だ。まだ結果はよく解らぬが、大分成績が好いといふ話。ことに、第二師團方面が一番良好なる結果を収めて、もう九連城は占領したかも知れぬ。今、部長がそれを聞いて来て話して居られたが、司令官はこれを知り、非常に喜んで居られた相だ。何しろ、九連城の攻撃の結果を此處で待つて居たのだ相ですからナ」

「待つてたのですか、それは本當ですか」

「本當ですとも、……一軍の結果によつて、また何う作戦を變へんけりやならんかも知れんかつたのですから」

自分は始めて鎮南浦淹留の真相を知つたのである。

「ちや、もし、一軍が敗れたら、其援護にても上陸する計畫でしたか知らん」

「マア、そんな事てせうよ」

かう言つてなにがし曹長は去つた。

鴨緑江の戦が始つて居る！と思ふと、自分は何だか其事が氣懸りになつて、勝つて居るとは聞いて知つて居りながら、一刻も早く其後の詳報が聞き度い。もしや、其後、結果が悪くなりやせぬか。敵軍が後に廻つたといふやうな事は無いか——かう思ふと、鴨緑江の流、其向ふの連山の上に、砲弾の白く破裂するのが目の前にちらつて見えるやうだ。

まだ詳報が来ないかの十二三遍も繰返して、殆ど待あぐみの形で、悄氣て居ると、あれは確か午後四時半頃であつたらう。下等室に通ずる階梯を勇しく踏鳴して下りて来た一人の軍曹、突如、食事分配所のところにつくと立留つて、

諸君、鴨緑江の戦報

と叫んだ。

満堂皆な鳴を静めて視線を其方に向けた。

軍曹は澁谷少将(兵站監)よりの電報である旨を断りて、

第一軍今日午前九時より砲兵二大隊を以て戦闘を開始す。敵は頑強なる抵抗を爲し、激戦三時間の後、第二師團の兵は九連城を占領し、近衛師團もまた目的地を占領せり。今は只十二師團方面に於て微弱なる砲聲を聞くのみ。敵の兵力は約二箇師團、わが死傷約七百、敵の捕虜騎兵中佐以下將校十四名、鹵獲砲、野砲速射砲二十八門。

と高らかに朗讀した。

満場破るゝばかりの万歳の聲!

司令官始め、下等室の馬卒備人の末に至るまで、船には此日歡喜の情が充ち渡つたのである。海軍では勝つたが、陸軍は何うであらう、もし敗けるやうなことはありはせぬかとは外國新聞の評判ばかりではなく、内地の人々も内々心配して居つたので、此の捷報を聞いて、何んなに意を強うしたか知れぬのである。従つて、船中でも俄かに活氣付いて、もう出發はすべし! などとの噂が耳に入る。わが船の前に、錫蘭丸が斜になつて懸つて居たが、其處からは勇しい軍歌の調が聞え出した。この捷報にわが軍の士氣は大に振つたのである。

五月二日 (日曜日) 雨、後晴

昨夜は暖か過ぎて、何だか氣味が悪い程であつたが、果して夜半から雨となつて、今朝起きた時は、甲板の上がしとどに濡れて居た。愈々出發の時期が近寄つたといふ事は、昨日から既に暗々裡に人々の胸から胸へと傳へられたが、今日になつて見ると、愈々それは確實で、明日は此地を出帆するといふ話。音楽室は船員と海軍との打合せの室と爲つて、朝から事務員が紙片を携へて出たり入つたりして居る。こつそり覗くと、卓には二三人船員が寄集りて、頻りに表らしいものを作つて居るのが見える。参謀本部から監督に来て居る井口少将も何だかそはくと忙はし相に、一等室の甲板の上を往來して、折々立留つては海軍の徽帽を着けた將校と何事かを囁き合つて居る。活動の氣は到る處に充ち渡つて、運送船の數の多いこと、帆檣の林の如く立つて居ること、煤烟の凄しく颯ることなど、皆な自分の胸を波立たしめる。それに、只一日見ただけでも、昨日以來形勢が俄かに一變したことが解るので、扶桑艦の他に、今二三隻小さな軍艦が入つて来るやら、水雷艇が絶えず繰るやうに水上を駛つて行くやら、哨艇が出て行くやら、小蒸汽の傳令が頻繁に遣つて来るやら、それは實に目ざましい活動である。それに、何でも最初の

敵前上陸

に、軍からも参謀二名、工兵部長、工兵若干が海軍の陸戦隊に加つて行くとかで、其人達は既に今日出發の扶桑艦に乗込むべく、頻りに其準備に忙しい様子。

わが室の向なる工兵伍長、この人は開戦以前まで旅順に居て、新しい状態を知つて居るので、自分等は自分等の室に誘うて来てはよく其の話を聞いたのであるが、渠はこの先發隊の一人として、頭陀袋を背負ふやら、背負袋を懸けるやら、短銃を腰に着けるやら、頻りに其準備に忙殺されて居る。自分は其傍に行つて、

「何時です、出發は？」と訊くと、

「イヤ、もうすぐ行かんけりやなりません」

「上陸地點は？」

「それはまだ解らんてです。」

「もう解つて居るんでせう？」

「イヤ——参謀方には分つて居るかも知れませんが、僕などはから夢中で、何處へ伴れて行かれる

か知らんのです。」

「扶桑に乗つて行くのですか」

「え」

「面白いですな。最初の幕開が見られるですから」

「イヤ、まごころすると、何んな目に遭はされるか知れやせんてす」

「面白い話を充分持つて来て話して呉れ給へ、」

「え」

陸戦隊に加はるべく軍の先發隊の發ちしは午前十時過。自分が上甲板に登つた時には、金谷参謀と小野寺参謀とが工兵部長阿部大佐を先に立て、今しも舷側に繋がれたる小蒸汽に乗り移らうとして居る處で、かの伍長先生も莞爾々々笑ひながら、頻りに彼方此方と歩いて居た。甲板の上には、落合参謀長、由比参謀次長などが見送りに出て、成效を祈るといふやうな意味の言葉を饒して居るのが耳に入る。やがて乗込みが済むと、小蒸汽は静かに八幡丸の舷側を離れ出した。

工兵部長と金谷参謀とは小蒸汽の舷尾の一角に立つて、久しく見送の人々と互に見合はして會釋して居たが、やがて錫蘭丸の向ふになつた頃から、其姿は室内に見えなくなつて、左舷三千米突ば

かりの處に碇泊して居る扶桑艦へと向つて全速力を出して駛つて行つた。

陸戦隊は愈々出發、愈々活動——

正午少し過る頃から、雨後の空はすつかり晴れ渡つて、例の透徹なる空氣は、空の色を一層深碧ならしめ、物の影を一層濃厚ならしめ、さらぬだに美しく晴れ渡りたる一帶の山影はさながら印するばかりに黒く紫に見ゆるのに、折から吹起つた烈風は更に四面の風景をして名狀すべからざる壯大なる趣を生ぜしめたので、

大同江の濁流

の渦を巻いて奔跳する光景、まことに大陸的とはこれを言ふのかと思はるゝばかりになつた。

餘りに空氣が透徹して、物々の影が濃く美しく見ゆるに我から見惚れて、自分は一人舷尾に立つて居た。風が烈しいので、波濤は濁流のすさまじい音を立て、碇泊せる船舶といふ船舶は皆なそれに伴つて左右前後に廻轉して居る。江山の色は飽まで深碧に、鎮南浦一帶の地には萬物の風に動くさまが歴々と手に取るやう。

其怒濤の中を勇しいのは水雷艇。何のこれしきと言はぬばかりに右から左へと駛走して、時を問

に前後に見えなくなつて行く。それから思ふと、情ないのは、朝鮮傳馬、日本傳馬で、現に、伊勢丸から三名の軍人を載せて出て來た一艘の舟は、跳り揚り湧き上る波濤の畝を乗切り兼ねて、一歩出ては一歩退き、一歩漕いでは一歩押流されるといふ始末、あれで何時彼岸に達することが出来るであらうなどと見て居ると……不意に、

『そら、扶桑艦が出て行く！』

と左舷で叫んだ者がある。

慌て、其方を見ると、果して！。あゝ何たる壯觀。流石は海軍の戰艦である。この荒れ渡り狂ひ渡れる波濤を物の數ともせず、烟筒からは薄黒い烟を靡かせ、帆檣には艦長旗の長い旗を翻がへしつゝ、悠々と靜かに靜かに動き出して行く。あゝ第二軍は愈々動き始めたのである。各艦から萬歳の聲が嵐のやうに聞え出して、それが遠く沖まで續く。

見て居ると、始めは徐かに、徐かに、さながら虫の這うやうに進んで行つたが、段々それが速力を出し始めて、伊勢丸を過ぎ、信濃丸を掠め、目尾丸を通り越した頃には、もう餘程早くなつて、其の烟筒からは盛に煤烟の颯るのを見た。一分、二分、五分と經つ中に、其勇しい艦の影は次第に

遠く遠く、果ては全く其の烟筒から吐出す烟に包まれて了つたと思ふ間もなく、其の黒い烟すら、微かに、微かに……

丁度それが午後三時。

扶桑艦は第二軍の上陸を援護する艦隊の旗艦で、それに従ふのは、宮古、海門、赤城、摩耶、筑紫等其數大凡二十八艘、それに水雷艇十二三隻附いて居るのであるが、それが今日は大同江口、椒島の邊に假泊して、そして明日はわが第一船團の集るのを待つて、軸艦相含んで、勇しく上陸地点に向ふとのことである。

鎮南浦は今此の活動の幕を演じやうとして居るにも拘らず、烈しき風そのまゝに、漸く日は西山に暮き始めて、前に展けたるは、夕陽の美しい光景——

大同江の水がから思ひ切つた濁流でなく、空氣が乾燥せず、日本のやうに不透明であつたならば、決して此の美しい夕陽の大景を觀得なかつたであらう。山、濃紫の山、其處には今しも夕日が落ちやうして、其周圍には紅色と言つても過ぎては居らぬ美しい色が刷毛で塗つたやうに彩られて、其返照が黄く濁つた河水の上に一種状すべからざる色を閃めかして居る。其の閃耀の上には朝鮮船小蒸汽などが黒く黒く浮出て居て、その向ふに帆橋林立、疎松を戴いた長い丘陵——鎮南

浦の市街は、ところ／＼に美しい白壁を點綴しつゝ、さながら晝のやうに展開せられて居るので。

夜——二等室に行つて、例の浪花節と講談とを聞いた。それから三浦北峽君と遅くまで甲板の上で、いろ／＼な事を語り合つた。十七日の月、黄い佻しい月は、自分の寝やうとする室の空氣窓から美しくさし込んで、如何にしても寝られぬ。

まして明日は出發！

それにしても軍は果して何處に上陸するであらうか。大孤山と思つたが、何うも左様ではないらしい。何でも今日の部長の口振では旅順方面を目的にして、貔子窩附近にても上陸するらしい。さてそれはそれとして、其の上陸地點に敵は防禦を施して居りはせぬのであらうか。わが軍の上陸する處に全力を集めて忽ち盛なる戦闘を開始するようなことは無いであらうか。決して無いとは言へぬ。船の上から戦闘準備をして、強行上陸を爲なければならぬかも知れぬ。かう思うと、壯烈なる感が烈しく胸を衝いて湧いて来て、何うしても眠られぬ。いつそ何も思ふまい、何うせ好んで自から死地に就いた身——何も思ふまい、思ふまい。

明日は出發！

五月三日（火曜日）晴、風、夜雨

拙いハスケットの朝飯を食ひ終ると、もう碇を巻く音が頭上で聞える。愈々出發！

急いで甲板に上つて見ると、碇泊して居る運送船は孰れも出發準備で、各艦の煙筒からは常よりも黒い煤煙が盛にのぼつて居る。昨日船員からこつそり第一船團表なるものを貰つたが、それには今日出帆する船の名、順序、等が詳しく記されてあつて、隻数は總て二十三隻、自分等の乗れる第一八幡丸は何でも十八番のところ記されてあつたのを記憶して居る。けれど鎮南浦を出る時は、まだ左様正しく列を作つて進航しては行かぬので、第一八幡丸なども單獨に其の久しく滯留せる處を

解 纜

したのである。

それは午前八時であつた。

今日も昨日に劣らぬ快晴、朝から寒い西風が吹いて、沖に出てから暴れなければ好いがとの人々

の話。けれど、何と言つても時がもう五月、暖かい春であるので、甲板に出て居る人々は多くは双眼鏡を手にして、一面鎮南浦の山水に別離を告げると共に、一面新しい珍らしい風物の顯はるゝのを指點して居た。鎮南浦の港灣、市街、埠頭、風情ある岩山などは一分毎に次第々々に遠くなつて、三十分程経つて顧ると、其方面には唯船舶の煤煙の黒く打籠つて見えるばかり、もう山の影も櫛の影も遠く彼方に没し去つて了つた。大同江の兩岸は此附近に於て最も廣く、丸て入江か何ぞのやうで、これが川とは何うしても思はれぬので、ことに兩岸の山の峽に俄かに顯はるゝ數多の漁村、あれ彼處に白衣の朝鮮人が居るの、其處に漁舟を漕いで居るものがあるの、やれ朝鮮婦人が見えるの、やれ馬が遊んで居ると一つ一つ目送して居たが、突然、

「彼處に白く見えるのは何だらう」

と巨君が問うた。

「何處に？」

「そら、其處に、其の岩の角の、山陰のやうになつて居るところに……」

成程其山陰に簇々と白く——双眼鏡で見ると、それは櫻の花。

「櫻かね？」

「櫻とも……今満開だ」

春、實に春だ。よく見ると、櫻ばかりではない、畑には黄菜の花、桃の花。江流の緑はえも言はれぬ趣をこの下り行く兩岸の山々に添へて、これが戦争に行く船でなかつたなら、悠々旅行して仔細に風物の美をたへることが出来る身であつたなら。

三時間程駛ると、もう大同江の河口が近く、見渡す彼方、渺茫際限なき大海の鬚髯を認めることが出来る。それに、風は愈々烈しく、蒼い波の白く碎けるのが益多く、船の動揺も次第に強くなつて来た。段々椒島附近に至ると、海軍の水雷艇が幾艘ともなく其の荒れわたる怒濤を犯して進航するのが見え出して、その勇ましさと言つたら無いので、寺崎君三浦君はスケッチ帖を手から離さず、わが寫眞班はそれ其處それ彼處と、カヒネ、四ツ切の機械を忙しく運び廻るのであつた。

實際、此の椒島附近の光景、これはわが從軍中忘るべからざる活畫圖の一つで、海軍の軍艦が水雷艇と相前後しつゝ、勇ましくこの怒濤の中を航走するさまと言つたら、それは中々形容するに言葉が無い。蒼い、蒼い、凄し程蒼い水の堆積には數限りも無い白い高い烈しい波が碎けて、その軍艦、ことに水雷艇には、ある時其波濤のうねりが高く其甲板を洗ひさうになる。先づ第一に、海門艦、第二に、宮古艦、第三に、摩耶艦、第四に筑紫艦とそれが正しく縦列を作つて、極く低い速力で走

つて行くと、わが第二軍司令部を載せた第一八幡丸はそれに添うて全速力を出しつゝ、一つ一つそれを追越して進んで行く。

壯觀、實に壯觀。

椒島附近で二十三隻の運送船が集合する筈であるので、わが第一八幡丸は其處に行つて、少時、後れた船の集つて来るのを待つて居た。常陸丸、信濃丸、目尾丸、觀音丸、伊勢丸、汕頭丸、加賀丸、鎌倉丸など、次第々々に集つては来たが、風が烈しく波が高いのと、碇泊するやうな好い地點が無いのと、餘り近く寄つて衝突する恐れがあるのとて、孰れも皆五百乃至千米突の距離を保ちつゝ、鼎の沸くがごとき怒濤のどよみの中に處定めず漂つて居るので、進んだかと思へば退き、退いたかと思へば進んで、一つところを果ては何遍ともなく回轉し始めた。——見ると、わが船は何時か大同河口を外れて、椒島は遠く後になつて了つた。この荒海を、この怒濤を何うして乗切ることが自分先程から其の結果を見て居つたが、大海に出ると、船の動揺が俄かに烈しく、ことに上下動の大きなのを食つて、自分はしたゝか酔つて了ひ、如何にしても甲板の上に出て居られぬので、餘義なく二等室の某曹長の室に藻線り込んで寝て了つた。

眼が覺ると、日影が前の窓からまともに差し渡つて、時計は三時、船は相變らず烈しい動揺！

「餘程沖へ出たてですか」と傍なる計手に訊くと、

「いや、まだ、一つも先へ出はしません。先程と同じ處に漂泊して居るです」

「何うして？」

「船員に訊くと、何うもこの烈風では、ちと航海が難かしい相です。何でも今、海軍と交渉中だとかで」

「それぢやまだ先程の處に居るのですか」

「え」

と言つたが、更に言葉を續いて、「まあ、鳥渡甲板へ出て見給へ。先程から見ると、それア、船が非常に集つて來たてですが、評議が一決せんのて航海が出來ず、さりとて此附近に碇泊する處も無いので、此の大同河口から椒島一帯の海には、運送船が鼎の沸くやうな怒濤の中に漂泊して、それが一つ一つどうく回轉を遣つて居るですよ」

自分は船暈を強めて冒して、其儘甲板に上つて見た。成程これは奇觀—三十隻近い船が蒼い白い沸くやうな荒海の中に漂つて、絶えず互に衝突を恐れながら、面白く回轉して居る。第一八幡丸は先程は一番先頭に出て居たが、今は却つて河口に近く、沖には四五艘の船がぐるぐる回轉しつゝ、漂つ

て居るのが見える。海軍の艦隊は今にも出發しやうとするばかりに、外海一帯の線を縦列を作つて整列して居た。

實際、此日の波濤は高かつたので、これを犯して行けば行けぬことは無いのであるが、唯一日後れる爲めに、この危険を犯す必要は無いと言ふので、折角出懸けた運送船を今一度大同河口に戻すことゝなつたのである。

その

假泊の地

として選んだのは、大同江河口の左岸、山嶺が包擁して、風を避けるには最も適當なる處であつた。で、三時から四時五時の間に、運送船は皆な其地點へと集合して來たが、狭い處に多くの船舶が懸るのであるから、其の碇泊せる船と船との間の距離が頗る近く、相對して言葉を交ゆることも出来るばかりであつた。第一八幡丸は宮古艦と面し、其向ふに孟買丸、常陸丸、汕頭丸、木曾川丸、鎌倉丸等艦を含み船を連ねて、實に平時に見るべからざる壯觀!

夕暮になると、烈しい風は全く止んで、海も亦大に其の白い波頭を藏めた。自分は折角の出發が

ゆくりなき風波に逢つて、かゝる處に假泊せざるべからざるに至つたのを此上なく遺憾には感じたが、しかし、この静かなる山陰の假泊の光景を忘るゝことが出来ぬので、各船皆ひっそりと烟も舉げずに碇泊して居るさまは、言ひ知らず自分の胸を動かした。

夜は各船皆點火を禁じ、空気を閉ぢ、頗る嚴肅なる警戒を加へた。それにも拘らず、二等室の食堂には、一穗の蠅蠅の下に、かの浪花節、かの講談!

五月四日 (水曜日) 曇、後晴

昨夜二等室よりの歸るさ、空は曇りて、細雨の絲のごとくなるのを知つたが、今朝起きて見ると、甲板の上はしとどに濡れて、しかも雨は晴れて居る。静かなる朝! 自分はこんな静かなる朝の光景を見たことは無い。鶏の聲もなく、漁夫の騒ぐ聲もなく、機械の轟き、劍鞘の響もなく、かくて静かに明離れし朝! 各船皆な鳴を静めて、些の音をすら立てぬのである。

自分等はこの假泊の光景が餘りに面白いと言ふので、活動寫眞の機械を船軸の甲板の上に組立て、廻轉式を用ゐながら、頻りにそれを撮影し始めた。恰も好し、此時孟買丸は右より左へと回轉して、寫眞撮影の上に此上ない面白い材料を興へて呉れた。

朝食を終ると、税所砲兵監(篤文)から使者があつて、一度自分に逢つて置き度いとのこと。自分は廣島で、編輯局の坪谷君の紹介状と共に刺を通じて置きながら、しかも未だ面晤の榮を得なかつたのである。行つて見ると、砲兵監は船の左舷の甲板の藤椅子にもたれて、副官らしい人と頻りに話を爲て居られたが、自分が行つて挨拶をすると、傍の椅子を指してそれに腰を懸けよとのことである。て、色々御世話になるといふ事やら、北清の時、坪谷君が一方ならぬ懇情を受けたといふ事やら、大凡二十分ばかり物語つたが、上陸してからも度々遣つて來給へ! と別るゝ時。

山陰に假泊した運送船、それが再び活動し始めたのは、午後一時。矢張風は少し出て、海は多少暴れては居たが、さう何時まで延ばしては居られぬと、軍は愈々活潑なる運動を起したのである。

河口を出ると、船團は直ちに其の行進序列に就いて、第一、木曾川丸、第二、汕頭丸、第三、鎌倉丸と、漸次に先へ先へと進んで、いよいよ第十八は八幡丸、後から信濃丸と伊勢丸とが續いて來る。

沖に出ると、波濤が頗る高い。自分は少時船船の行進を見て居たけれど、何うも頭惱が眩惑して、久しく甲板に出て居られぬので、其儘自分の室に戻つた。て、二三時間も狭い汚い臭い室に呻吟して居たらうが、何うも船の航進の光景が見度い、一生、否これから何百年経つても見られるか何う

か解らぬのを、船位で見損うのはいかにも無念と、眩惑する頭橋を抑へ、ひよろつく足を踏占めつゝ、再び二等室の甲板へ出懸けて行つたのは午後の四時。

かう思立つたのは虫が知らせたのであると言つても好い位、自分の眼には其時いかに面白い光景が映つたであらう？

船の行進序列

に就いて、一つ一つ直線に並んで行く時には、多いければ多いほど最初から最終まで一目の中に入れて了ふことが難かしいのであるが、今や恰も好し、船團が西から西北へと大迂回を爲して居る處で、前には十二三隻の大運送船が煤煙を漲らし、怒濤を蹴立て、進んで行くさまが手に取るやうに見えるし、後にも亦十五六隻の船舶が西へ西へと差し来て、今曲り懸けたのが、すぐ自分の前なる第二十二観音丸。詳言すれば、この全船團が恰もその中央を突角として不等邊三角形の二角を畫いて居るのである。そして、外海の方はと見ると、一隻、二隻、三隻、四隻、約九隻ほどの海軍の軍艦が正しく縦列を作つて、この第二軍を掩護して行くさまが勇しく指點せられる。海の色は飽きて深碧、波濤の山は白く湧き立つて、見捨て、來た島山は早雲烟香渺の中に没しやうとして居る。

何等の壯觀

「寫眞屋さん、何うした？此の景色を撮影さんでは仕方が無いぢやないか」と傍なる通譯が言つた。

本當に此の光景、この盛なる光景を撮さぬ位なら、此の第二軍に眼いて來る必要はない。で、自分には眩惑せる頭橋を強めて押へて、二等室の各室毎に、柴田君は居ぬかと訪ね廻つた。漸く柴田君を和崎曹長の室に見付けて、あゝ、君、非常に好い景色だ、一枚撮つて呉れ給へと揺り起すと、いや、もう眩つて了つてとても駄目！とのこと。意氣地が無いぢやないかと何とか頻りに勵まして見たけれど、先生すつかり船に眩つて了つて、何うしても駄目！。非常に残念に思つたが、何うも爲方が無いので、自分ではせめてよく見てだけでも置かうと再び甲板の上へと出た。

何時の間にか八幡丸は既に針路を西北に轉じて、見ると、自分の船から後三番目の船が今しも舵を轉じやうとして居る。五分十分、前の線が段々長く、後の線は次第に短く短くなつて來るので、其の進航のバノラマは何と言つて好いか狀するに言葉が無い。

「實に何とも言へんですナ」

「壯觀極る！」

「あ、寫眞屋さん、何うしたんだ、撮さんのかね」

と他の計手がまた言った。

「先生、すっかり眩つて了つたです」

「眩つた！意氣地が無いナ」

見れば見る程忘れ難きこの光景。風を帯びたる空は美しく晴れて、閃々たる日の影は外海の軍艦の三隻目の處に眩い金波を湧かせて、全船團の左舷は皆その光を帯びて輝き渡つて居る。海のとよみはさながら終古の戦闘を意味せるかのごとく、深い碧のこの大洋は、風を受けて、丸て鼎の沸いたやうに波が立つ。

自分はいかに恍惚として此の大觀を望んだであらうか。自分は船眩をも何にも忘れて了つて、唯それに見入つたのである。一時間経つて、全船團は悉く針路を轉じ、再び元の直線に戻つたのであるが、其時航走里程針を検すると、椒島を發つて、今丁度十三哩四分。

波が高く、船の動搖が烈しく、再び烈しい頭腦の眩惑を感じ始めたので、自分は其儘船室に入つて横に倒れた。

空氣窓からは、絶えず大海のどよみの影が映つて、それを見る度に、自分は全船團の航路を空想

しつゝ、いつか華胥の國の人と爲つたのである。

此時既に上陸地點は略々それと知られたので、船員などの口から推して、何うしても鷄子窩の西方二三里の處にあるのを知曉することが出来た。聞けば、其地點には明朝黎明に到着する相て、軍艦は今夜の中に其附近に集合するとの話。

愈々幕が開くのである。

それにしても、其幕はいかにして開かるゝであらうか。晴か、雨か、はた又生か死か。

五月五日（木曜日）晴、

遂に幕は開けたので——自分は眼が覺ると、直ちに甲板の上へと出懸けた。まだ曉の五時、漸く夜が明離れたばかり、甲板の上には船員が一人出て居るのみであつた。けれど船の右舷には岩石の島やら、高い山やらが見え出して、遼東半島、わが久しく夢にのみ望んだ其大陸も今は數里の處に近づきつゝあるに相違ない。船員に、もう上陸地は近いですがと聞くと、いや、よくは解らなくて、丁度今此處等を駛つて居るのでせうと二萬分一の海圖を示して呉れた。

見ると、果して鷄子窩の西南約五六里、其處に長山列島、裏長山列島等の島嶼が星のごとく羅列

して居て、船の駛つて居る所は、何でもその光祿島と書いてある附近、上陸地點はそれから二里程奥の、其處に鹽大澳と書いてある處である相な。敵が居れば、今朝は早くから砲聲が聞える筈であるが、未だにそのせぬ處を見ると、或は全く防禦が無いかも知れぬなど、言つて居た。今日も非常に快晴で、風は少しはあるが、波は左程に烈しくも立たぬ。朝日の昇る前、静かなる海の色は藍を溶きたるがごとく、空氣の清徹なること、實に此上もなく愉快である。或は壁を立てたる如き、或は古城の斷崖を斜にしたるごとき、或は羅漢の禪に入つたごときさまさまの形したる島嶼の間を抜けて、船は猶進むこと一時間。先發の船舶の煤烟の黒く簇々と靡けるあたりは、即ち勇しきわが

第二軍の上陸地點

茶褐色したる陸は遼東半島。

六時、七時、聞えるか聞えるかと耳を敬て居る砲聲は未だに聞えぬ。見ると、奥司令官を始め、落合參謀長、由比參謀次長、稅所砲兵部長、森軍醫部長、山梨、石坂、鈴木の諸參謀は既に一等室の甲板に綺羅星のごとく並んで、望遠鏡を手にしなから、頻りに形勢を見て居られる。

午前八時

「敵は居らんかも知れんよ」

「何故」

「何故って、七時には扶桑艦から陸戦隊が上陸する筈なのに……未だに砲聲が爲ぬところを見ると、大したことは無くつて上陸が出来るかもしれない」

「それは結構だ」

「味方には結構だが、餘り飽氣ないぢやないか。あれ程敵前上陸々々々と騒がせられたのだから、一日位砲聲の鳴物が入つても好いのになア」

「敵は何うしたんだ、馬鹿な奴等だナア、こんな處におめく上陸されるとは！」

色々語り合つて居る間に、船は愈々進んで、上陸地點の光景が愈々明かにわれ等の眼に映じて來た。茶褐色の大陸、それが弓弦を張つたやうに長く連つて、其右の一角が約五六十米突の高地を起しつゝ、長く海洋の中に突出して居るのが先目に附く。それが所謂尾角なるもので、其れに對して尤太なる一つの島！其島から稍右に偏つて、大きな丸い灣が形成されてあつて、其左に周圍一里もあらうかと思はるゝ小さい島があるが、此の附近が第二軍上陸地點として選んだところで、愈々近寄

ると、其灣には先着の船舶の煤烟が勇ましく盛んに渦上して、海軍の小蒸汽が既に織るやうに往來して居る。

第一八幡丸がこの多い盛んなる船舶の中を通過して、扶桑艦の北百二十米突の處に碇を下したのは、あれは八時二十分頃で、其時には、各船から既に盛なる大輸送が始められて居た。勇ましいのは扶桑艦！さながら巨人の天地を睥睨するごとく、烟を立て、勇しく碇泊して居るが、先づ自分等の眼を惹いたのは、其周圍に國旗を懸した小蒸汽、傳馬等が蟻のごとく密集して居る光景で、それは第一に上陸した陸戦隊である相である。何たる偉觀であらう、大旗小旗、それが朝風に翻つて、絶えず兵士の上陸して行くさまは。(寫眞の五)

扶桑艦の周圍には、せいろ丸、旅順丸、目尾丸、信濃丸、孟買丸が碇泊して居て、それから一時間程も経つと、孰れの船にも何處にあの傳馬あの小蒸汽が隠れて居たらうと思はるゝばかりに集つて来て、頻りに兵士の上陸を始めるので。

大輸送が忽にして開始せられた。

上陸地點は此灣の北西正面に位して、前に聳えて居るのは五十米突ばかりの裾の長い、茶褐色の山。これは臺山と呼ばれて居るのであるが、午前九時頃になると、其山の丁度麓になつて居る荒磯を

目覚めて、上陸しやうとする兵士が、股、肩あたりまで水に浸して、頻りに徒渉して居るのが認められる。

否、其一帶の地は時の間にわが兵士の黒い影を以て蔽はれたので、岩の一角、斜阪の一角に隊を組み列を作つて、戦闘準備のまゝ、號令の出るのを待て居る。

八幡丸の甲板、其處には今乗船者の總てを集めたと言つても差支ないの、馬卒備人の末に至るまで、双眼鏡を人から借りて、其形勢を展望するに怠らぬ。やれ、山の上を兵士が登つて行く、やれ、あの岩角の處に一中隊ばかり黒く固まつて居る、やれ、また傳馬から下りて徒渉を始めた……と喧しく評判して居たが、不意に、

「國旗！國旗が」

と叫んだ者がある。

「ヤ、あの山の上に國旗！國旗！」

「どれ、見せろ！」

「早く、早く」

と一方ならぬ騒動。

見ると、成程其の臺山の絶巖に白い、榜柱のやうなものが立つて居て、其上に懸れるは堂々四表を照せる

わが日章旗

誰か萬歳を三唱せざる者があるべき。これを以て推すと、この方面には、敵は存外兵備を置かず、わが軍は一兵を啣らずして、この遼東半島の一角を占領し得たものと想像せらる。それにしても其の臺山の彼方にはいかなる光景が展開せられてあるであらうか。わが兵は隊に隊を組み、列に列を作りて、盛なる前進運動を起して居るのに相違なく、敵兵も亦如何に防備を施して置かざりしとは言へ、附近の兵力を集合して、全力を此方面に擧げて来るかも知れぬので、何時絶大なる戦闘が開しせられるかも知れぬのである。と思ふと一刻も早く上陸して、其臺山に登つて見度い、其處から遼東半島の光景が展望し度い。で、先頭上陸の許可を由比參謀次長に請うたが許されなかつた。

自分は終日いかに長く、一刻も早き上陸を願ひつゝ、周圍に起れる盛なる大輸送の光景を見てあたらうか。支那近海の波荒く、淺瀬多くして、良好なる上陸地點の無いのは、以前より知れたことであるが、この附近がまた特別の難場、特別の怒濤、特別の淺瀬であるので、輸送の困難は實に見

るに忍びぬ位。海軍の小蒸汽が傳馬を曳いて岸近く連れて行つて遣つても、綱を放すと、すぐ流される、艦も舵も利けばこそ、忽ちにして向ふの島に漂着するといふ始末。であるから、上陸するには、好く満潮の時刻を料つて、小蒸汽が傳馬を最も岸近き邊（約百米）まで曳いて遣ふことの出来る時を以てしなければならぬ。けれど其満潮の時刻と言ふのは極短かいので、ある船などは夜半にその一部隊を上陸せしめたとの事である。其上、生憎、烈しい風が逆吹いて、波濤も亦頗る高いので、海上に浮んだ傳馬は丸て木の葉のやう。輸送を完全に遣ふことが出来ぬばかりか、自から其船の進退に困つて居る。後に上陸してから、ある船頭から聞いたには、「實に、この支那の海の底波の荒いのは呆れて了つたです。見た處は左程荒れて居ない様子だから、船を出すと、忽ち流されて了う。丸て何だか船の底にある重い錘がくつ付いてあるやうで、如何にしても消ぎ切れな

い。私等は海では、紀州の悪灘を乗切つた事もあるんだが、今度といふ今度はえらく弱らせられま

した。それに、將校が私の艦の進まぬのを見て、貴様は船頭と言つて志願して來たのだが、實は艦などは操つた事も無いんだらうと言はれたのには冷汗が出ました。實際、えら海ぢや」

かう言つて居るのを聞いた。であるから、海上に浮んで居る傳馬は孰れも皆なそれ自身の進退操縦にのみ氣を揉んで、到底充分なる働きを爲ることが出来ぬのであつた。それでも人間の力と言ふ

者は恐ろしいもの、何うしても今日の中にある部隊を上陸させなければ、完全に防備を布くことが出来ると言ふので、各船、各輸送指揮官とも大決心で、午後には、陸兵を満載した小蒸気、傳馬が國旗を風に翻しながら、曳々聲で、陸續として濁悪なる波の上に浮ぶのを認められた。

見て居ると、孟買丸、信濃丸、常陸丸などは最もそれに全力を盡して居るもの、如く、其船の右舷左舷には、短艇、小蒸気、傳馬が幾艘となくつ付いて、兵士の隊を爲して梯段を下りて来る數、それは實に夥しい。砲車、馬匹、この輸送が又更に困難を極めて、滿船悉く上を下への騒動。それにも拘らず、其日は第三師團方面に於て約一旅團半、一師團方面に於て同じく一旅團、及びそれに伴ふ必要の砲車馬匹若干を上陸せしめ、其大部隊は海岸三四里の處に警戒防備線を張り、其前進隊は東清鐵道の線に向つて出發したとのこと。

此の混雜、この繁忙、この騒擾——これも其儘に夕日は落ちて、夜の幕は地平線上に濃紫に浮き出て居る遼東の名山大和尚山から懸けて、次第にこの一帯の荒涼たる海灣に垂るゝので。

夜、聞くと、此朝海軍は別働隊を以て鏡子窩を攻撃し、以て牽制運動を行ひたるに、敵の騎兵二百、火を市街に放ちて去り、午後一時に及びて、清民白旗を掲げて來り、市民一同の保護を托して去つたとの話。

五月六日 (金曜日) 晴

午前十一時——

自分等は辛うじて本船に歸ることが出来た。

怒濤の中に三時間の漂泊

船量どころか、自分は殆ど生命の危いのを覺えたのである。それにしても、短艇に乗つた一組は、安全であるか、何うか。

自分等の上陸を企てたのは、午前八時。昨日以來絶えず上陸を煩く迫つたので、橋部長もそれでは大越副官と一緒に上陸し給へと許可して呉れたので、一行は大喜悦。これにて久しく渴望して居た陸地を踏むことが出来る……と寫真機械を運ぶやら、種板を荷うやら、大騒ぎをして、漸く八幡丸右舷の小蒸気に乗移ることとなつた。短艇には、大越副官を始め其他二三の管理部員及び吾班の巨君が乗つたが、荷物を積卸すやら何やら彼やらを爲て居る間の小蒸気と短艇との動搖！其間に既に自分等は一方ならざる船量の頭腦に押上げて來るのを覺えたので、ある時などは、殆ど船が微塵にな

つて、身は海中に飛ばされはせぬかと思つた位。それも漸く濟んで、本船を離れると、頭上を壓して高い船の欄干には、多くの知つた顔が下を覗いて、我々の弱つたさまを見て笑つて居るのが歴々と認められる。けれど小蒸汽が進行を始めると、動搖は稍静かになつて、あれが孟買丸、あれが信濃丸などと笑つて指點する元氣が出て來た。宇品を出發して以來、十六日乗つて居た八幡丸、或は海上風波の危険、或は敵艦襲來の危険を恐れながら、しかも恙なくこの上陸地點に着たばかりではなく、此の危険なる上陸地點に於ても、さしたる敵の抵抗もなく上陸するを得るとは、何等の好運、何等の幸福……など、語りながら、別れ行く船の方を見返り見返り、進んで行つたが、四十分ほど経つと、段々海岸の岩石も明かに、森山の背面に駐屯して居るわが軍隊の光景も分明見えるあたりまで近寄つた。

約三百米突の距離。

淺瀬で、小蒸汽はこれから先へ出ることが出來ぬので、先づ第一に、曳いて來た短艇に自由行動を取らせ、さて其處等に傳馬が無いかと見渡した。見ると其附近には、右の方百米突ばかりの處に一艘、其向ふに一艘、それから左に小蒸汽が碇泊して居て、其の舷尾に、一艘覺束なく漂つて居るのが認められる。て先、最初に右の傳馬を呼んだが、(橋部長は岸近く行つたらどの船でも好いから呼

んで乗れと命じたので)返事が無い。船頭が見えて居りながら返事を爲んとは怪しからんと一層聲を大にして叫んだけれど、風の烈しいのと、波の高いのとで容易に通ぜぬ。詮方が無いから近くに行くと、船頭先生、舟の中に隠れて了つて呼んでも叫んでも出て來ぬ。仕方が無いから其の向ふの一艘を呼ぶと、これも最初は挨拶を爲なかつたが、餘り熱心に呼ぶ者だから、漸く顔を出して、これは信濃丸のだから駄目だ!といふ。軍司令部の上官が是非上陸せんければならぬのだから、と威嚇して見ても、矢張不得要領である。小舟が無くては何うしても上陸が出來ん、かくと知つたら、短艇の方に乗るのであつた!と以前別れた短艇は?と見ると、これはそもいかに、それも後へ後へと約二百米突も流されて居る。自分等も既に彼是二時間近く荒海の中に居るので、船は揺るし、寒くはなるし、實に此上もなく弱つて了つた。けれど、此儘歸るも馬鹿馬鹿しい、今一度小蒸汽の方を呼んで頼んで見やうと、態々遠廻りをして、其附近に行つたが、此處も淺瀬で其舟の處まで行くことが出來ぬ。其處で、自分の小蒸汽の隊長は聲を限りに呼ぶ、叫ぶ、向ふの小蒸汽に水兵が出たので、手旗信號をするといふ風に、非常に盡力して呉れたけれど、これも矢張言を左右に托して不得要領。其中には段々潮が引いて來るので、小蒸汽の動搖は烈しくなる、船が揺がして頭腦を擡げて居られなくなる、これでは仕方が無いから、一先歸りませうといふ。

残念ながら針路を後に戻さうとした時、大きな波濤が遣つて来て、悉く船の左舷を洗つた。

其後、波濤を幾度食つたか、ある時などは殆ど轉覆しはせぬかと思つた事すらあつたが、それでも小蒸汽の難有さには、何うやら彼らやら本船近く歸つて来て、其甲板の上に馴染の顔を見た時は、丸て蘇生したやうな心地が爲た。幸うじて本船に上つて、これこれと部長に話すと、困つたナア！實に困つたと部長も言はれた。

別れた短艇は遠く海に流されて、一時は何うしやうかと思つた相であつたが、幸ひ其附近を海軍の小蒸汽が通つたので、漸く泣附いて、曳かれて其日の午後一時頃に歸つて来た。巨君が言ふには「實に酷い目に逢つた。海軍の小蒸汽が来なければ、何處に流されて了ふか解らんので、大越さんなども随分心配されたです」

これではとてもいかん、大々の決心を以て事に當らんければ……と部長も大に決する所があつて、其日、海軍から水兵五六十名を借りて来る、小蒸汽傳馬の類を盛に集めるといふ風に、種々盡力して居られたが、明日上陸するといふ人々を集めて、「この場合であるから、諸君は二三町位は徒渉する積で行つて呉れなければ困る。それに、出た以上は何うしても上陸する覺悟で……」と嚴かに言渡した。

輸送難！上陸難！

五月七日（土曜日）晴

如何にしても上陸する覺悟で八幡丸を下りたのが、午前七時半。今日は昨日よりも準備がよく整つて、一艘の小蒸汽は二隻の短艇を曳くことになつて居る。自分等一行、管理部附の傭人は一つの短艇に、他の砲兵部、副官部、參謀部の從卒は他の一つに、寺崎廣業君は三浦君と偕に小蒸汽に乗つて勇ましく出懸けたが、昨日苦んだ陸から三百米突の距離の處に来ると、また例の傳馬問題が起つた。短艇は吃水が浅いから、傳馬を用ゐなくつても陸地近くまで漕寄せることが出来ると思つた。けれどこれは誤りて、矢張其處まで行くと、淺瀬に乗上げて一步も前に進むことが出来ぬのである。幸ひに、傍に一艘の傳馬があつたので、短艇の人々は手早くそれに乗移つたが、自分等は乗後れて他に傳馬を見付けなければならなかつた。海軍の水兵はあらん限りの力を盡して、成べく陸地近く漕寄せんことを勉め、猶ほ附近の傳馬を使用することに骨を折つて呉れたけれど、しかも二時間ばかりと言ふものは、例の昨日と同じさ不得要領なのに、果ては漕ぎあぐんで、今日もとても上陸は出来んと其の短艇の隊長が言つた。これを聞いた時、自分等は如何に絶望したか知れぬ。中には、そ

れては其處から徒渉して行かうかと言つた者さへあつた。

午前十時に至つて、漸く一艘の傳馬に乗移ることを得た。けれど心細い事には、其船頭が極端の素入で、丸て艦を使ふことを知らぬので、まごまごすると大海に流され相になるといふ始末。それを何うやら彼うやら、皆して手傳つて、漸く其岸に着いた時のその嬉しさは！

自分等は覺えず萬歳を三唱したのである。

岸には、工兵が既に棧橋の製作に苦心して居て、鐵色の岩陰にはテントを張つた工場らしいものが幾箇も見える。

上陸

した處は岩と波ばかり立つて居る荒磯で、路は其間をうね／＼と岩山の上に通し、それを登り盡すと、其處に一帶の平地。即ち臺山の裾になつて居るので、其處には海軍の碇泊所司令部と軍の碇泊所司令部とが二ヶ所にさびしいテントを張つて居るばかり、荒涼寂寥、實に縁の草さへ生じては居らぬ。

けれど其海岸から懸けて沖の一面には、實に壯大なる活動の幕が演ぜられてあるので、無数の船

船からは凄しい黒煙、怒濤の間を縫つて近寄つて来る短艇小舟の数は黒石を並べたやうに點々として、突然この光景に邂逅した清國の住民は、この大船巨船が天から降つたか地から湧いたかと思ひ、たに相違ない。今最も活動して居るのは恐らく海岸一帯の地であらう。其處には、砲車を短艇傳馬より引上げるもの、馬匹の溺れ懸るのを裸體になりて救はんとしつゝあるもの、荷物の積卸を爲せるもの、焼火を爲せるもの、前進兵士の背囊を車に積込むもの等、その騒しさは實に非常である。その傍には、既に組み立てたる砲車を峻坂の上に引上げんとする砲兵の群、これに續くのは、清民常用の牛車騾車、をりから烈しき西風に、滿州地方の砂塵は舞ふこと甚しく、一道の路には高く高くその黄い砂煙が……

その一道の砂煙を見渡すと、それは海岸より西の峽間を傳ひ、それより一度斜阪の上に烈しく鞍つ砲車の長い列を顯はし、また一とところ途絶え一とところ顯はれ、柳の若緑の間を縫ひ、谷間の赤き地層を過ぎ、高く、いよいよ高く、臺山の右の裾の斜なるところへと靡いて居るので。

砲車、馬匹、糧食、皆其方面に。

自分等の宿營すべき村落は勇家屯。昨日視察して歸つて來た管理部の人の話では、上陸地點から大凡二十町ばかり、人家は緩かに七八軒、勿論其附近の何とか言ふ村にも宿舎を振割ることは振割つ

だが、何うも實に不充分で、到底諸君の意を満すやうなことは出来ぬとのことであつた。其の勇家屯とは何の方角、矢張あの砂塵の道を辿つて行くのであらうかなどと語り合つて居たが、不圖、軍司令部のテントの中に大越副官の姿が見え、續いて前に上陸した寺崎廣業君が見えたので、其儘、其處に行つて、兎に角指圖を請うことに爲た。

聞くと、宿舎と言ふほどの宿舎ではないが、雨露を凌ぐ程の處は取つてあるから行き給へとのこと。時計を見ると十二時五分、腹が減つたので、柳行李に詰めた初めての辨當飯を食ひ、一同、機械やら荷物やらを清國苦力に荷はせて、出發した。

新しい生活、實に新しい生活はこれから始まらうとしつゝあるのである。總ての糲糲、總ての係累、總ての情實を脱却して、生或は死の境にまで突進しやうとするこの新生活！自分は限りなく胸の躍るのを覺えた。

ことに目新しいのは遼東の風物。風は烈しく、砂塵は高く、目に見ゆる色と言つては海の碧いのと、空の鶏卵色なのと、陸及び山の茶褐色なのとばかりではあるが、それでも何となく新しいのは人の心を惹くもので、自分は荒涼なる大陸的風景の妙からずわが好奇心を動かすのを感じた。美しい柳の二三株風に靡いて居る間を向ふに出ると、果して路は臺山の右の鞍部へと通つて居て、砲車、

牛車、馬車の高く砂塵を揚げて居る處から、次第に弓形に山の彼方へと向つてだら／＼登りに登つて行く。

鞍部へ出て、向ふを見て、自分ははつとした。

成程大陸的光景、乃村曹長は昨日視察に来て、滿州は實に荒涼たるものだ、あの臺山の向ふは、唯だ赤土の堆積の遠く連つて居るばかり、地平線を目を遮る何物をも見ないと語つたが、成程その通り、赤土の堆積のところどころに、村の存在を示した楊柳が五六株乃至七八株つゝ固つて居るの外は、只、砂塵の佻しく高く揚るのと牛車馬車の陸續として遠く連るのたとを認むるのみであつた。宇品を發つ時には、山には緑色、野には菜花、霞は美しく深碧なる海を粧つて、それは一幅の畫圖のやうな景色であつたのに、さりとてはあまりの荒涼、あまりの寂寞、あまりの渺茫。

ハイ子の詩から俄かに軍歌

に移つたやうな氣が爲た。

勇家屯に着くと、楊の樹。其樹に軍司令部は何處、管理部は何處、軍醫部は何處と記した紙が張つてあつたが、管理部の所在は右の三四軒並んで居る農家で、第二軍管理部と記した白布は、崩れ

懸つた、汚い土壁の中央に懸けられてあつた。中に入ると、不潔、不潔、先づ右に大きな肥料溜が穿られてあつて、其隣に二三正奇しい聲を立て、居る豚小屋の泥濘。家屋の前には、汚い水を著へた瓶、味噌を入れた瓶などが並べられて、内に入ると室の兩側に大きな釜。其釜の前にぶつ／＼言ひながらこの家の主婦らしい中老婦が頻りに火を燃して居るのを見た。一方は土民の住室、一方はわが管理部が特に徴發して明けさせたもので、二つある室の一つには、山内炊事曹長が頻りに雑務に執掌して居る。自分等の宿舍は？と聞くと、この裏の家屋とすぐ救へて呉れた。

前には一株半開の桃花があつて、風情ある家屋と思つたのに、中に入つて見ると、何年前から人が住まなくなつたかと思はれる程の思切つた廢屋である。否、廢屋と言へば、未だ人の住む室などがあるやうに想像されるかも知れぬが、此處には、炕の破壊された跡が微かに一隅に残つて居るばかり、土間、全くの土間である。けれどこれは覺悟の前、自分等は彼方此方から高粱殻を山の如く集めて来て、兎に角坐臥することの出来るやうにし、さて其上に毛布を敷いた。

思ひ切つた新しい生活では無いか。

隣近所の清國住民は、珍らしがつて、幾人も遣つて来て、頻りに我等の高梁殻を運ぶのや、室を拵へるのやを見て居たが、覺束ない清語で話して見ると、渠等は五日の朝わが大船舶の集中したの

を驚くこと一方ならず、始めは大事變の起つたやうに、家を擧げて遠く走らうとした相であるが、やがてわが軍の諭告文を見て、始めて露國と戦ふことを知り、一村其堵に安んじたとの事である。後には段々馴れて、煮て鶏卵などを賣りに来るものもあつた。

夕暮、物珍らしさに、柴田君と二人して、司令部のある處へと出懸けて行つた。自分等の居所とは極く近く、殆ど一町位しか無いのであるが、司令部として選ばれた家屋も、頗るそれは哀れなもので、白布の飄つて居る門壁には、草が離々として生じて居た。不圖見ると、其前に參謀の肩章を着けて居る將校が二名——一人は石坂少佐、一人は、金谷大尉。

「前哨線に出て居る兵は、それは實に氣の毒だよ」と金谷大尉は語つた。「君方は、上陸の朝も寐て居て知らなかつたらうが、我輩は海軍と一緒に、徒渉して上陸したのだからな。臺山の上、あの上に登つたのは午前七時、敵は監視兵が五六名居つたばかり、大したことは無くて濟んだが、上陸して前進した兵は實に氣の毒だ。掩堡に據つたまゝ、吹頻る砂埃の中に、二日二夜、道明寺橋を嚙りながら、構筒の姿勢で居るのだから。」

「敵は近くに居るですか」

「そんな事は聞かなくても好いが、兵士は實に氣の毒だよ。勇しいのを見れば見る程、實に涙がこぼ

れる』

「それから思ふと、君達は暢氣な者だよ」と石坂參謀は冷笑するやうに、傍より口を入れて、「歸り度くなるとすぐ歸つて了ふんだからナア。戦争の終結迄居るんなら、充分世話して遣つて好いけれど……」

「居ますよ。歸るなつて言ひやしませんです」

「屹度、遼陽までに行きます」これは柴田君。

「遼陽？ それ見給へ、遼陽で戦争は終結になるかえ、君。」

「イヤ、左様ぢや無いですけれど……」

「矢張歸り度のだらう。」

とまた冷笑した。

暗くなる迄、色々な事を立つて話して居たが、楊樹の影も分らぬ眞の闇夜に爲つたので、其儘宿舎に歸つて、犬か何ぞのやうに、高粱殻をこそく言はせながら、寝に就いた。

點すへき蠟燭も無い室の佇しは……

五月八日（日曜日）晴、風

遼東の氣候の變化の烈しいのは兼ねて聞いて知つて居たが、しかも是程とは思ひも懸けなかつた。日中は六十度内外、外套を脱いても歩くと汗が滲む程であるのに、夜になると、その寒さ、寒さ。毛布を二つに折つて、外套を懸けて、猶其上に高粱殻を一並べ載せても、猶底冷がして、如何にしても眠られぬ。否、夜半頃からは、いつそ起きて火でも焼いて夜を明かさうと思つた位。其故であらう、朝、起ると、厭に腹が痛んで、膈の具合が頗る悪い。一行に聞くと、皆な同じ模様である。「これでは困るナア、今、病まんでも、何時が病氣が出るやうなことがあるかもしれんからナア」と誰も彼も言つた。

それから朝起きて先困つたのは。

顔を洗ふ水

である。土民は水を多く遣はぬので、井と言ふものは極稀で、其井の處までには、距離が何うして二十町もある。仕方が無いから、軍の堀井人夫がところ／＼堀り懸けた跡、それに溜つて居る水

を遣つて顔を洗ふことに爲た。けれど洗面器持たぬ身の誰も彼も其水溜に顔を臨ませて洗ふので、二三人も洗ふと汚く濁つて了つて、雨後の水溜と少しも違はぬ。寺崎廣業君や、森林黒嶺君などは我々と一緒にこの顔を洗ふ水に困つた連中で、それから、今一つ滑稽なのは、草も藪も何も無いひろくとした満州の野に、互に野糞を遣りに行くさまであつた。

朝食と午飯とを管理部で貰つて、一行は上陸地點を撮影にと出懸けた。自分は下村清助君と一直線に臺山に登つたが、其絶巔の眺望は中々見事だ。上陸地方面の船舶碇泊の光景は勿論、前に遠く打渡されたる赤褐色の陸の起伏、東清鐵道の線は何の邊を駛つて居るであらう、敵は何の邊を防禦して居るであらうと思ふと、雲のたすまひまでも何となく心惹かるやうな氣が爲て、わが勇しい前哨線の兵士の事などがそれとなく胸に浮んだ。上陸地の光景は昨日よりも一層活動を加へて、わが軍の糧食運搬に使用せらるる、騾車牛車の長さ連続は、實に際限もなく黄い砂塵を立て、居る。

砲車、彈藥車——

歸路も同じく臺山の絶頂、砂塵の高く巻上げられる岩角で、柳行李の拙い飯を食つて居ると、これも上陸地寫生に出懸けた寺崎君三浦君とゆくりなく邂逅した。

此日、自分等は第二軍の第一勝とも稱すべしと戰報を聞いた。それは静岡聯隊の五、六、七、八の四箇

中隊の果した任務で、同隊は工兵第三大隊の一箇小隊と共に鐵道破壊の爲めに普蘭店方面に赴くことを命ぜられ、五日は張家屯の北三里の處に露營し、六日午前二時其地を發し、八時半漸く其目的地に達したとのこと。敵の鐵道擁護兵は騎兵二百、歩兵百餘て頻りにわが兵に抵抗したが、わが兵は其前なる高さ五十米の丘陵を占領して、千米より三百米の距離に近づき、盛に小銃を射撃せる間に、工兵は粧置ダイナマイトを以て、鐵道及びレールを破壊し、ことに、勇敢なる一兵士は敵銃雨注の中を侵して、高く電柱の上に攀ち、以て電信線を切斷したとの話である。殊に面白かつたのは、其時、旅順方面から貨車客車の四五十もつけた汽車が通り懸つて、距離約二千米の附近まで來たが、突然わが兵の射撃に逢ひ、慌て、一度は引返さうとして、不意に車頭に赤十字旗を掲げた。て、わが兵が射撃を止めると、其隙を窺つて全速力で北方に向つて通過し去つた。實に遺憾千萬であつたと其隊の一士官は語つた。

午後其戰で捕へた捕虜一名が司令部に來たので、柴田君と共に撮影しがてら見に出懸けた。年齢は凡三十三四、背は低く、體は瘦せて、傍に鼠色の外套をかへて、横になつて居たが、それを分捕品の前に立たせて一枚撮影した。

司令官始め諸將校は皆今日恙なく上陸せられた。

五月九日（月曜日）晴、風

相變らぬ晴天、相變らぬ西風——變つたことも無くて過ぎた。
夜、司令部から酒五勺分配を受けた。

五月十日（火曜日）朝曇、後晴

臺山附近の上陸地が風濤いかにも險惡で、到底完全なる輸送を開くことが出来ぬので、昨日から、三里程車の小河口附近に、辛上陸地を移したと聞いたが、軍も今日愈々前進！
前進とは言へ、縦が三里位、何でも大姚家屯といふ處に行くのだ相だ。て、自分等は荷物を管理部に託し、寫真機械を苦力に負はせて、寺崎君など一所に出懸けた。此朝は珍らしい深い霧で、近い村、近い楊樹も全く其中に包み籠められ、ある時などは殆ど咫尺も辨ぜざる有様であつた。自分等は清苦力が導くまゝ、高原の捷路を取つて、次第に其地名の方面へと向つた。けれど霧の中に隠見する傳騎、それさへもしや敵の騎兵では無いかと疑はれるので、路が遠つて居りはせぬかとの疑惑は幾度となくわれ等一行の間に起つた。其もその筈、前哨線がもう近いと聞いて居つたのに、

この附近には兵士の影も少く、司令部附の人々の姿も見えず、四方を展開しやうにも、鼠色の佗しい霧が懸つて居て、何うとも爲方か無いではないか。

不圖見ると、高原の上の濃霧を透して、ぼかしのやうに微かに五六十名の兵士の群、其處からは黄い青い烟が風に吹かれて、烈しく早く地を這つて靡くのが認められる。

「あれは何だらう？」

「砲を打つて居るんぢや無いか？」

「それにしても音が爲ない？」

「こんな高原に……今日のやうに暖かい日に焼火の必要もあるまいに……」
などと區々に批評し合つたが、兎に角道を聞かうぢやないかと言ふので、其儘、其高原へと歩み寄つた。南山、得利寺の後であつたならば、こんなに烈しく胸を撲たれるのではなかつたらうが、それと知つた時には、自分等一行は思はず襟を正したので、それは實に

昨日戦死

した第三十三聯隊第九中隊の小隊長歩兵中尉桂勇喜、同第十二中隊軍曹伊藤彌太郎、第九中隊歩兵

一等卒近藤伊太郎三氏の遺骸を同中隊の將校兵士等が茶毘一片の烟となしつゝあるのであつた。

見ると、前には深く穴が穿られてあつて、其處に三氏の遺骸を並べ、上には玉蜀黍殻、其上に楊樹を重ねて、今しも盛に燃え上れる火焰は、潑々として黄く青い光を放つて居る。其周圍を護れるは第九中隊歩兵少尉牧野鐵彌氏以下軍曹下士卒十二名。ことに戦死者の従卒某は殆ど情に堪へざるばかりの憂愁の色を其顔に顯して居た。何たる悲惨、何たる詩材、この荒涼たる高原に、この寂寥たる濃霧の中に、其同僚の遺骸を火葬する人々の心はいかに。

自分は深く感じたので——其の青い黄い烟の簇々と渦上するのじつと見入つた。

柴田君は寫眞、寺崎君は寫生。

自分の頭脳には、此時詩想が早く早く流れて來た。

聞くと、此人達は龍口附近に鐵道電信を破壊に行つたので、其隊は歩兵少佐足立龜治氏の引率せる第三十三聯隊第三大隊であるさうな。宿營地を出發したのが七日の午後一時で、途中で無記名村落に一泊、夜十二時出發、八日午前八時半に目的地龍口に達し、敵の鐵道守備隊約八十五に對して直ちに戦闘を開始し、五十分の後、全く占領、電信線を切斷し、電柱を倒し、任務を全うして、午前十時悉く引揚げ、途中約三四里の處に一泊、九日の午後四時半を以て宿營地に歸着したとのことである。

ある。

大姚家屯は其處からもう遠くはなかつた。山を二つほど越えようと、下に二三の村落。その最近のものが即ちわれ等の第二の宿營地であるのである。近寄ると、村も可成大きく、戸數も百軒近くはあつてあらう、楊樹の叢を、桃花の紅なるは此村落の特色で、遼東の春は其處に……と思はれるばかりであつた。宿舎は村外れの軒家。比較的清潔で、此處では士間で無い普通の士民の一室を宛がはれたが、八疊敷位の處に八名寐なければならぬのはしたゝか困つた。

軍は此村で漸く勢揃を爲たと言つて宜しい。三箇師團の兵士、砲車、彈藥車、馬匹糧食等は既に大方陸揚が濟んで、各々其の部署々々を固めることが出来るやうになつた。第三師團が右、第一師團が左、後れて到着した第四師團は、その中央から左の方へと絶えず行進を起して居るので、附近の村落といふ村落には、わが兵士の駐屯して居らぬものはなく、散歩などすると、それは實に面白い光景が目映ずる。かれ等は大抵家屋の周圍を繞れる土壁の陰にテントを張つて居るのであるが、食事頃そこを過ぎると、かれ等は皆な土壁の埒片を彼方此方より拾ひ集めて、急製の土甌を造り、盛に火を燃して、或は鳥汁を煮、或は豆を煎り、或は蕎麥掻を作り、或は湯を沸す等、其の光景は實に面白い。ことに中隊、大隊の炊事場に行くと、銳刀を揮つて豚肉を切開するもの、鶏

の毛を一生懸命に撈る者、大釜に米を炊く者、水を汲みて運ぶ者、飯を分配するもの、其の分配を受くる者、澤庵は澤庵掛これを切り、汗は汗掛これを分配する等、名状すべからざる混雑が其一帶の地に起つて居るのを認める。かと思ふと、終日長く路の四角に立てる哨兵、山から山へと一飛びに飛んで来る傳騎、村落の陰には、必ず馬匹と砲車と彈藥車と輜重車とが處狭げに並べられてあつて、其上には楊柳の緑、梨花の白、桃花の紅、——何等の春色、何等の活畫。

五月十一日（水曜日）晴

昨日は終日觀戰前記を草し、今日も亦其稿を續いた。柴田君は巨君堀君と共に辛上陸地に撮影に赴いたが、自分は筆硯と親しんで、遂にその新しい上陸地を見る機会を失つて了つた。午後、散歩すると、不圖石坂參謀が先の日龍口附近で捕へた捕虜を訊問して居る處に邂逅した。傍に露語通譯官一名、それから二三間離れて護衛憲兵が二名、更に十五六間距てた土壁の傍の牛車の上には、寺崎君が頻りにそれを寫生して居る。

この夜、宿營の小童が

タンビーヤ

と言ふものを携へて面白く舞ふのを見た。此村、この宿舎、これが後さて自分の頭腦に残るとせば、それは實にこの一樂器の賜に歸せなければならぬ。其の樂器——樂器と云ふ程の者ではないが——は、二尺五寸ばかりの細い竹に四ヶ所穴を明けて、其處に錢二文づゝ繋きたるもの、其れを胸やら肩やらにちやら／＼當てながら、一種不可思議の調子を歌ひて舞ふのであるが、それが如何にもよく諧つて、其の所謂サーザ（歌曲）なるものを聞いて居ると、何となく身が其中に曳き入れられさうになる。何でも悲しい曲、喜ばしい曲、可笑しい曲等種々ある相で、小童の中にも、これを巧に遣るものは稀であるといふ。あゝ、其夜の光景、それは未だにわが頭腦に明かに残つて居る。戶外は闇、室内には蠟燭の光が微かに、混亂せるわが一室を照して、其餘光は舞へる小童の肩、胸のあたりに及んで居る。丸て晝だ、このまゝ額縁に飾めて置き度いと自分は思つた。

まして壁間にはシユワア虫の斷續。

聞終つて野外に出ると、平和は實に到る處に充ち満ちて、滿州の廣い荒涼たる野には明かなる無數の星が、その微かなる光をさびしく投げて居る。美しき星、美しき空、美しき夜——丸て秋か

と思はるゝ空氣の透明。詩を吟して哨兵に一喝せられたのも無理ではあるまい。

五月十三日（金曜日）半晴

懷中日記の今日の處を繰ると、周家勾に行つたことが記されてある。忘れもせぬ桂中尉の祭祀、司令官を始め各將校も行くと言ふので、自分等も午餐を済すと出懸けて行つた。周家勾は大姚家屯を距る、北に約一里、山を越ゆれば、すぐ其村は見えるのである。周家勾の右の高地、其處には三箇中隊ばかりの兵士が整列して、其向ふには一箇の祭壇が楊の枝や玉蜀黍の殻で巧に造られてあつて、豚、鶏、瓶酒などが山のごとく其靈前に手向けられてある。自分等の行つた時にはもう司令官も師團長も席に就いて、長い長い經文がこれから始められやうとする處であつた。肅然たる一場の光景、誰の胸にも第二軍の最初の犠牲者を悼むの念は往來して居ると覺しく、ことに、捧銃の兵士には無限の哀情が遍ねく顯はれて居るのを認めた。讀經の僧三名、頭髮長く袈裟を懸けたる僧衣の下より洋服長靴の見ゆるさへ異様なるに、其讀經の聲のけたまはし、折々途絶えて又續ける、自分はいかに一種の滑稽を感じたであらうか、けれど此滑稽、これが更に一層の悲感を自分の胸に印さしめたので、この故郷を遠く離れたる滿洲の荒野に、血に染みて悲しく悶ゆる士官兵士の最期は

歷々と自分の眼前に描き出さるゝのであつた。

空は半晴の薄曇り、鼠色の佻しい雲はをりからの日影を蔽ひて、天もさながら哀悼の意を表するかのやう——けれど祭祀の式も済み、哀悼の意も盡きると、捧銃の兵士は列を作りて其隊に、司令官、師團長も馬に跨りて其宿營に、かくて跡に残れるはさびしき祭壇、悲しき墓標、これも幾年の風雨に全く蝕し盡さるゝのである。

噫……

此日の夕暮、寺崎君と隣村の山咀子家屯へ散歩へ行つた。夕陽の美しいのと、鶴の多いのとは實に尠なからず自分等の興を動かしたので、自然の平和、この中に猶戦闘ありやと幾度か思つた。

五月十四日（土曜日）曇

軍は愈々行進を始める！との噂が波濤の岸に打寄するやうに、彼方此方から傳へて聞えた。敵はわが軍が上陸したと聞いたなら、忽ち全力を擧げて此方面に突進して來るであらうと思つたのに、幾日経つても其のやうな形勢が見えぬばかりか、斥候の報ずる所によると、敵の兵力は旅順に二箇師團、金州に一箇師團あるばかりで、遼陽方面の大軍は早晚南下して來るかも知れぬが、今の處で

はさう急に動いて来さうにも無い。よしと言ふので、愈々金州に向つて前進開始!

第二軍は愈々其の任務を果すべく危地に向つて突進するのである。

明日前進!

五月十五日 (日曜日) 晴、後曇

愉快なる前進、實に今日にして始めて戦場に出たやうな気が爲たので。朝、七時、荷物一切を管理部に托してそして出發した。北! 北! と向ふ心。一里、二里、山から山へと越えて行く中は、左程とも思はなかつたが、王家店を右に見て、營城子から向ふへ出ると、

實に壯觀

自分の前には美しい翠巒を半天に顯はした二千五百米の小河山が高く聳えて居て、其下には廣い廣い平野、獅子窩から金州に通ずる街道はさながら地圖のやうに其間に隠見して、轉角房、暗米溝などの村落は丸て手に取るやう。否、想像して御覽なさい、其平野が皆わが兵、皆わが軍、皆わが砲車。

街道には黃い砂塵が高く擧つて、一里、二里の間悉く砲車の列、鞭を揚げ、手綱を張つて、砲兵が頻りにそれを駛らして居るのが見える。かと思ふと其間には隊は隊に接し、列は列に續いた歩兵が間断なく前進して行つて、其先鋒は山から山、丘から丘へと殆どその盡くる所を知らぬ。否、右の山隈、左の谷間からも幾隊となく皆なその平野へ平野へと出て來るので、何れだけ出たならそれが總てになるかと疑はれる位。自分等の辿つて居る街道からも、砲兵が先一大隊ばかり先へ出て行つて、その跡から歩兵が行くわ、行くわ、行くわ、其銃槍は天日に閃めき、聯隊旗大隊旗は山風に翻つて、その勇ましさと言つたら、無い。

山を下れば、一里にして轉角房。人は今しも其處に驚くべき活動の幕の演ぜられつゝあるのを認るであらう。轉角房の村の一角、其の下の街道には輜重車、彈藥車、砲車が一面に並べられて、其間を往來するのが歩兵、騎兵、工兵、をりくは糧食縦列の先進隊も加はつて居て、それが砂塵の天に漲る中を頓着なく勢込んで進んで行く。かと思ふと、街道の右側には、なにがし師團の糧食運搬の牛車驛車が十臺二十臺停滞して、通譯官が汗みどろになつて、頻りに清苦力の間を奔走して居る。右の廣場には、今將に行進序列に就かうとする歩兵があつて、其中隊長らしいのが、頻りに聲を限り叫んで命令して居るのが聞え、其少し左の楊樹の蔭には、背囊を背負ひ、銃劍を携へ懸けた小隊

が見える。

活動、活動——一つとして動かぬ物は無い。

この活動を餘所にして、街道の左の方、櫓の低い樹の疎らに生えた長い丘陵の上に、參謀、副官の肩章を纏つた士官が二三人徐かに歩いて居るのが見える。司令部は彼處にあるのか知らんと急いで行つて見ると、果して！司令官始め砲兵部長參謀長參謀諸將校はその小高い長い丘陵の向ひ側に、近所から徴發して來たらしい榻を据ゑて、それに腰を息めながら、この潮のやうに集り來れる大兵を見渡して居られるのであつた。(寫眞の六)

愉快、實に愉快であらうと思ふと、自分は胸の躍るのを覺えた。

橋部長の語らるゝには、此の轉角房といふ村はわが軍には紀念ある處で、日清の戦役にも十月の某日に此村に軍司令部を置き、それより五六日にして金州城攻撃に向つた地で、現に、將校の中には前の大きな豪農の家の老爺を知つて居るものもある筈だとのこと。年を閱すること十年にして、またこのわが大軍の潮のごとく入り來れるを見る、清人たるもの、張目瞻視せざるものもまた稀であらう。

て、自分等は司令官と一緒に、其の長い丘陵の草の上に腰を息めて、以て宿舍の定められるのを

待つて居た。兎角する中に兵のこの附近に集合すること、實に無數、青山の練兵場でも随分大兵の集まるのを見ただけれど、到底これと比較にはならぬと思つた。あれが十八聯隊、其向ふが三十四聯隊、此方の山陰に黒く集つて居るのが、第四師團の十九旅團の一部。

「第一師團の兵は？」

「もうとほに前進して了つた」

と某副官は言つた。

「もう衝突するですか」

「よくは解らんけれども、もう長い事も無からうよ」

長いことも無からうよ？ わが胸はこれを聞いた丈でも既に烈しい鼓動を覺ゆるので、戦争に對する好奇心は言ひ知らずわが平生の平和を攪亂し盡したのである。砲聲、砲煙——此頃では夢にもその戦場の光景ばかりを見るので。

三時間程、其丘陵の濶い日影の下に座つて居たが、軍の宿營地が、愈々其向ふの車家屯に極つたと言ふので、自分等一行は其儘其地へと志した。車家屯に行くのと電信廠が既に設けられてあつて、電話は既に五六里先の前進隊に通じて居るとのこと。村は楊樹があり、砂川があつて、一寸風情あ

る處ではあるが、いかにも狭いので、自分等の宿舎は五町程先の楊家屯に取つて置いたと乃村曹長は言はれた。楊家屯は車家屯よりは寧ろ清潔な村で、其處には區劃を爲た畝もあり、清い深い井もあつて、宿營舎中ではまあ好い方の部に屬する。けれど自分等の宿舎は、村盡れの小さな家屋で、暗さも暗し、不潔も不潔で、南京虫の多かつたと言つたら、今迄刺されぬものも此處では大方其難を免れなかつた。

夕暮の散歩に自分は不圖非常に風景の好い丘陵を發見した。畑から楊樹の道、其切通の阪路がいかに風情があるので、それとなく傳つて行くと、遼東には珍らしい松の樹五六株。其下にある清國住民の土饅頭に添うて少し登ると、面白い岩石の屹立せる間から、向ふに書のやうな楊柳の村が顯はれて、思はず自分ははッとした。好風景！上陸以來の好風景！殊に、前に屹立した小河山の大きい高き姿が絶頂から麓まで残す所なく露れて見えるので、自分はいかに長く其暮れ渡る濃紫の色に見入つたか知れぬのであつた。

自分は幾度此の丘陵の上に立つたてあらうか。曉のさはやかなる時、夕暮の心細き時、午の日影の暑く照り渡れる時、自分はよく此處に来て、獨り郷國を思ひ、家を思ひ、戦闘を思ひ、詩を思ひ、果ては輿に堪へ兼ねて低聲に詩などを誦したので、今だに其の岩石の間にやさしく咲いて居たすみ無いやうになつた。

五月十六日（日曜日）雨、後晴

昨日夕暮から雲が出て、天氣が變るかも知れんと噂し合つたが、果して今朝起きると、雨！それと共に聞いたのは、今朝五時、司令部が前進したとのこと。

司令部が前進、愈々戦争が始まるか知らんと思つて居ると、果して午前十時頃から砲聲、砲聲、砲聲。

この盛なる

最初の砲聲

を聞いて、自分はいかに胸を躍らしたか知れぬ。稍曇る空、鼠色なせる地平線の盡頭、微かに

はあるが天地も震かと思はるゝやうな凄じい響！宿舎の士民なども恐ろしがつて日本軍兵ヅホンッ
ボンなどゝ眞似を爲るので、自分等の胸の平和は全く攪亂もらじつとしては居られなくなつた。
それにしても、司令部は酷い、我々は戦闘を撮影に來て居るのに、伴れて行かずにこつそり出懸て
了ふなどは餘り不親切である。管理部長に様子を聞き糺して、場合によつたら後を追つて出懸け
やうてはないかなどゝ語り合つて車家屯に行つて聞いて見ると、部長が言ふには、君等は公然大本
營の許可を得て來たのではなくて、言は、第二軍がこつそり伴れて來た日蔭者であるから、公然行
つて好いと許可することは出來ん。けれど浮浪人扱ひにすれば、何にも別に差支はあるまい。即ち、
君方は何うかして軍にまぎれ込んで此處までは來たが、此處から先は行衛不明になつたと言へばそ
れて私の責任は盡されるので、其代り、行くには行つても好いが、彈丸に當つて死なうが、まぐれ
て捕虜にならうが、そんなことは知らんよとの言は、ア捨てられるのも同じ語氣、餘り酷い！
とは思つたが、實際日蔭者の、厄介者の、食潰してあるから、強い理屈は言ふことが出來ぬ。さり
とてそんなにまで爲ても飛出さうといふ決意もつかぬ。其間にも砲聲は益々盛。聞くと、敵は此處
から六里ばかり彼方に居て、今のは重に第一師團が遣つて居るのだ相だ。大和尚山の附近かと聞く
と、部長は五萬分一の軍事機密圖を展げて、何でも大和尚山から少し北に當る衣家屯と言ふ所から

今朝戦争が始つたとのことだが、成程衣家屯、何でも此邊だ……と地圖を示して教へて呉れた。軍
司令部の地位は？と聞くと、金州街道の三十里堡附近に向つて進んだ筈であるが、戦争の都合で今
少し前に出たかも知れぬとの話。

相談しまして……と言つて歸つて來たが、柴田君始め諸君の説が、何うもそれ程にまで爲て行く
こともあるまい。殊に、我々は荷物が多身だから、管理部長から捨てられては、今は無理に出懸け
てもこれから先が仕方が無い、ア、少し様子を見やうてはないかと言ふ事になつた。

けれど正午近くなると、砲聲は愈々盛。天氣も少し晴れ模様になつて來る、逢ふ人に聞くと、管
理部にくつ附いて居ては、今ばかりでは無い、是からとても戦争は見られんから、思ひ切つて行く
方が好いと勧める者が多い。それに、例の丘陵の上に登つて見ると、砲聲の聞えて來る方角も明か
に、三四里も行つたらば、すぐ戦闘區域に入ること出來るやうに思はれる。それにしても、今、
遣つて居る處には、如何に面白い幕が演ぜられてあるであらうか、砲煙は高く颯り、人馬は勇しく
突進し、活動と言ふ活動は盛に其處に開始せられてあるであらうと思ふと、實に堪らぬ。何うして
もじつとしては居られぬ。

午後、柴田、亘二君と其丘陵の上に登つて、益々猛烈なる砲聲の空にあくがれて居ると、橋部長

はゆくりなく騎馬で其處に遣つて來た。

「聞えるですナ」と聲を懸けると、

「中々盛だ！」

と少佐は言葉を合せた。

「行つて見度いですナア」

「軍服に對しても、君方より、僕等の方が何んなに遺憾だか解らんよ」

「行つて好いでせうか」

「好いか悪いかわらんが、行くなら行き給へ」

砲聲、砲聲！

「中々遣る、此分では大戦争になるかも知れん」

「今日一日では濟まんでせうか」

「濟まんとも……敵は何でも餘程居る相だ。」をりから聞ゆる重々しき砲聲に耳を傾け、「あれは敵

だ。確かに敵の砲だ。——あゝ、詰らんナア」

「それにしても司令部は何うするのです、もう戻つては來んてすか」

「いや——今一度戻つて來るから、好い村があつたら、探して置けとの事でした。けれど、戦争の具合では何うなるか解りません。

「金州は攻撃するのでせうナ？」

「左様」と少佐は少し躊躇して、「僕等も更に軍の様子は知らんけれども、金州は攻撃しても、旅順には何うも向はんらしい。此軍の任務は何でも北に行くのにあるやうだ。旅順は何うするか。あの儘放棄つて置くか、それとも他の軍が攻撃するかそれは知らんけれど……兎に角この軍は旅順には向はん様子だ」

猶色々語り合つて、貴下の騎馬の姿を一枚など、カピネの機械を捻くり廻して居たが、をりしも登つて來たのは高等文官の西川田中佐竹の三通譯官君方も残された組ですかと言葉を懸けると、實に、残念で血が湧いて堪らんとのこと。かくてわれ等は橋部長の隣村視察にと馬を走らせて行つた後も、猶砲聲を聞きながら頻りに腕を扼するのであつた。

それにしても面白いのはこの一場の光景では無いか。平野に面した丘陵の上、其處には取殘されたる高等文官、軍醫、憲兵、管理部の士官などが集つて、鼠色の雲の垂れたる地平線の彼方、轟き渡る勇しき砲聲を聞きながら、胸を躍らしてゐる／＼と語合つて居る光景は。

近くまで行つた憲兵や、司令部から遣つて来た傳騎などの状況から段々先方の状況を総合して見ると、何うも戦闘が明日も續き相てある。否、轉角附近に宿營して居た砲兵旅團の全部が急行進の命令を受けた處から推すと、軍は一舉して金州城を陥れて了ふ計畫であるかも知れぬ。此話を聞くと、自分は愈々決心して、巨君にカビネの機械を頼んで、そして二人して出懸けることにして、炊事場から重焼麩包や道明寺糍を三日分貰つて来た。

ところが、他の諸君も遂には同行すると言出して、管理部から一臺の輜重車を借り、これに機械やら毛布やらを満載し、清苦力に曳かせて愈々出發。

それが夜の十二時。

あゝ其夜の光景は遂に忘れられない。砲兵旅團の砲車が今夜すつかり前進するから、それに附いて行けば黙つて行かれるから……との部長の注意に従つて、急いで荷物を満載した車を曳き出すと、何うです、貔子窩街道には砲車の前進する篝火が一筋に長く長く連続して居て、それが前にも後にも續々として盡くる所を知らない。實際、こんな壯觀はこれが始めて、一砲車毎にかかげて居る松明或は洋燈は暗黒なる闇を透して、實に壯大なる光景を極めて居る。自分等は鞭を推しながら、其砲列と砲列との間に押されて挟まれて進んで行つた。晝間見れば、これは唯砲車の急行進、別に珍

らしいことも無いのではあるが、夜といふ魔神がこれを押包むと、實に見るものが皆變つて面白く見えるので、砲車を御せる砲兵は闇の中に高く浮出てるやうに見えて、一砲車毎に携へて居る松明の光燭が夜風に戦ぐと、進んで行く兵士の顔は赤かく照されて、何だか此世の光景とは思はれぬのであつた。そして、猶盛んなことには、其前どれ程續いたか知れぬ砲車の長い重々しい響と、それに加はる砲兵の傳達の聲とが夜の星あかりの冴えた空に高く聞えて、それが長い阪にても懸ると、一列に靡ける篝火の影が高く遠く闇を破つて……

此の砲車が皆な明日の金州城攻撃に加はるのである。かう思ふと、さらぬだに勇氣と好奇心とに躍つた胸は愈躍つて、これが戦争、

人間の事業の中の最も壯大なるもの

であると唯々見惚れた。

それから傳達が面白いもので、この闇の夜の行進、その連絡の断えぬやうに、初の列から、「第三中隊は来たか」とか、「第二中隊の一小隊は到着したか」とか「途中で滞つた彈藥車は安着したか」とか聞いて遣ると、それを後へ後へと遞傳して、一番最後から「第三中隊は来た」「第二中隊の一小

隊は安着しました、傳達！申送り」とまた順次に言送つて來るので、これが闇の夜、あやめも分ぬ闇の夜であるから、自から一種の趣を爲して、座ろに人の心を惹く。

自分等一行は清苦力に曳かせた車の跡を押しながら、いかに悶へ苦みつゝ、此の砲車の大輸送の間を過ぎたであらうか。跡から急いで追つて來る砲車に壓せられて、車を傍なる溝の中に引込んで、後へも前へも出なくなつたことも有つたし、荷物が途中で崩れて大騒をして積み直したこともあつたし、阪路にかゝつて、汗みどろに爲つて其後推をしたこともあつたし、折から前進する第十八聯隊の兵士と共に砲車の通る間を夜露の深い泥の上に横臥したことも有つたし、それは随分困難な行進であつた。其上、一里、二里、三里となると、初めの衝天の勇氣も段々身體の勞れるのと共に衰へ出して、續いて出て來るのは一夜眠らぬ身の睡魔。——地に腰を休めると、すぐそれがうとうとと催して來るので。

劉家店の少し先、砂川の流れて居る處で、馬に糧食を與へる爲め、長い砲列は餘程久しく休憩した。自分等はそれと一緒に休んで居たが、やがて動き出して砂川に懸ると、其の困難。砲車が重く、車の齒が一尺以上も和い砂の中に喰込んで、いくら鞭打たうが、叫ばうが、推さうが、一步も動かぬ。それを何うやら彼うやらして通抜ける、また他の難場が出て來るといふ始末。これを見ては、

砲兵のいかに困難なるかを氣の毒に思はぬ譯に行かぬのである。自分等も車を八名掛りて漸つと推して、其砂川の一地點を過ぎたが——その頃から黎明のさはやかな光が其處となく天地に顯はれ始めて、美しい楊樹の幾簇、野には和かな清らかな空氣が滿渡つて、内地ならば雲雀の朝立をしさうな風情ある處と思つて行くと、段々夜が明け始めて、やがて見ると、服の上には一寸ばかりの砂塵！

五月十七日（火曜日）晴、風

夜が明けると、もう體は勞れ切つて、へとくになつて居る。それも其苦、三里四里ばかりの間の路を一睡もせず元氣に任せて一生懸命に車の後推を爲たのであるものを。さア、一休憩休まうと、とある川の畔に背負袋を開いて、軍用ビスケットに餓に醫し、いざ行かうとなると、今度は苦力がもうとても曳けぬといふ。餘義なく次の村落で苦力を雇ひ、今度は一行は後推を爲ずに進んだ。途中砲車、彈藥車、糧食車は陸續と跡を絶たなかつたが、亮甲店に行くと、其處には砲兵旅團の大部分が集つて、中々盛大なる光景である、清國の士民はかういふ時にも一儲けと、饅頭、麵包、鶏卵、豆の煎つたのなどを長い丸い袋に入れて賣りに來て居る。

その混雜、其雜踏。

砲聲は何うしたのか更に聞えぬ。

亮甲店と言ふ村は、一寸須要の地で、後には兵站司令部を置かれたが、其時は第一師團の倉庫が設けられてあつて、其處に小笠原君の知人の田中といふ尉官が居た。非常に悪い泥水ではあるが、兎に角其處で、沸煮せる湯を水筒に入れることも出来たし、昨日の戦況も覺束ないながら聞くことを得た。戦争は一段落濟んだやうで、昨日遣つたのは第一師團ばかり、敵は十三里孫子の山麓に優勢なる陣地を布いて、中々頑強に遣つた相である。けれど佐倉聯隊が左翼から強く出たので、午後三時頃から敵はそろ／＼退却を始め、砲列は其儘七里庄あたりまで引き去つたが、しかも終日砲を打つことは止めなかつたとのこと。金州攻撃はそれは明日あたりから始まるか何うですか知りませぬけれど……もう長いことは無いだらうと思ふと田中尉官は語つた。

金州攻撃は明日！と自分等は既に獨斷に定めて居るので、砲兵旅團の急前進、軍の豫備隊なる第十八聯隊の前進から推して見ても、快戦が既に近づいて居るといふことが想像される。軍司令部の所在地を聞廻つて見たが、誰もそれを知つて居る者が無い。仕方が無いから兎に角進まうと言ふので、再び前進を續けたが、如何にも一行は疲れ切つて居て、亮甲店から鎮家屯まで、僅か三里の路に、殆ど半日以上を費した。

鎮家屯に越へる丘陵の上、其處は中々展望に富んで居た。上陸地點から望んだ大和尚山、それはもうすぐ眼の前に聳えて居て、聞けば金州はその背後に當つて居るとのこと。鎮家屯は丁度その南麓で、今一つの丘を越すと、昨日の戦場の衣家屯はすぐであるやうな。

けれど鎮家屯に來た時には、一行皆疲れ切つて、殆ど勇氣を喪つて居た。到底先まで出た處で、今日は戦争が無いのだから、此處で泊まらう、いざと言へば、此處から出懸けてももう金州は五里だから……といふ説が多數で、とある民家の前に車を卸した。さて、泊る家屋を捜したが、どの家屋もどの家屋も既に砲兵旅團の士官や兵士に占領せられて、一つとして空いた者が無い。車を卸した家の角に、各前進部隊から集つて來る電話所があつて、其處の土間には高粱殻を敷きつめてあるが、何うかして其處に泊めて呉れと頼んで見たが、何うしても取合つて呉れない。困つたけれど、まだ日が高いので、其家屋の一隅に高粱殻を敷いて、そして其處に一先横になつた。耳を敏けると、

電話

がよく聞える。今懸けてるのは内山砲兵旅團長、何でも三十里堡の軍司令部と話をして居る様子で、自分は今此處に來て居るが、進退を何うしやうと聞いて居るらしい。さう、もう命令が下りさへす

れば、明日は金州城攻撃と自分等は勞れながらも猶腕を扼するので。

けれど、遼東の風、遼東の砂塵、それに目も開けられぬ程吹き付けられて、何うしても泊る家屋が無い。露營だと略々決つた時は、流石に自分も落膽した。ことに、中龍兒君などは一方ならざる回み方で、もうこんな眼に逢つては何うしても遣り切れない、第一、身體が續かんと頻りに絶叫して居た。ところが、幸なことに、午後四時頃になると、第十八聯隊の兵が續々と入り込んで来て、兼て廣島で知己になつた石原聯隊長を始め、面識ある將校に幾人ともなく邂逅したので、聞くと、同聯隊も此處で命令を待つて、事宜によれば、此村に一泊するとの話。それでは御氣毒だが、同んな戦線へても出るから、一緒に併れて行つて下さい！と頼むと、聯隊長は自分等の熱心なのに感心して、快よく承知して呉れた。

日の暮れ、同隊は遂に此村に泊ることになり、自分等一行もある家屋を周旋して貰つた。明日は第十八聯隊と共に金州攻撃に参するのだと思ふと、疲勞れては居るが、實に愉快で、堪らない。それにしても此處は戦地、夜半にどんな事があるかも知れんと言ふので、更るく二時間づつ起きて居た。

夢に戰場

五月十八日（水曜日）晴、風

午前六時——まだ眼が覚めるか覚めぬのに、突然第十八聯隊から傳達が来た。出發の命令かと思ふと、こは又いかに。軍司令部は今日正午亮甲店を過ぎて、以前の車家屯に歸るから、其隊も一先づ元の位置に戻れとの命令で、聯隊長殿の御意見は、とても此方面では戦争が無いから、貴下方も一緒に御歸りになつては何うですとのこと。實に自分等は愕然とした、あれ程の急行進を砲兵旅團やこの聯隊に命令して置きながら、一先づ元の位地に退却とは、これは何か急變が起つたのであるまいか。北の方面に敵兵が増したとか、または昨日の戦争の不結果の爲め、俄かに退却するのと爲つたのではあるまいか。自分等は一時それとのみ信じたので、其狼狽は非常であつた。兎に角軍司令部が歸るなら、歸らうといふ説に一致して、さて愈々退却の準備。

一時間程して、車の準備を済して、戶外に出ると、第十八聯隊長は、矢張我々と同じやうな誤解を解く爲めに、將校士官に向て諒々乎として、退却の理由を説明して居る。聞くと、此の退却は決して無意味のものでもなければ、又、敵の戦勢に變化を來したからでも無い。一體、この第二軍は旅順、金州の方面以外に大なる責任を有して居るので、金州方面は第一師團これに當り、他は一層

重大なるある任務に服さなければならぬのである。今日此處まで来て、そして元の位置に歸るのは、もう此方面に於て、吾々の必要が無くなつた爲である、聯隊長は縷々として其理由を説明された。昨日來た同じ路、その路をいかに不平だら／＼と戻つたであらうか。自分等は絶望し、疲勞し切つて、殆ど歩むことすら厭になつたのである。けれど自分等は荷物と言つても車一臺、さして大した骨折でも無いけれど、砲兵、砲車、あれが亦來ただけの困難を凌いで歸なければならぬのかと思ふと、實に同情の念に堪へなかつた。亮甲店に着いたのが、午前十一時。十二時十分頃、果して軍司令部の一行は此の附近を通過せられた。風の烈い、砂塵の起つて、楊柳の緑色が只とところどころに靡いて居るばかり、鳥は一刷毛の赤褐色、其の荒涼たる間を五里六里と馬を驅つて視察せらるる司令官の勞や、また頗る大なるものである。

倦み切つて、疲れ切れて、楊家屯の宿舎に歸つた時には、丸て足も腰も立たぬといふ程であつた。夕暮、管理部から一人五勺づゝの清酒の分配を受けた。夜、岡外先生を軍醫部に訪ねて、今回の冒險話をいろ／＼と爲た。

五月二十一日（土曜日）晴

昨日も一昨日も骨休み、別段記述することが無かつたが、昨日始めて野戰郵便局が開始せられて、字品出發以來、始めての書簡、新聞等を受取り、且つ此方からも通信やら手簡やらを郷國に出すことを得たのは實に喜ぶべきことであつた。ことに、書いて書いて書き溜めた通信、これを山梨參謀の處に出して、檢閲して出して貰つた時の嬉しさ、何だか重荷を卸したやうな心地が爲たので、其れも其筈、自分等はあくがる／＼心を抱いて、殆ど三十日間、一通の書簡をも出すことが出来なかつたのであるものを。一行は皆終日手紙書きに耽つたので。

それから、餘り天氣が好いので、汗紗やら、縹袴やら、犢鼻褌やら、大洗濯を始めたが、其後、餘り頭髮が延びて煩さくなつたからと、小笠原君が柴田君の携へて來た頭髮刈機械を借り出し、楊樹の涼しい蔭で、新見世の理髮肆を開いて、我等一同を皆な御揃ひの五分刈頭に爲て呉れた。

昨日まではそんな事を爲る隙には、鶏を微發して汁を作つたり、蕎麥粉の残つたのを蕎麥搥にしたり、至極呑氣に日を送つて居たが、今日の午後になると、形勢頓に必迫して、明日は愈々出發！金州！金州！といふ呼聲が高く聞えた。

愈々明日は此車家屯、楊家屯に別れるのであるが、此村は上陸後一番記念の多い村で、背後の丘陵の眺望と言ひ、冒險の夜の壯觀と言ひ、ことに自分等の宿營した家の主人は所謂村の村學究で、

よく種々の事を筆談したので、其の鼻の先の赤い、厭にや〜と笑つた、平生も整然と帽子を冠つて居るさまは、後までも頭腦に残つて忘れなかつた。それから今一つ、それは自分等冒險不在中の出来事であるが、

車家屯の敵襲

と言つて有名なることがある。確か五月十七日の夜十二時頃の事で、村の一角を護れる一哨兵が發砲したので、それ敵襲！と大騒動。橋部長は佩劍を帯びて飛出す、大越副官は楊家屯方面に警を告げるといふ始末、森軍醫部長の話では、夜更に敵襲！敵襲！と言ふ聲が聞えるから、怪しいと思ひながら耳を聳てると、人の聲、人の足音が盛に聞える。司令官も參謀長も不在、いざと言はゞ自分が指揮を爲んければならんから、兎に角馬に鞍を掛けと命令して、戸外へ出て見ると、夜はしんとして、空には丸て星が降るやう。村の前の凹地には残つた人々がこつそり小さくなつて、形勢を窺望して居る。私も少時其處に立つてじつとして居たが、犬の吠ゆる聲ばかりでそんな様子は少しも見えない。それも其筈、其の發砲した哨兵と言ふのが、少し神經質で、今日軍醫部に診察に来て居たが、幻影に敵を見て、そして發砲したといふ始末で、それは實に馬鹿々々しい話さ、この事である。

西川通譯官(光太郎)は此時、この警を隣村なる第三師團司令部に傳へたので、君はさアと言ふので、自轉車で飛出した。隣村に行つて見ると、皆な眠て居る。何處が司令部であるか更に分らぬ。漸く探し出して、島村參謀長にこれ〜と話すと、參謀長は首を傾けて、「そんな筈が無いがナア、」と言はれたが、少時して、「けれど、本當なら、困つた事だ。兵は皆な出て居て居らんし、」と言つて、「けれど、まア、其の手配をしやう」とすぐ其命令を副官に傳へられた。それで、急いで歸つて見ると、村にはもう一人出て居らんばかりではなく、氣の早い連中は、寢床に入つて寢て居るといふ始末。丸て狐にでも魅された心地、實にこんな滑稽な事はありはせんと語られた。發砲した哨兵と言ふのは、衛兵隊の上等兵で、船の中では二三度言葉を交したこともある男。殊に、三浦北峽君などはよく一緒に話を爲て居た。何でも音楽學校の生徒で、あつたことがある相で、失戀か何かで、軍に召集されたことを頻りに厭がつて居つたとの事である。面白く書けば短篇小説になるかも知れぬ。

明日は金州方面へ！

五月二十二日(日曜日)晴

一度歸つて、そして又同じ方面に進撃。何うもこの理由が解らぬ、軍司令部ばかりならまだ好いが、重い砲兵旅團まで一度歸つてまた同じ方面に向ふとは？ 何か是處には重大なる意味があつたかも知れぬのである。けれど、今となつては、もう金州攻撃は争はれぬ事實で、自分等の心は唯金州！ 金州！と憧れ渡るのであつた。

今日の進軍の路は三日前に行つたと同じ路で、其間には、例の砲車の惱む砂川と、其の砂川を向ふに高い廟（關帝廟、自分は小笠原君と先の日歸途に登つて展望した）の見えるのと、例の小河山の翠巒の左から右へと遠ざつて行くのと、亮甲店の倉庫と、賈家店以北の高い廣い平原と、老虎山の次第に眼前に迫つて來るのと、それより他には別に目新しいものも無いのであるが、今回の宿營地點は、先日行つた鎮家屯から、節婦の碑の立つて居る衣家屯の松原の傍の路を向ふに越えた劉家店といふ村落で、丁度遼東の名山老虎山（大和尚山）の東北麓に當つて居る。此處に居たのは、纔かに四日であるが、金州がもう五六里しか無いのと、敵と相對して居る線が甚だ遠くないのとで、軍始め誰れにも皆な少なからざる活動を興へ、自分等は殆ど此宿營には毎朝出て夜歸るといふ始末、よく其の前線へと出懸けて行つた。

以後二三日間に探つた、此

附近の地理

これはこれから入らうとする金州南山の戦に、非常に必要なるものであるから、此處に少しく詳しく記して見やう。

金州へ通ずる街道、その重なのが二つ。一つは遼陽海城蓋平を経て金州から旅順へと通ずるもの、一つは劉家店、亮甲店、轉角房を経て魏子窩に達するもの、初めのは金州街道、後のは魏子窩街道と假に名づけて置かうか、金州街道には東清鐵道の長い線路がこれと平行線を畫いて居て、十三里臺子、三十里堡、龍口、普蘭店など皆この街道に沿うた村落である。魏子窩街道はわが軍の主力の行進路で、その二つの街道が丁度十三里臺子の下の處の石門子附近で一緒になつて、金州の盆地へと赴いて居るが、其一緒にならうとする少し手前、則ち不平等邊三角形のその二角がまさに相合せんとする處に、かの老虎山の山脈が波濤のごとき山塊を起して居るので、西は十三里臺子の山から、東は老虎山下の海岸に至るまで、丘陵小嶺が數限りなく連綿として連つて居る。敵は初め此の山塊の線に據つて頑強なる防禦を試みやうとしたのであるが、その防備の未だ定まらざる前にわが軍は急遽これを攻めたので、十三里臺子の山麓の好陣地に據つて盛にこれを防守したのにも拘らず、左翼の第二聯隊

(佐倉)が各條溝の高地線を占領したが爲め、敵は遂に金州の盆地へと追ひ退けられて了つたのであつた。即ち、自分等の劉家店に着いた時には、第一師團が完全に其の一帶の山塊を占領して、其司令部を韓家屯(金州街道貔子窩街道の中央點にして、十三里臺子に一里、關家店へ一里)に置き、第一聯隊を十三里臺の高地、第十五聯隊をその右に連れる高地、第二聯隊を最左翼、即ち各條溝より老虎山方面に出して、金州盆地の敵と相對せしめて居つた。此の山塊の中を、自分は縦横無盡に踏破し、輿に乗じて老虎山の絶頂にさへ登つたが、其の山塊の中には、實に畫これを描くべからず、筆これを記すべからざる光景が充ちて居た。想像して御覽なさい。其山の中、丘陵の陰には、一條、二條、三條の溪流、其溪流の畔に楊樹が極めて風情あるさまに靡いて居るのであるが、其附近には、兵士が皆なテントを幾個となく張つて、或は飯盒を携へて水を汲むもの、或は火を燃して飯を炊げる者、銃劔を磨くもの、哨兵線に出てんとして號令を爲せる者等、實に千變万化、如何なるものも動いて居らぬものは無いやうに考へられる。殊に、大隊、中隊の炊事場、それは多く溪流の畔に設けられてあつて、其處には白い煙が高く騰つて、軍用竈の下には活々たる火盛に燃え、其傍には分配を受くる兵士、分配する炊事當番等、その混雜は非常である。山を出て、遠く望むと、楊樹の陰、山の背などに白く見えるのは皆な宿營のテントで、其の山の上に姿を出すと忽ち轟然たる

一發、敵から凄しい御見舞を受けるのである。

當時の第一師團長 伏見宮貞愛親王殿下は韓家屯に御宿營になつて居らせられたが、寺崎廣業君が拜謁をした時、『どうも敵は夕暮から夜になると、よく砲彈を寄越すが、あれほど恐しい者か知ん』と笑つて仰せられた相だ。實際、この敵のさぐり打! これが頗る興味のあるので、轟然たる音がすると、『そら来た?』とか、『そら御出なすつた?』とか味方の兵は皆手を拍つて笑ふ。それが夜になると實によく来る、凄しい音をして飛んで来て、燦然火を放つて破裂する光景は、丸て兩國の花火を見るやうだ……などと兵士の語り合ふのを幾度となく聞いた。

この山中——實に詩である。

五月二十三日 (月曜日) 曇

午後小笠原長政君と十三里臺子方面へと出懸けた。勿論、第一線に出て見やうとしたので、先づ第一に韓家屯に行つて、十六日の十三里臺子の戦争の地形を觀た。わが砲兵第一聯隊の陣地を布いた處は、丁度韓家屯の東南方高地で、標高五十二米のところをがそれである相な。其處に登つて見ると、前が稍開けて居るので、敵の陣地であつた十三里臺子背後の山から懸けて、十三里臺子の蕭

然たる村落が東清鐵道の線路を挟んで點々として散在して居るのが手に取るやうに見える。聞くところ、敵の砲弾は中々よく來た相で、正午頃は最も烈しかったといふ。水谷大隊長の名譽の戦死を遂げたのも何でも其時分、宮殿下の附近に砲弾が爆発したのも其頃であるとのこと。左から第二聯隊が行く、右からは第一聯隊が進むといふ風で、一個師團單獨の戦争としては随分激烈であつた。

韓家屯といふ村落は、第一師團が十六日の戦捷後、南山攻撃の際まで、其司令部を置いたところ。一廉の豪農もある中々大きな部落であるが、其附近には兵が例のごとく陸續として相集り、中には炊事場なども設けられて、其烟は折からの薄暗い曇つた空に低く舞ふて、楊樹の葉にも面白く靡き渡つて居た。司令部に星野參謀長(大佐、謹吾)を尋ね、種々十六日の戦況を聞いたが、管理部の寫眞師松永學郎氏と共に十三里臺子の方面へと向つて出發した。途中、氏から山田大尉が肖金山附近に斥候に出て、戦死した一伍十什の話聞いた。

今日初めて

東清鐵道の線路

を見たが、それが何となく珍らしく自分の心を惹いた。ことに、其附近にはわが兵が陸續として相

集り、第一聯隊の砲兵は其線路の狹隘に、したゝか其砲車を集めて居た。聞くと、第四師團の兵がどしどし其右翼に加つたとかで、十三里臺子の村落には、第四師團の電信隊が既に其電話架設に熱中して居るのを見た。歩兵の列を爲して進む間を分けながら段々進んで行くと、其の鐵道線路は老虎山山塊の最も低い處に大開鑿を施して、丘陵の裾を遶り遶り、漸く金州の盆地へ出て行くので、其切開かれたる丘陵の背後には、第四師團の一部と第一聯隊の一部とが蟻のやうにくつ附いて居る。自分等は雨にならんとする曇天を氣にしながら、いかに激勵して其丘陵の背から背へと傳つて行つたであらうか。第一聯隊の第一中隊、第二中隊は最も先へ出た山の突角に其テントを張つて、其上に低い松の林が疎らに生じて居たが、小笠原君の友人なる瀧澤大尉が其隊に居ると云ふので、其儘其處へと出懸けて行つた。

段々尋ねて行くと、其大尉の幕營は、丁度その松山の中で、大尉は今しも部下に緊要なる命令を授けて居たが、小笠原君の顔を見て、

「ヤア、君か、えらい處に出て來たナ」

「もう此處は第一線かね」

「第一線とも……もうすぐ其處が敵だ」

「其處ツて……何處」

「まア、其上に出て見給へ、すぐ打たれるぞ！」
と笑つた。

聞くと、其高地の下はすぐ廣潤なる金州の盆地で、敵は其西南方高地、即ち南山、扇子山に一面の防禦工事を施し、此れを以てわが軍を喰止めやうとして居るので、其上に登ると、金州城を始めとして、南山、大連、ダルニー、金州灣の方面が丸て指すばかりに見えるとの大尉の話。それでは一寸出て覗いて好いですかと聞くと、

「打たれても知らんよ」

「大丈夫、大丈夫」

大尉も自分等の跡から跟いて來た。大凡五十米ばかりの高地、疎な松林を向ふに通けると、すぐ其絶壁で、其長い斜に傾いた線には、二三の兵士が腹這ひになつて、こつそり向ふを覗いて居る。自分等も背を丸くして其傍に行つたが、大尉は

「見えるか」

と兵士に問うた。

「今、彼處の路を將校らしい奴が歩いて行つてす」

恐々覗いた眼には如何なる光景!

金州盆地はすぐ下から展開して、右に金州灣の碧波、其向ふの山嶺には鼠色の雲が低く舞つて、盆地の中央に簇々と立てる楊樹の群、其向ふに隠見する白壁は確かに金州城らしく、曠を凝すと、城壁の長く取廻いて居るさまも微かに見える。けれどもそれよりも左の大連灣の風景は如何に自分の心を惹いたであらうか。ダルニーの市街は唯それ盛氣樓かとはばかり蒼波の上に浮び出て、大連灣の一角、柳樹屯の岬が鼠色のやゝ濃い色をして、危然として長く海中に突出して居る具合、普通の景としても充分賞鑒するに堪へたるに、まして其彼方の南山——低いのつべりした山には、敵營、敵兵。

「見えるだらう？」

と地に身を這はせて、双眼鏡で見て居る自分の後から、大尉が言つた。

「よくは解らんですけれど——」

それではこれで見給へと、其携へて居る良好なる双眼鏡を貸して呉れて、「そら、其の向ふの山の中段に堡壘が一つ見えるでせう。その堡壘から、ずつと路が——赤土の路が蛇の這うやうに付いて

居て、そら、其處に、今一人露兵が……」

「成程、々々」

果して其路を兵士が何か重い物を運んで居るのが微かに見える。

「それから、其すぐ一段上に、兵營見たいの屋根が見えるてせう。それが何でも將校の居る家屋らしいので、天氣が好いと、其窓の硝子がよく光る、夕日の頃などは、實に眩い位に光る……」

忽然天が崩れたかと思つた——凄しい音が耳を劈いて聞えたと思ふより早く、

敵の巨弾

はヒューといふ音を空中に漲らせるから、あなやと思ふ間に、自分等の覗いて居る山の下五百米ばかりの處に、黄い黒い砂煙を立て、凄しく落ちた。續いて一發、二發、三發。

自分等は思はず五六間驅下りた。

「見えたのかしらん」

「見えたと見える」

「危険、危険！」

と言合つたのは、それから二三分経つてから後のこと。

猶二三發此方面に向つて鳴つて來たが、恐い物見たさの習慣。少時してから、又其絶頂の岩の陰に行つて、双眼鏡丈け前に出して、こつそり見た。よく見ると、其の低い山、即ち南山は悉く堡壘と言つても好い位。其掩濠の脈々として幾階段にもなつて鉢巻して居るのが辛うして眼に映る。扇子山の司令塔らしい高い處には、高い家屋が一つ見えて、其前にも確かに堡壘……、

轟然——又鳴つて來た。

下に下りながら、

「あの砲は何の邊から來るのです？」

と訊くと、

「南山の右の方に大きな砲がある様です。今のは野砲で、中央の一番高い處から多く遣つて來る」

「絶えずよく來るのですか」

「え、もう人の影さへ見えると、それを目標にして打放すです。そしてそれが大抵此處まで達か

んですから——殆ど何の爲めに打つのか解らん」

「恐いんですかナア、矢張り」

「やう」

と言つて笑つた。

この第一線に出て居る隊は、無論宿營などはせずに、テントを張つた儘、終夜戒嚴を保つて居るのである。大尉の居るテントの中には、中尉少尉などか二三人集つて、地圖を展げながら、頻りに戦局を談じて居たが、この露營の光景はまた頗る詩的で、松原の中、もしこれが月の夜でもあつたなら……と自分は例の空想に耽つた。

暇を告げて歸途に就いたのが、何でも四時過。兵士の陸續と炊事に急ぐ路を分けて、漸く韓家屯の南方高地に出て、それから關家店（こゝには野戰病院があつて、赤十字旗と國旗とが交叉されて夕風に靡いて居た）を魏子窩街道に向ひ、漸く劉家店の宿營に歸つたのが日暮頃。

五月二十四日（火曜日）晴、

雨になるかと思つたのが、今朝起きて見ると快晴。何うだ、今日は老虎山に登らうてはないか、金州攻撃が始まつて、前進して丁つては、もう登る機會が無くなつて了ふからとの小笠原君の發意。自分はすぐ賛成して、同行の人を募ると、高等文官の中で行きたいと言ふのが、田中選氏と西川光

太郎氏の二君。それに、寺崎廣業君も一緒に支度まで爲たが、出發前になつて、參謀部から呼びに来たので、待つ間隙もなく出懸けて了つた。

さてこの遼東の名山

老虎山登山

に就いて、案内者を雇はうとしたが、小笠原君の言ふには、何もそんなに大騒を爲んでも、あの見える谷を目的に登つて行きさへすれば譯が無い、僕が先導を爲るよ！その大氣焔に、それでは君に頼むよとの事に決し、魏子窩街道の關家店の少し先から、路も無い丘陵、島の中を一直線に押通して、老虎山の北側の谷の底の村に来たのは、丁度十一時半頃でもあつたか。田中君は途中ではぐれて了つて、いくら待つても遣つて來ぬので、午飯を其村の柳の陰で済まして、さて愈々登山。

自分は山が好きで、内地では随分色々な山に登つたが、この山は丁度妙義山の高いやうなもので、全山悉く岩石を以て成立つて居る。岩石山の登攀し難いことは誰も知つて居るだらうが、この山は殊に險しく、谷を越えて、登路に懸ると、次第に困難は加つて來た。それでも初めの中は何の是しきにと勇氣に任せて登つて行つたが、十町許して、瀧の落ちたらしい絶壁に至つて、はたと當惑

した。色々と路を探した結果、最先に岩を攀つて登つたのは、西川君。自分も其後に跟いて登ると、巉岩人を懸して、其危険、一步を誤れば、数千仞の下に墮ちて粉微塵になつて了ふのである。仕方が無いから、靴を脱いで、跣足になり、殆ど這うやうにして岩から岩へと傳つて行く。先に行く西川君が岩角から岩角へと傳つて、さて向ふの光景を見て、登れるとか登れんとか叫ぶのであるが、我等は幾度絶望の聲を擧げて、到底此の山の登躋すべからざるを叫んだか知れぬ。であるから、幾箇所の絶壁、幾箇所の巉岩を漸く降り盡し、登り盡して、兎に角中の峯の一角に取附いた時には、思はず大聲を擧げて快哉を叫んだのである。

中の一角からは、只大連灣の一面、大窰口あたりの平野がちらりと見ゆるばかり、群峯四面に突起して、更に眺望の快を食ふことが出来ぬのである。けれど、それから眺望の好い、金州盆地の一面に見える奥の峯の一角まではもう左して遠くも無いので、三十分程して自分等は其一角に恐々ながら立つことが出来た。恐々！實際自分等はもしや敵の斥候に邂逅することはありはせぬか、敵の騎兵に追蒐られて岩から墜ちるやうなことはありはせぬかと、馬蹄の跡の處々に残るのを見ても、何となく薄氣味悪いやうな心地が爲たので、山の谷峽に支那人の放つた豚、野羊の群の集つて居るのにすら座ろに心を置くのであつた。

さて其一角よりの眺望！明かて、廣々として、更に一の遼影を見ない。昨日の高地からは、金州城も南山の敵壘も平面に遠く連つて見えだが、此處から見ると、何も彼も低く小さく、さながら興隆地形圖を見るかのやう。そして金州城の城壁が四角に市街を圍んで居るさまは、丁度棋盤のやうで、双眼鏡で見ると、清人の通行して居るさまも指點せられる。

南山の敵壘、これも仔細に見ることが出来たが、前日の經驗があるので、顔を出すとすぐ打たれるやうな氣がして、岩角に取附きながら、身を這はせて、辛うじて目を寓するといふ始末。——自分ながら自分の臆病に呆れたので。

「これは實に無類の觀戰地、大抵明日あたりから金州の攻撃が始まるたらうから、其時は此處に登つて見やうではないか、何も彼も只一目、此處には砲彈も届かんから」など、西川君と語り合つたが、更に別路を取つて歸途に就いたのが、午後三時頃。今度取つた路は、老虎山々塊の連り渡れる間を右へ右へと出て、朝陽寺、各條溝などの村落のある、今一つ手前の峽間へと出て來たが、到る處皆わが兵士の露營せぬはなく、逢ふ人皆な明日の前進を説かぬはない。

山峽の一角、楊樹の簇生せる涼しき蔭に二三のテントが張られてあつて、それは第二聯隊長渡邊大佐(祺十郎)の宿舎せるところのこと。刺を通じて十六日の戰況を聞くと、大佐は得々として仔

細にこれを語られた。

十六日の戦は、此左翼方面が最も盛んで、十三里臺子山麓の敵の砲兵の敗走したのも、此方面が一舉に破られて了つたからで。小銃を交へ始めたのが零時二十分。二時十分には各條溝附近の線を全く占領して、敵をこの山塊外に撃攘して了つたので、敵兵は約千五六百名ばかり、高地から高地へ據れる其線は頗る頑強に、前衛はそれに登るのに、一方ならざる困難を感じた相である。殊に、最初の一高地を奪取して、更に前方に横れる高地に向はんとせし時、左右の山より烈しく小銃を打懸けられたのに、わが隊の死傷も尠くなかつた。幸に、これをも奪取し、更に前衛を進めると、其時のさまが丁度敵の右側背に出た形になつたので、敵の左翼は大狼狽を生して退却、其一部の頑強なる抵抗も遂には共に總崩と爲つて了つたとのこと。

「兎に角快戦であつた」

と語られた。

「明日、愈々始まる相ですナ？」

「イヤ、まだよく解らんけれど、もう長くはあるまいよ」

夕陽の影の楊樹の葉に洩る、頃まで語り合つて、其儘鏡子窩街道に出ると、今朝第一師團の方面に出懸けた同じ寫真班の巨君中君に邂逅した。巨君の言ふには、愈々明日は金州攻撃、今朝寺崎君が參謀部に呼ばれたのは、其事で、明日は成べく輕装して跟いて來いとの命令であつた相な、此れから劉家店に歸らずに、其儘野戰隊に附いて行き度いが何うだらうとのこと。其意氣は非常に昂つて居る。

愈々金州！金州！

自分も尠からざる胸の鼓動を覺えた。

走るやうにして劉家店へ歸る。

夜、果して命令が來た。其要に曰く「明朝六時、輕装の上に輕装して、劉家店宿營前、砂川の對岸に集合すべし」と。

自分等一行の軒昂は何うであらう？宇品乗船以來、夢にも見現にも望んだのはこの一刹那、明日は愈々砲烟の高く白く破裂するのを見ることが出來ると……思……ふと、續いて眼に見えるのは、悲惨極まれる戰の場。其處には血に染みて苦悶する兵士、友の死屍を乗越えて奮戰突撃する勇敢なる兵士のさまなどがそれとなく想像せられて、明日、明後日の食糧の道明寺糒を背負袋に入れながらも、氣は戦々胸は兢々。

十時過ぎに、堀君が管理部から貰つて来て呉れた三食分の辨當を受取つたが、其後も神經が興奮して如何にしても眠られぬ。

五月二十五日（水曜日）晴、風

五時、砲聲！砲聲。

そら！と飛起きて、準備も勿々に、豫ねて命令せられた川原へと行く。晴れては居るが、何となく事あり氣な天氣で、老虎山一帯の山脈には、風を帯びた凄じい黒い雲が矢を射るごとく早く早く走つて居る。東には、もう朝日の光が明かではあるが、しかも佗しく山の半腹に漂つて、雲の一端が刷毛で塗つたやうに赤く赤く染つて居る。川原へ行つて見ると、司令官、參謀連中はまだ遣つて來ず、馬卒の曳ひた馬ばかり高く勇しく朝の空に嘶いて居る。金州方面には、砲聲、砲聲——それが段々盛になつて來る。

初めに出て來たのが、佐竹少尉（準）、立ちながら今日の話を爲て居ると、續いて橋管理部長、川村高級副官、後から由比參謀次長、山梨參謀などが續々として出て來られたが、やがて司令官は勇ましい勢で、栗毛の駒にひらりと跨がられた。落合參謀長は肥大な身體を幾度となく其鎧に乗せ兼

ねて居られたが、馬卒が手傳つてこれに乗せ終ると、河原に待つて居た掩護の騎兵が約一中隊ばかり續々と繰出して、將校の列正しう、愈々出發の活書を畫くので。

大戦の朝

のいかに趣味深い者であらうかと、自分は思つた。前なる森山の陰には凄しい砲聲が盛に聞えて、朝日の光が無限の希望を此第二軍に與へるかのごとく後からさし渡つて、隊伍正しく堂々と進み行くこの將校の一團！司令官の胸にはさぞさまの感やら決心やらが溢る、ばかり張り渡つて居るであらうと思ふと、自分は實にある深い聳動を此胸に覺えたので、これを畫題にしたならば嘘を面白からうと寺崎君に囁いた。續いて、柴田君に一枚撮り給へと勧めると、僕も先程から左様思つて居るが、まだ何うも光線が薄いのと遺憾らしい。

砲兵部長、軍醫部長、經理部長、管理部長、憲兵部長と騎馬の列が段々に長く續いて、最後に馬卒、從卒、備人の一部が、其早い馬の足掻に後れぬやうにと、殆ど小走りに走つて行く。自分等一行は寺崎君三浦君と共に清苦力三名に寫真機械や、背負袋や、其他必要品を荷せて、同じく其砂原の中を後れぬやうにと附いて行つた。

砲聲が愈々盛になるので、人々の心が何となく先へ先へと急ぐのであらう。河口を過ぎて、關家店に達する頃には、司令官一行の馬の足掻は頗る早く、絶えず走つて居りながら、しかも猶後へ後へと置いて行かれ相になるのであつた。殊に、今日は空は荒れ模様、烈しい西風が正面から吹付ける爲め、遼東特有の砂塵は高く黄く渦を巻いて、走る人々の肩、胸のあたりは丸でそれが白く堆くなつて居る。否、關家店から、右に入つて、例の韓家屯東南方の高地に來ると、風、砂塵、殆ど眼も明けられぬ位。

けれどこの壯大なる朝の光景が前方の砲聲と相伴ひて、いかにすぐれたる面白い感をも自分にも與へたてあらうか。顧ると、老虎山一帯の山脈——それは關家店まではよく分明と全景を見得なかつたのであるが、高地に出ると、丸で一目、さながら晝のやうに其前に展開せられて、をりから絶崖に靡き渡る蓬々たる黒い凄じい雲は、朝日の血汐のやうな光に照されて、早く早く其山脈を掠めて行く。前を見ると、十三里臺子の山にも同じく黒い長い雲！

「何うだ！此光景は？」

「實に壯大だ」

「戰雲と言ふのは、これを言ふのだらう」

と三浦君は小走りながら言つた。

砂塵の渦さ上る高地も只一走り、阪を下りて韓家屯に入ると、其儘自分等は捷路を取つて、白の中を一直線に村の盡頭へと出た。韓家屯の村の盡頭には、楊樹の列が横に一直線に列んで居て、其向ふには斜なる丘陵が赤褐色を呈して遠く廣く展げられてある。今しも見ると、司令官の一行は早く既に其の楊樹の列に及んだので、其の騎馬の一直線を爲して進んで行くさまは實に勇ましい。(真の七)自分等は呼吸を切らして其後を趁つて、三十分ばかりの後、漸く十三里臺子の村落へと來た。鐵道線路の低い窪地から懸けて、十三里臺子の山の半腹には、命令が下ればすぐ出やうとする砲兵旅團の砲車が堵のごとく密集して、前進部隊の駛つて行く砂塵に丘陵の上から上へと横に斜に懸つて居る。司令官の一行は其間を右に左に頓着せずに進んで、遂に十三里臺子の右方の山上へと出られた。

標高約二百米の高地、其半腹に一先づ觀戰地點を定められたが、何うも思はしく見えぬと覺しく、二十分程して、更にその望遠鏡臺を其絶嶺へと進められた。自分等は半腹以上更に登攀するのを許されぬので、何うかして前面の壯大なる光景に目を寓したいと、此方の岩角、彼方の絶壁と顔を出さうとすると、すぐ憲兵から、「出ちやならん、出ちやならん」と一喝されるので、餘義なく見たい

のて湧き返へる胸を押へながら、ぶつ／＼言つて其處等にまごついて居た。

砲聲は愈々盛——其聲が自分等の居る山に反響して、何うしてもじつとしては居られぬ。「さう三浦君、こんな處に何時までぐつ／＼して居ては、戦争は見られやせん、僕が好い處を知つてゐるから（先日登つた松山を思出したので）一緒に行かうぢや無いか」と誘ふと、三浦北峽君は忽ち賛成して、其儘二人して山を下つた。

かの先日敵砲を食つた松山は、此處からさして遠くは無いので、丘陵に大開鑿を加へた鐵道線路の窪地を下にたどること五六町——その一角に鐵橋を架したところがあつて、其處からは丘陵が三十間ほど途絶えて、金州の廣潤なる盆地がちらりと見えるのであるが、其處等に昨日まで密集して居たわが歩兵は、悉皆既に前進して了つて、其附近には牛鑊の殻やら、竹の皮やら、紙片やらが散かつて居るばかり。自分等は其の絶間からこつそり金州の方面を見て、直ちに猫の飛上るやうに其の松山へと登つた。此處にも兵は既に一人も無く、同じく紙片や牛鑊殻や煙草殻が四近に名残なく散ばつて居たが、松の低い林を急いで通つて、背を丸くして頂上から頭を出すと、實に好眺望、好觀戰地！や、今打つた敵砲が前方凡そ千五百米ばかりの處に黄い砂塵を揚げて爆裂するのが明かに、殊に、自分等に便利であつたのは、其頂上に歩兵の掘つた掩壕が、さながら我々の爲めにでもある

かの如く残し棄てられてあつたことで、自分は三浦君と一緒に毛布を其底に敷いて、芝居でも見る氣で、じつと其前に展げられた大バノラマを望んだ。芝居でも見る氣！いや、其時は左様でも無かつた。

初めて臨んだ戦争の大舞臺

凄じい大砲の巨音が天地も震ふばかりに轟き渡つて、曳火弾は白く、着発弾は黄く黒く爆裂するのを見ると、臆病のやうではあるが、何となく氣がそは／＼して、胸が妙にどきついて、かうしてじつとしては居られぬやうな心地が爲る。頭を出すと、打たれる恐れがあるので、否、先日現に其經驗があるので、自分等は寧ろ小さくなつて、臥そべつて、其前方の大景を望んだので。

風は烈しいが、暖い、空氣の透明に澄んだ日で、南山の敵の陣地から打出す砲はさながら掌に指すかのやうに見える。わが砲兵陣地は？と見ると、一番近いのが、自分等の高地から約五百米ばかり離れた偏平な丘陵の上で、其處に野砲ばかり据ゑられてあるが、それより猶五百米を隔て、十二三門並べた砲兵陣地があるのが歴然見える。眉を擧げて望むと、今朝の暴れ模様の名残は猶金州灣から大連灣へと懸けて明かに其の痕跡を留めて居て、透徹し過ぎた空に、黒い凄じい殘雲が砲烟か何

ぞのやうにちぎれ／＼に飛んで、海の色碧の濃さと言つたら……。岸には、怒濤の烈しく碎けるのが白く、白く。

『そら打つた！』

と言ふと、共に絶大なる響。續いてわが砲兵陣地からは、砲身がびかツと光ると同時に、砲弾は空気を裂いて鳴つて飛んで行く。それと引違ひに、敵の砲弾も音響と共に盛に炸裂して、最も近いものは、自分等の高地の二百米ばかりの下に來て、破裂して黒い凄じい砂煙を二三間ほど颯げた。その最も多く來るのは、第二番目の陣地で、一時は十五六發の敵弾が其附近に黒く白く落下するのを見た。下の砲兵陣地には砲門が五ツ六ツ、其周圍に五六の人の小さい影が人形のやうに見えて、瞳を凝すと、打つ時に手を舉げて號令するのもあり／＼と。

『向ふの山を見給へ、味方の歩兵が眞黒になつてくつ附いて居る』

かう三浦君に言はれて見ると、西の金州灣に面した方面に、丘陵がいくつとなく連つて、其陰には、味方の歩兵が一個大隊ばかり黒く據つて居るのが眼に映る。それから、猶西へ西へと丘陵は靡き渡つて居るのであるが、其の丘陵の鞍部とも覺しき邊に、敵の砲弾の來ること、來ること、或は白く、或は黒く、或は黄く、今落ちたのが十間ほど高く凄じい砂煙を颯げた。

『彼處に……味方の砲兵陣地でもあるのか知らん』

『いや、彼の方面から味方の歩兵が出て行くので、それを目蒐けて打つのに相違ないよ』

『彼方は第四師團か知らん』

『左様だらう』

一時間ばかりからうして見て居つたが、盛であつた相互の砲聲は段々少く靜かになつて、十一時頃には、殆ど敵味方共交綏といふやうな形に爲つた。頭上から照る日の暖かさ、野には農民の畑打つ影、雲雀の聲は峰より高く揚つて、今にも修羅の巻を現出するであらうと思つた盆地は、打つて變つて、長閑な靜かな平和な光が滿ち渡つた。

午餐を開きながら、

『何うしたんだらう』

『中止するのか知らん』

『何うも不思議だ！』

などと評して居た。

司令官は？と見ると、十三重葎子の山嶺には、今朝登つた儘の望遠鏡臺が明かに立つて、將校らし

軍人の影が五ツ六ツ小さく黒く浮き出て居るし、山の背に黒くくつ附いた一箇大隊ばかりの兵は其儘印したやうにじつとして動かぬし、砲兵陣地の一群も其處に圈を爲して黒く見えるばかり、更に打方始めの形勢も見えぬし、此儘戦争はお止めになつて了つたかと思はれた。自分等は活動すると思つた舞臺は活動せず、皆な不思議の黙りの幕になつて了つたので、十一時頃から少し退屈氣味に爲つて來たが、午餐を食ふと、胃はやしもたれ氣味の、頭上からは、暖かい、暖かい、遼東では滅多に得られぬやうな暖かい春の日影が映すので、眠るともなく、二人はついとろく。

何かの音に驚いて眼を覺すと、時計は既に三時。自からわが大膽に呆れながら、前を見渡すと、光景は依然として元の儘、元の形、元の姿。

此時不圖、登つて來たのは、小笠原君、中君。

「何うしたんだ？」

と突如聲を懸けて聞くと、

「今朝の暴れて、待つて居た海軍は來ず、それで今日の攻撃はこれで中止だ相だ」

「何だ」

と自分等は大に張合抜けが爲た。

それにしても今日中止してそして明日始めるのであらうか。それとも亦更に日を期して再攻撃を爲るのであらうか。其點は聞いても更に不明であるとのこと。で、我々は猶其處で、色々さまさまの事を語り合つて居たが、敵は午後四時頃から、再び砲撃を開始した。けれどわが砲は沈黙して更にこれに應じやうともせぬ。

司令部が此間に位置を轉じて了ふと悪いからと中君が少時してから其視察へと出懸けて行つたが、その戻つて來る前に、何時の間にか、絶嶺の望遠鏡臺は徹せられ、司令部掩護の騎兵は列を作つて、將校の黒い影も續々と其山から下られるのを認めたので、

迷子になつては大變！

と、自分等は取るものも取り敢へず、急いで松山を下つて、其後を趁うた。

けれどももう既に遅かつたので、山の麓に行つて見ると、馬卒副馬の影も無く、附近の兵士に訊いて見ても、今、司令部が此處を下りて彼方に行つたとはばかり、其地點に就いては更に知る者が無い。まア、兎に角其處等に行つて聞いて見やうと、先づ十三里臺子の村落に入つたが、聞いても聞いても、更に其位置を知ることが出來ぬ。

宿營地劉家店に歸つたのか知らん、それとも亦他の村落に一時の宿營を取つたのか知らん。明日此攻撃を再び開始するなら、必ず此近所に一夜を過すのに相違ないが、それが分明解らぬから、想像にも何にも其位置を斷ずることが出来ぬ。大に絶望したが、仕方が無い、兎に角韓家屯まで行つて見やうといふことに一決して、覺束ないながら一里程後に戻つて、其村に行つて見ると、其處には彈藥縱列、糧食縱列、衛生隊などが密集して、一方ならざる混雜を呈して居た。第一師團の管理部が發つて居たから、司令官は此處を通過したか否かと聞くと、全く知らぬとのこと。けれど主計の話では、師團司令部が既に各條溝朝陽寺に出て居る位だから、軍司令部は劉家店に歸るといふことは無い。斷じて無い。それに明日は金州を攻撃する筈だから、其方面を捜して見給へと親切に言つて呉れた。

日は暮れ懸る、烈しい風にはなる、自分等三名（小笠原君、三浦君）はいかに心細く高原から高原へと進つて行つたであらうか。止むを得んければ、師團司令部に行つて、星野參謀長に頼まうと決心は爲たものゝ、糧食と言つては今日の晩食と、其他道明寺精を二分分脊負て居るばかり、何うなるとかと實に心痛の限であつた。未だに忘れぬのは、其高原を登つて行くと、大きい白い雲が迷々然として、殆ど天地を蔽ふばかり、實に滿州の風景は壯大だなどとは言ひ合つたものゝ、心細さ

は各々の胸に充ちて、其時出逢つた草刈の男に路を訊いたことは後まで皆な覚えて居た。高原に出ると、吹飛されさうな風！其風を避けながら心細く荒涼なる高原の路を向ふに下りると、其處には二三の人家——其附近に腕に白布を纏つた從卒（腕に白布を纏つたのは軍司令部附の徽號）に逢つて、軍が此村落に宿營して居ることを知つた時は、それは何んなに嬉しく、蘇生したやうな心地が爲たか知れぬ。

此村は荒涼たる遼東の中でも殊に荒れた寂しい村で、ダイニングシレイプの白布の纏つた家屋なども實に汚い狭い建物であつたが、それでも忘れられぬ印象をこの自分の胸に與へたので、自分等の宿營した農家。それが如何に面白い趣味に富んで居たであらうか。想像して御覽なさい、吹飛はされ相な風を避けながら、豫め定められたる其民家の扉を排すと、夕暮の事として戸内はもう開黒、其傍の釜には中君と下村君とが一生懸命で燃えた火を吹付けて飯を煮いて居たが、自分等を見て、ヤア歸つて来たか、何したかと思つて心配した……と言葉を懸ける。屋の内には例の赤い紙や黄い紙が貼々と張り付けられて、暗い奥の室には、ぼろ／＼となつたアンヘラの上に毛布を敷いて、寺崎君と柴田君とが蠟燭も點けずに目ばかり光々と光らせて居た。傍には民家に普通の瓶、桶、箱などが處狭さまで並へ立てられて、其上に我々一行の寫眞機械やら何やらが一杯になつて載せられて居る。

何故火を點けぬのかと訊くと、蠟燭が一本も無いといふ。管理部から貰つたら何うだと言ふと、蠟燭を貰ふどころか、今米を貰うにすら、管理部長から大目玉を頂戴した。君等は一體何處に來て居ると思ふ、此處は戰場ですぜ、明日は大戦争が始まらうと言ふのですぜ、今朝、あれ程糧食を充分に持つて行け！と言つたのを忘れたですか。と酷く遣られた。それでも何うやら彼うやら二升ばかり貰つて來て今炊いて居るが、誰も經驗が無いので弱つたとのこと。明日戦争があり相かと思ふと、無論ある、明朝は午前一時の出發！

戸外には、風、其れは實に烈しい風で、峯を渡る黒い雲は凡て大入道でも歩行するかと疑はれるばかり。裏の扉が幾度閉めても、吹あふられて、風の一霎ごとに凄しい音を立て、居る。

「この荒れぢや明日も海軍は來んぜ」

「けれど、……もう明日は海軍が來る來ないに拘らず、陸軍が獨力で金州を落すといふ話だ。何ても今夜、前進部隊は金州城附近に出るのだらう」

「實に愉快だ！」

山中の荒村荒屋、その中に充ち渡りたるこの衝天の意氣——何んなに此胸は躍つたであらう。實に忘れぬのはこの鐘家屯の一夜である。

中、下村の兩君は闇黒の中に燃えさしの高梁穀を振り翳して、幾度となく大釜の蓋を取つては、飯の熟否を見て居られたが、やがてもう好いと言ふので火を引くと、煙は夥しく室内に籠つて、満足には呼吸もつげぬといふ光景。そればかりか、翌日の晝飯まで三食分を柳行李の辨當に詰めて、さて食はうとすると、折角大眼玉まで頂戴して泣くやうにして貰つて來た飯が半熟も半熟も丸て石のやうな固い飯！

咄々言ひながら無理遣に咽喉に通して、もう仕方が無いから眠る事に爲た。蠟燭！蠟燭の無かつたのは實に佗しい限であつたけれど、それがあつて、室の四近が分明と見えたら、それこそ不潔で一層眠られなかつたかも知れぬ。アンペラの破れた處からは炕の冷いのが肌に通つて、其寒さ、寒さ。それに、南京虫が多いと見えて、身體の痒くなるその不愉快さと言つたら。

うとくと眠つたと思つたが、凄しい雷鳴に再び夢は全く覺めた。見ると、戸外は非常なる大暴風雨。山中の魔神が一時に雲に駕して來たかとはかり、樹は鳴り渡る、扉ははためく、闇を破る電光はしつさり無しに百道の神矢を放つて、其絶間々々に天も震ふばかりの雷鳴、大雷鳴、

雨は車軸を流すばかり。

この暴風雨の中に前進する歩兵砲兵の困難は！と想像すればするほど眼が冴えて何うしても眠ら

れぬ。何時かとマッチを摩つて時計を見ると、もう十二時五分前。午前の一時に、司令官一行は出發すると聞いて居つたが、

この風雨、この電光雷鳴の中

を果して出發せらるゝのか知らんなどと思つて居ると、雷鳴の絶間々々に、これはまた凄じき砲聲の斷續——歩兵が出て行くに見える。

他の諸君はどうせ寫眞が撮れぬから、夜が明けてから出懸けると言つて居たが、自分と寺崎君と三浦君とは一所に行かうと言ふので、十二時半頃、自分は支度をして兩君を呼び覺した——けれどいざ出發しやうと思つて扉を明けると、戶外には依然たる風雨、電光、雷鳴、司令官も出發の模様が無し。

「餘り酷い、今少し模様を見やうぢや無いか」

と寺崎君も言ふので、準備した儘、再び横になつた。そして遂にとろく

五月二十六日（木曜日）快晴

砲聲が盛に聞えると思つて眼を開くと、黎明の光が既に微かに室内に及んで居る。風は依然として烈しいが、雨はあがつたやうな模様。三浦君が戶外に出て聞くと、司令官は三時に暴風雨の中を前進せられたとのこと、自分等はすぐ飛び出した。

まだ少し小雨が降つて居つたが、もうそんな事に頓着する暇が無い。砲聲、砲聲、其の砲聲が實に盛に聞えるので、胸は戦々、心は競々、一刻も早く其大景に目を寓せ度いものと、鏡子窩街道に集つて居る彈藥車、輜重車の混雜せる間を驀地に抜けて、其街道の金州盆地に出やうとする少し手前から、右に山峽の間を越えようと、其盡頭に二三軒の人屋、其背後の山を一目散に駆け上ると、其の大景。

實に何と言つて好いか解らぬ。金州灣方面から雲、霧が次第に晴れ懸つて、西の空は一帶の碧、金州城には霧はまだ半ばど靡き渡つて居て、其處に敵味方の砲煙が白く疾々と丸て蜂の巢でも突いたかのやう。四方から起る砲の響は、天地もこれが爲めに崩るかと思はれるので、明け渡つた海山の一角に、こは又何等の活動。

丁度其時が午前六時。金州南山の敵壘を弦線に包圍したわが軍は、金州城西門の一つ、同じく東門の一つ、肖金山下の一つ、六里庄附近の一つ、それから右翼に二三ヶ所の砲兵陣地を構へて、

盛なる一齊射撃を開始したので、敵は金州南門より停車場の線に歩兵を出し、南山の砲壘は一時悉くこれに向つて砲門を開き、其光景の壯大なる、其威力の猛烈なる、今迄かゝる人工的壯美に接したことの無い自分は只々呆氣に取らるゝので。

自分等の登つた山は老虎山山塊中標高百二十米許の高地で、前にはそれより少し高い山、其處には第一師團司令部が登つて居て、參謀らしい將校が頻りに望遠鏡を覗つて居るのが黒く浮き出たやうに見える。電話線は其れよりずつと一直線にわが傍を縫つて居るが、其行衛を後に顧ると、各條溝の高い丸い山背には夥しい人馬、一見、軍司令部であるのが解る。

自分は寺崎君と三浦君と山の突角にある疎らな松樹の下に凭つて、小さくなつて此大景に唯見入つた。南山の敵壘は丸て手に取るやう。打つ度毎に砲身がひかつかつと光るのも明かに見えて、近く炸裂する曳火彈、山、畑、人家の嫌ひなく凄しく砂塵を揚げる着發彈、殊に味方の砲彈の敵の砲壘に炸裂する光景は見事なもので、四方から集中したのは、東北の突角の堡壘、その附近は丸で一面の簇々たる砲壘——見よ、此時空は既に拭ふがごとく晴れて、朝日の光は流るゝごとく此の盆地に射し渡り、殊に、南山の敵壘はまともに此の赫かなる光を受けて、大連灣はさながら藍を湛へたかと思はるゝばかりの色の濃さ！

寺崎君、三浦君の頻りに寫生して居るのを見ながら、自分はいかにこの朝の壯觀に見惚れたであらうか。砲聲に戰慄したのも少時の間、其中には段々馴れて、初めは眼に入らなかつた味方の砲兵陣地も明かに、前進せる歩兵の位置もいくらかは分つて來たので、其興味も愈加り、さては今少し前進して見やうかと思つて居ると、前なる第一師團司令部はばらばらと前の山を下りて、向ふへと出て行つた。

否、それから三十分程経つと、自分の觀て居る山の麓を軍に附屬せる參謀、副官などの將校が陸續と通つて向ふに出て行く。折りから來懸つた石光副官に聞くと、司令部を肖金山に進めるのであるとのこと。果して、其後から奧司令官を始め、落合參謀長、税所砲兵監、森軍醫部長などの將官が續々と進んで來て、砲聲の凄しく聞える山麓を縫ふやうにして、向ふへ向へと前進するので。自分等も其跡に跟いて、

肖金山

へと向つた。

肖金山は標高百米ばかり、金州の盆地に突出して居て、其地位は觀戰には好いが、頗る危険な

ところにある。よく敵があつた。肖金山を砲撃しなかつたものだと後に自分が言つたら、君等はそれだから駄目だ、敵砲が沈黙したのを確めたから其山上に前進したので、危険と知りつゝ何うしてそんな處に出るものかと山梨參謀から笑はれたが、其肖金山の背後には、軍の豫備隊なる第二聯隊（佐倉）が出発命令を待ちながら、陸續として集つて居て、其前面の砲兵第一聯隊の陣地からは凄じい砲聲が耳を劈くやうに聞える。活動、活動、實に狀すべからざる活動の畫圖がこの一帶の地に展かれて居るので、現に、其麓の一角に第一師團司令部も位置を占めて、師團長 伏見宮殿下は九重の雲深く、尊き御身にて入らせらるゝに拘らず、衆庶と共にこの戰場に臨ませらるゝ、實に感涙の袖を濕すのを禁じ得なかつた。

山梨參謀の言はれた通り、午前九時半頃になると、南山の敵砲は大に威力を減じて、我軍の益々猛威を逞うするに拘らず、かれは扇子山の砲壘を以て緩かに我に應戦するに止まつたが、其頃から我前面の歩兵は續々行進を起して、小銃の響が凄じく何處ともなく聞えると共に、前なる金州停車場に眞黒になつてわが歩兵の前進するのを見た。あれは丁度それと同じ頃で、ふと凄じい砲聲が大連灣方面から聞ゆると思つて見て居ると、敵艦！敵艦！と言ふ聲が其處となくこの一帶の高地に満ち渡つた。藍のやうに濃い大連灣の海、其處に砲艦らしい一隻の軍艦、これは前から見えて居つたのであるが、自分等はそれを味方の軍艦とばかり思つて居たのに……それが、今しも砲門を開いて、碧なる海に白い烟を靡かせながら、わが第三師團方面を砲撃し始めたのであつた。後で聞くと、第三師團方面は思ひも懸けぬ方面から砲弾が来るので、一時は非常に困つた相である。けれど、わが海軍、それは亦昨夜の暴風雨を凌いで、今朝から如何に有力なる援助をこの軍に與へつゝあるのであらうか。

肖金山の絶巔に登ると、其方面が分明見える。先づ、前に城壁を地圖のやうに展けた金州の盆地、其向ふにわが砲兵旅團の砲兵陣地、猶その向ふに、第四師團の散兵線、それから碧なる金州灣は盤のごとく展開せられて、其蒼波の上には、一隻、二隻、三隻、四隻までわが軍艦は勇しい砲門を開いて、頻りに雷のごとき凄じい砲弾を南山の敵壘に向けつゝあるの。

午前十時より日没まで——自分は此肖金山を離れなかつた。其間の光景の千變万化、自分は如何にしてこれを記すべきかと思ひ惑ふので、今想像しても其日の光景が歴々と眼の前に見えるやうな。肖金山の絶巔には例の望遠鏡臺が据ゑられて、其周圍に、軍司令官始め參謀の將校達が圍を畫いて或は座し或は立ちつゝ、戦況を觀望し、それから少し下に、管理部長、通譯官、高等文官、副官部、憲兵部などの人々が思ひ／＼に觀戰に適した地位を占め、それから十重二十重にと馬卒從卒備

人などが其山を取巻いて居て、面白い光景がある毎に、色々さま／＼の批評が出て、それは中々賑かである。其間ををり／＼傳騎が各師團の報告を傳へて来る、軍の傳騎が命令を帯びて疾風のごとく飛んで行く等、その活動、その混雜——それ丈けても既に人々の心を波立たしめるのに、やれ歩兵が今黒くなつて進んで行くとか、やれ砲兵が陣地を轉換するとか、やれ彈藥が缺乏したとか、やれ金州に火災が起つたとか、一分毎に其光景は變化を呈して、殆ど端倪すべからざるものがあるのであるものを。十一時頃になると、一時停車場に集合したわが歩兵は、今や時機熟したりと思ひけん、縦列を作つて、ずん／＼前進して行くのがあり／＼と。

『あれ進む、進む』

『何うだ！行く行く』

などと見て居ると、俄かに起る敵の小銃、敵の機關砲の響！その

機關砲の響

と言ふものは、丁度遠い煤拂を聞いて居るやうで、實に何とも言ひやうの無い厭な怪しい音がするのであるが、其が聞え出したと思ふと、其の黒い長い縦列が其後に一人、二人、三人、五人と傷い

て倒れたものを置いて行く。何しろ、餘程烈しく銃丸が飛んで来るものと覺しく、猶其隊は躊躇せずに進んでは行つたものゝ、約五百米も行つたと思ふと、二手、三手、四手に分れて、一つは彼方の村の陰、一つは楊樹の簇生せる裡、一つは其向ふの家屋の陰、最も近いのは、二町ほど退却して、其附近の掘らしい凹地へぞろ／＼と入るのが見える。この光景、これは此方面にのみ限られてゐるのではなく、南山を右翼第四師團、中央第一師團、左翼第三師團と包圍して、一歩一歩進んで行つたわが軍は、皆この敵の機關砲のねらひ打に一方ならず避易したので、中隊長、大隊長、聯隊長、旅團長、師團長に至るまで、この障礙物なき平地をいかにして進まうと心を痛めぬものは無かつたのである。それに、敵は南山の山脚に鐵條網を繞らし、狼狽を穿ちて、わが突撃を碍げれば、わが勇敢なる大隊長、中隊長、或は工兵隊などが死を決して其方面に向つても、いつも死傷夥しく、遂には退却の餘義なきを見るに至るので、宵金山上、われ等の終日觀たるさまは實にこの悲惨なる戦鬪であつた。

砲兵は幾回となく陣地を轉換し、海軍も亦頗ぶる有力なる砲撃を敵壘に加へ、午後に至りては、最早敵の一砲だにこれに應ずるものが無くなつたけれど、掩堡の中に籠つた敵の歩兵は完全なる掩蓋の下、銃眼に據りて頑強にわれを伏射し、容易に其近距離に近接することが出来なかつた。

後に聞くと、第一師團最も苦戦し、第一聯隊、第三聯隊の如き、其死傷最も多く、後れて其左翼に加つた第二聯隊なども實に多大の損害を受けたとのことである。第四師團の最右翼は満潮の爲め展開すること能はず、溺れて死したるものも多しとか。

午後三時頃までは、依然たる光景、更に少しの發展をも見ず。わが砲陣の大威力を逞うしつゝ、あるのを展望するばかり、歩兵は依然として前進を中止して居たが、此頃、何でも嚴かなる命令が軍司令官より各師團長、各師團長より各旅團長、各聯隊長に傳へられた相で、午後四時に至ると、更に開始せられたる大攻撃！（寫眞の八）

各砲兵陣地は朝來の砲撃に彈丸缺乏して、三時より四時に至る間は、稍々其威力を損じたやうな形勢があつたが、午後四時十五分に至ると、各方面とも更に一齊射撃を開始し、砲聲天地を震撼すると共に、砲煙簇々と南山を埋め、壯觀、壯觀！

自分等は稍々倦みたる眼を見張りて、じつとこれに見入つたのである。「ヤア、もう今度こそ陥落だナ」などとの聲が各方面に起るので、双眼鏡を其方面に向けると、其砲煙の簇々と炸裂して居る上に、一帶の平地がありくと見えて、其處から通じた赤土の通路には、敵の病院車が負傷者を運搬して行くさまが歴々と掌に指すかのやう。堡壘でも非常なる混雜を起して居るもの、如く、砂

塵が實に高く凄しく颯つて居る。

砲煙、砲煙、砲煙。

この大攻撃を機として、各師團の歩兵は一時に其近距離に接近し、見ると、第一師團の第一聯隊などは、其先頭が既に南山の山麓に達して、黒く地に伏して居るのが認められる。もう、彼の線まで行つた、もう一呼吸など、拳を握つて見て居つたが、しかも敵の機關砲の響は猶盛に、わが勇敢なる歩兵も猶前進し兼ねて……

けれど四時、五時、六時に亘つての砲撃の盛なのは、其後の各戦争にも見なかつた程である。陣地は既に幾回となく轉換して、漸く南山の敵壘に近く、肖金山下の砲兵第一聯隊は其前方五百米に、停車場附近の砲兵旅團第十五聯隊、第十六聯隊は其右方千米に、共に猛烈なる一齊射撃を敵壘に加へて居るので、砲身の火光を發すること電光よりも速かに、其響は四近を震撼して、其勢はこれにても猶陥落せざるか、猶陥落せざるかと言ふかのやう。

敵の指揮官は今少し、今少し……と其守備兵を勵まして居たのであらう。日が暮れさへすれば、如何に強襲を加へた敵でも、思ひ捨て、一度其攻撃の鋭鋒を藏めるに相違ない。夜になれば旅團方面から援兵が来る……とかう言つて勵まして居たのであらう。味方は又この刹那を失つては、

再びこの強襲を加へることは難しい。それに翌日になれば——否、今でさへ大房身の停車場から、敵は續々援兵を送つて居るのであるから、時機を失つたら、何んな否運に邂逅すかも知れぬ。即ち今が敵味方全力を擧げての戦闘で、

負けまいとする心、勝たうとはやる念

眞面目なる危機を齎せる戦争の神は、今しも其双翼をこの兩軍の上に擴げたのである。時はそれにも關せず、次第に経過して、空氣の影は漸く濃く、山の影、海の色、夕暮の神は其平和の衣を以てこの悲惨極まれる一帯の天地を蔽はんとしつゝあるのである。

「とても陥んかね？」

「何うも頑強だ！」

と一人が言へば、

「けれど陥さんでは仕方があるまい。もう三千から死傷者が出来たと云ふぢやないか」

「三千！非常な犠牲だ！」

「駄目か知らん……先刻彼處まで來た兵は何を爲て居るのだらう。もう進めさうなものだがナ

ア

「實に残念だ。これで陥さんでは名譽に關する」

肖金山上には、夕陽の影と共に今しも一種不安の念が滿ち渡つたので、(恐らく軍司令官もその一人たるを免かれなかつたであらう)、今迄喝采して觀て居つた人々も、皆眞面目に沈黙して了つた。

自分も少なからざる不安の念を抱いて、目瞬もせず戦況如何にと見て居つたが、依然たる砲煙、依然たる歩兵、更に其狀勢が進歩しやうともせぬ。時計を見ると、もう七時、夕日は金州灣に閃々たる金色の波を畫いて、理衣本島の影は黒く、金州盆地には空氣が濃く光を失つて、顧ると、老虎山の上には十二日の月一輪。

果して如何に此夜は過さるゝのであらうか。

何うせ、今宵は露營の覺悟、其前に、今の中に、一つ道明寺橋を煮て來やうぢやないかとの三浦君の注意。よし、さう爲やうと自分等は相携へて山を下りた。山の麓に一軒の民家があるので、其處に入つて、土人に火を焼かせ、背負袋から道明寺橋を出してその煮湯に浸し、これで明日の晝迄は大丈夫……と戶外に出ると——俄かに起る肖金山上の喧騒、見ると、山麓の馬卒從卒を始め、其附近の士官兵士、皆萬歳！萬歳！を三唱して居るので、山は丸て崩るゝばかり。

急いで前面を見渡した眼には如何なる光景が映つたであらうか。自分も亦思はず萬歳を絶叫したのである。南山の敵壘の一角には、最左翼の第四師團の一部が首尾よく突撃を成効して、輝くは旭日の御旗、聞ゆるは突撃の聲、あなやと見る間に、西方の一角は全く味方の兵を以て黒く埋められたのである。

俄に起る敵兵敗走の光景、愈々陥落と言ふので、今迄頑強に抵抗した敵の歩兵は皆な一散に掩蔽の中から飛出す。三面のわが兵は今ぞ時——と霧地に突進する。混亂狼籍のさまは鼎を覆へしたやうで、山上の路を通れ去るもの、山腹を這つて走る者、旅順街道に出づる者、これが夕陽の明かな空氣の中に手に取るやうに見える。けれど敵はその右翼を破られたので、多くは左へ左へと出て、旅順街道を敗走して行くもの、殆ど引も切らぬといふさまであつたが、今しもそれに向つて烈しい追撃を加へたるわが右翼の砲兵。

其光景を如何して忘れやう、此方面は南山扇子山乃至は難關嶺の山の陰になつて居るので、金州盆地方面とは空氣も濃く黒く、山の影も深紫色に染まつて見えて居るのであるが、其間に通ぜる夕陽の路、その走つて行く敗兵の黒い影の上には、幾簇々の砲彈白く白く炸裂して、其下に倒るゝ兵士の影も歴々と指點せらるゝ。あゝ自分は實に此の一時時に於て、自然の美、人工の美の巧に織

り合はせられたる絶大なる壯觀を見たので、夕暮の色の遍ねくなびき渡りたる海、山、野、そこにこの敗兵、この砲煙。

壯觀はそれに止まらず、南山の敵壘上、何時の間にあんなに上つたかと思ふ程、味方の兵が眞黒に眞黒に固つて集つたが、金州灣の彼方には、今しも沈まんとする夕日の影、それが何だかこの人間の壯觀を此まゝ見捨て、行くのは惜しいと言はぬばかりに、徐かに徐かにたゆたひつゝ、眞紅の色を波の上に轉ばして居るではないか。否、軍司令官は戦勝つて驕らざる古の名將と齊しく、此の夕陽に對して黙して立つて居らるゝではないか。

實にすぐれた繪畫の題目である。

願ると、老虎山上の月、これはまた此の戦争の修羅の巻の上に超然と達觀して居るかのごとく蒼い白いさびしい光を投げて、この日と月との間に、次第に暮れて行く戦後の天地。山は深紫より暗黒に、海は深碧より暗碧に、夕日は既に半ば海波に没して、其附近に眩ゆい美しい金屬製の器皿の閃めきかと思はるゝ光を漲らして居たが——

不意に爆然たる響!

皆な愕然とした。

何等の壯觀、敵は敗走に際し、その大房身の火薬庫を爆發せしめたので、半ば暮れ渡りたる空に俄かに高く揚りたる一道の火光、何の事は無い丁度それが旭日旗を掲げたやうに燃え上つて、あれよと見る間に、それが愈々高く高く、續いて猶下より燃え上る火光を見たが、其の間約二三分ばかり、やがて火光は低く低くなつて、遂には二三十間ばかりの高さになつて了ふ。

「實に、君、好い處を見たね？」

と聲を懸けられたので、振り返ると、それは森軍醫部長であつた。

「實に壯觀でした！」

「もう、かういふ面白い光景は見られんよ」

「何うも、實に！」

自分は只恍惚として居た。爆發した火光は消えんとして消えず、猶少時その低い焔を揚げて居たが、見渡すと、日は既にとつぷり暮れて、西の空の閃耀も消えて跡なく、老虎山上の月は水のごとき光を徐かに征衣の上に浴せ懸けた。南山では、わが兵既に盛なる篝火を燃さ始めて、その光は處々に面白い光景を描き出した。

爆發せる火薬庫の火光は低く低く、今は只闇の中に其微かなる餘影を認め得るばかりに至つたが、

軍司令官は猶その以前の地位に起つた儘、じつとして黙して身を動かさうともせぬ。第二軍の最初の戦勝、これに伴へる自然の大景は、不知不言の間に、軍司令官の勇敢なる胸をも動して、殆ど

感極まるの至聖境

に達せしめたのであらう。あ、此日、この一刹那、一生の中に再びかゝる悲壯なる大景に接して、この名狀すべからざる感起すことが出来るであらうか……と思つて、自分もじつと月下に佇立し盡した。

一時間の後、自分は寺崎君三浦君と山を下りて、其山下の村落、とある家の門牆の傍、其處には高梁穀の山のやうに積重ねられてある其中に毛布を敷いて、三人相擁して露管を爲た。最初管理部長の命令で、其前の家屋の一室を我等の宿舍と定められたのであるが、少時すると衛生隊が遣つて来て、負傷兵を收容するから貸して呉れとのことと、自分等は其儘深夜を其戶外へと出たのであつた。續々戰場から運搬して来る擔架、その上に照り渡る美しい月光、收容せられたる重傷者の最後の苦悶の聲——自分は萬感胸を衝いて何うしても眠られぬ。

五月二十七日（金曜日）曇、後半晴

夜半門を叩くものがあつて、私は戰場から漸と這つて来た負傷者だが……などと言ふのを夢現に聞いて居つたが、朝起きて見ると、夜半に雨が降つたと見えて、毛布から頭の髪がしとりに濡れて居る。先、耳を劈いて聞えたのは、重傷者の苦悶の聲、續いて大きな聲がして「さーい、其處等に誰が居らんか、苦しがつて、苦しがつて仕方が無いから、看護長を呼んで連れて来て呉れ」自分等は其家屋を覗いて見る勇氣も無い。其儘、顔も洗はず、飯も食はず、急いで門を出て、其旨を看護長に傳へ、心付しく南山の戰場へと志した。天もこの悲惨なる光景を悲むか、どんよりと薄鼠色に曇つて、楊柳の葉はさながら泣いたやうに、昨夜の雨の名残を留めて居る。あゝ其朝の佗びしかりしことよ。自分は長く悲惨なるこの朝の光景を忘れぬであらう。金州の南門を右に見て十町も進むと、もう味方の死屍が路傍に轉つたまゝ、收容されずに残されてあるのが幾つとなく顯はれ出して、其處にも一箇、彼處にも一箇と數へて行くと、實に實に際限が無い。あゝ死！この悲惨なる死を見て、誰か胸を動かさざるものがあらうか。

赤褐色の野、路傍には低く小さい菖蒲が紫の色に簇々と咲いて居て、ところ／＼に朝風に靡く楊柳の碧、向ふには民家の石の壁や、扉や、赤い紙に書いた字や何や彼やが見えて居て、朝の平和は言ひ知らず静かに穩かにあたりを充ち渡つて居るのに……。其ところ／＼に或は伏し或は仰向になりて戦死し居れるわが同胞、廣島に滞在せる頃には、勇氣凛々、勇しい功勳を建て、錦を故郷に飾らうと誰も思つて居つたであらうが、否、三月前までは静かなる田舎の朝夕、慈愛ある父母の膝下、優しき妻の情愛の下にのどかなる月日を送つて居たのであるものを、あゝあゝ自分の胸には涙が漲つて来た。

ことに、一人の肩にせる頭陀袋に信州北佐久郡杵掛村……と記されてあつたのを見て、其の淺間山下の平和なる村の光景が歴々と自分の胸に浮んで来た。其山、其谷、其村、自分は此春の雪の日、小詣に棲遷せる詩人を尋ねて、静かにこの人の世の悲哀を語り合つたことがあつたが、其山下の村にはやがて其悲しい報を得て、烈しく泣くべき父母、妻子があるのであると思ふと、自分は佇立してこれを見て居るには何うしても忍びぬ。

村を外れて南山に懸ると、死屍は愈々多い。生存せる兵士等は到る處に三々伍々群を爲し囀を作りて、或は死したる戦友の物語、戦争當時の悲惨なるさまなどいろ／＼と後れて来た人々に語つて居る。『私の中隊の一等卒だが、自分の弟の死骸の前に立つて、あゝ貴様はたう／＼戦死して了つた

か、一緒に郷國に歸り度くつてももう出来なくなつた……と生きてる人に物を言ふやうに泣いて口
説いて居るのを見て、實に私は氣が悪くなつた」とか、「私の中隊に兄弟のやうに仲好くして居つた
二等卒があつたが、その中の一人が戦死したので、一人は狂氣のやうになつて、其死骸に抱附いて
泣いて居つたには涙が出た」とか、「昨日の夜、先生戦死するのが虫に知らせたと見えて、色々遺言
らしいことを僕に言つたが、到頭死んで了つた」とか、零聞斷語が聞くまいとしても耳に入る。かと
思ふと、「私は實に生命を拾つた、何うですこの彈丸が隠袋の上を破つて手巾の中に残つて居たや
ありませんか」と言つて、通る人に一人一人其彈丸を示して其好運なのを語つて居る兵士もある。
一度暴風のやうに襲つて来て、そしてまた暴風のやうに去つた死の影——その恐ろしい影が今更の
やうに追想せられるので、それを思ふと、實に不可思議な、神秘な、不知不言の情が名残なく其胸
に充ち渡るのであらう。

死の問題、自分も何うして、それを考へずに居られやうか。

鐵條網の構造の堅牢、掩堡掩蓋の巧なる布置、狼狽、銃眼の構造、これ等は皆な進む儘にわが眼
に映し來つた光景である。如何に味方が勇しく奮闘し、また如何に猛烈なる敵銃に避易したかと言
ふことも明かに想像されるのであるけれど、しかも自分の眼、自分の胸に殊更、深い印象を與へた

のは、路傍に流れたる紅なる血汐で、それに染みたる手巾、繡帶などを見ると、俄かに胸が戰々
して、すぐ烈しく死の問題が……

南山の敵壘を一つ一つ見て行つた。掩壕、掩蓋、其傍には、鼠色の外套の血に染つたのや、白い
腹を出して口の周圍を砲彈に裂かれて死んで居るのや、後頭部を微塵に打碎かれてすつとも言はず
に斃れたらしいのや、二人折重つて、無慘なる最期を遂げて居るのや、砲を打たうとしてその姿勢
のまゝで絶命したのや、それは實に眼が當てられぬ。孰れも昨日の午前午後、其悲鳴の聲はわが砲
彈の炸裂せる下に聞えて、救ふべからざる四苦八苦の苦痛は此附近の到る處に滿ち渡つて居つたて
あらう。流れ出づる血汐、其を拭はん爲めに裂かれたる手巾、繡帶の片々、人間最終の恐るべき悲
劇は此の狭く暗く長い掩壕の中に演ぜられて、それは悪魔の神の猛惡を以てしても猶ほ見ることが
阻つたてあらうと想像せられる。けれどこの暗黒にも猶人間の光明がある。それは何？曰く活動の
光明、曰く勇氣の光明、曰く犠牲の光明。

砲煙の眼前に炸裂する時、機關砲の凄しい響の流るゝ時、わが同胞の血に悶へ最期に苦しむ時、
死の影の恐ろしく近く人を壓する時、猶恐れずして前進し、或は防禦するこの心、この勇氣、この犠
牲、これは人間の神に近き刹那にはあらうか。

掩堡を踰ると、山の低い處が一層低く濶く抉られてあつて、其處には敵の炊事場がある。今一呼吸、今一呼吸耐へたなら、夕飯を食ふ程の猶豫が出来ると信じたと見えて、其の大きな竈に懸けられてある大鍋には、豚の雑吸汁が黄く黒く一杯に煮られて、其傍には切開した刀の儀、豚の子が腹を開いて横はつて居る。バターやら、黒麵包やら、砂糖やら、野菜やらが順序次第もなく散亂し、肉又、小刀なども彼方此方に散ばつて居る。その炊事場を過ぎて、今一つ坂を登ると、南山の東の突角の堡壘と西の堡壘との間に平地があつて、其向ふのや、低い處に、將校の住宅らしい二三軒の家屋。其向ふには電話所らしい建物があるが、此附近には死屍の代りに書籍やら雑誌やらが泥土に塗れて、其の頁は朝風に一葉二葉と飄つて居る。奥司令官は參謀將校と共に此時この山に登つて、頻りに指點して、昨日の戦跡を見て居られた。將校の家宅の前に行くと、其處には咲き亂れた美しい西洋種の草花の花壇があつて、殊にその附近に多くリボンや玩弄などの棄てられてあるのを認めた。露の將校は四五日前まで此處に妻子を携帶して居つたのであらう。室内は比較的清潔ではあるが、書籍雑誌の狼籍たることは非常で、中にツルゲネーの全集や、レルモンツの全集を發見した時は、自分は妙なからざるある趣味のわか胸に上るのを覺えたので。

路傍に散亂して居る者の中で、一番多いのは、靴、長靴、靴刷毛、半巾、外套、ねぢ廻し、銃劍、

書籍、雜誌類で、封書、葉書なども随分澤山棄てられてあつた。彈丸は小銃のが一番多く、砲彈の箱なども二つ三つ其附近に轉がつて居つた。自分等を始め、兵士、軍屬、傭人などの歩いて居る間を、地雷が敷設されてあるかも知れんから、道路以外に滅多な處に脚を踏入れるなどの注意を守備の兵士が絶えず怒鳴つて廻つて居るので、其平地を山に附いて右に大迂回をすると、我軍の左翼、即ち第三師團方面に面して、敵の砲壘が重砲數門を残したまゝ開けられて、其附近には同じく敵兵の伏屍が累々として重り合つて居る。扇子山の司令塔、敵が牙營を置いた處は、その右方二百米ばかりに聳えて居て、其上には同じく重砲が据ゑられてある。背面の設備また頗る完全し、大房身停車場に通ずる通路は修築せられ、彈藥庫、兵舎など順序正しく排列せられて、此に至ると、成程敵が頑強に抵抗したのも無理でないと點頭かるゝのであつた。

けれど敵の伏屍の多かつたのは、其扇子山を右に下つた旅順街道で、かの夕陽に對しての砲烟の幾簇々、それがこの一帶の悲惨の光景を畫いたのである。實に

悲惨の極、酸鼻の極

如何にして此路を過ぎて行かうかと思はるゝので、一間二間と隔てず、數多の死屍は或は伏し或は

仰向になりつゝ横つて居るのを見ては、戦争其もの、罪惡を認識せずには何うしても居られぬ。殊に、砲弾に斃れたるもの、惨状は一層見るに忍びないので、或は頭腦骨を粉塵せられ、或は鎖骨を奪ひ去られ、或は臍を潰裂せしめ、或は胸部を貫通する等、一つとして悲惨の極を呈して居らぬは無い。渠等は雨霰と砲弾を浴せ懸けられて、一物の遮るもの無き廣野に、いかに悲鳴を擧げたてあらうか。現に小さな板橋の下に五六名まで折重つて死せるを見ても、いかに渠等が隱遁地點を求むるに焦心したかを察し得られる。しかもこの血汐の流るゝばかりなる路には、かゝる悲惨なる光景をも物ともせざるわが歩兵、騎兵の大部隊、續々として行進を起し、傍には一度死して蘇生せる敵の自傷兵を捕虜とするなど、實に一方ならざる混雜を呈して居る。

自分は寺崎君と偕にこの悲惨なる路を、さまざまなることを語り合ひつゝ過ぎた。路傍の苜蓿の紫に咲けるを指して、この死屍との配合の妙を語つたのも、確かにこの路であると記憶して居る。三浦君もこれを題目にして、明年の學校の卒業製作を畫くと言つて居た。實際、戦争其ものより、この戦後の悲惨なる光景が甚しく自分等の不健全なる頭腦を狂はしめたので。

軍司令部の今夜の宿營地がまだ不明であるので、自分等は引返して、東門から金州城の中へと入つて見た。東門は昨朝第一師團の工兵隊長鳥谷少尉が破壊して突入したところ、まだ依然として

其爆發の光景が残つて居る。金州城内に入ると、居民は物珍らしさうに彼方此方と逍遙し、群集して、頻りにわが軍隊の行進するのを見て居るが、街頭の商戸は皆堅く扉を閉ぢて、赤い紙に書いた種々の聯句が徒らに此街頭に連つて居るばかりであつた。金州城は東西南北の四門を有し、其門より起れる道路は、中央に一集合地點を作り、其處には關帝の廟を祀つてある。此附近が先づ城中には一番賑かな處であるらしく、其處へ來ると、利を見るに長じた市民は、鶏卵、砂糖、煙草などを携へて、早くもわが兵士に賣附けて居る。關帝廟の壁には第二軍の告示が既に掲げられて、市民の陸續と其周圍に集つてそれを讀んで居るのを見た。

つい、昨日の夜まで、敵兵が五六十名の城内に躲れて居たので、到る處戒嚴を施して、少し怪しい家屋には、わが守備隊の注意深く、「危険入るべからず」とか、「地雷敷設の危険あり」とか記して置く。

午後一時頃、軍司令部の位置を南門外劉家屯に定むとの報知を或軍人から得たので、自分等は急いで其宿營に就いて、先づ兩三日來遊適したことの無い温い飯を炊事場から貰ひ、新しい福神漬を菜に、頰鼓を打つて食つた。

其の旨かつた事と言つたら。

五月二十九日（日曜日）晴

昨日は終日觀戰記を書くのに忙しかつた。柴田君巨君は戦後撮影に出懸けて、面白い光景をも撮つたし、興味ある逸話をも大分探つて來た様子。戦争の状況は其後自分も彼方此方を訪問して、随分通信の材料にも爲たが、これは新聞の記事にもあるし、公報にも出て居るので、此處には略して記せぬことに爲た。

箇人の一日記であることを忘れ給ふな。

自分等は廣島出發以來、今日に至る迄三十七八日、船では拙いバケツ飯、軍では炊事場の半熟飯、戦争が始れば、道明寺糍といふ風に、随分食物には不自由を爲て來た。否、面を洗ふ器や、湯を沸す土瓶や、物を煮る鍋なども丸きり無くつて、其不便なことは一通ではなかつた。それに、湯と言ふものには上陸以來只の一度も入つたことが無い。大姚家屯で、同居した備人の二三が、大釜に湯を沸して四斗桶に入つて居るのを羨しく思つても、自分等には其四斗桶の工面が出来ぬので、顔は砂塵に汚れた儘、體はシャツを着けたまゝ、一度肌を搔けは塵垢が爪に滿つといふ有様、それは實に太古無爲の民の生活もこれには越すまじと思はれるので。であるから、金州に池塘（風呂）があると

いふ事を聞いた時は、先づ第一番に風呂に行かうと雖言ふとなく言出した。で、今日は天氣は好し、買物ながら出懸けやうと言ふので、午前の九時過に寺崎君などと袖をつらねて宿舎を出た。風呂は南門を入るとすぐで、入口に泰和池塘の四字を白壁に分明書いて、其傍に、赤い不思議な提燈を下けて居る。これが何ても風呂屋の徽號である相な。さて、扉を押して中に入ると、日本のやうに高い處に矢張風呂番が居て、一人一銖錢（十錢）づつであるとのこと。衣服を脱ぐ所、上つて衣服を着る處など總て左程不潔ではなかつたが、さて、湯に入つて驚いた。實に不潔も不潔、その臭さと言つたら、丸て肥料溜にても入つたかのやう。湯はたゞの廣い浴槽に沸かされてあるのではあるが、其たゞさが幾日も洗はぬと見えて、ぬら／＼と餘程注意を爲なければ滑つて了ふといふ有様。そして其の湯の淺さは膝位。あゝ自分等は久し振りに湯に入ると勇んで遣つて來たのであるが、其周圍の不潔と支那人の口の臭氣とはしたゝか避易して、碌々身體も暖めずに出て了つた。

風呂では失敗したが、買物では大成効。此處で藥罐を買ふ、洗面器を買ふ、支那靴を買ふ、煙草を買ふ、砂糖を買ふ、茶碗を買ふ、急須を買ふ、丸て新世帯をこれから持たうとするかのやう、殊に、午餐には、とある横町の料理店に入つて、ツアリチーなど言ふ旨い支那料理に舌鼓を鳴した。歸途には東門から出て、其門外の露園の農園らしい建物に入つて、色々草花などを見て廻つたが、其門

を出て少し行くと、路側に札が立つて居て、しるこ一杯五錢と書いてある。そして其下に、向ふの日章旗の建つて居る家屋と小さく、小さく。日本人が遣つて居るのか知らん、寄つて見やうと靴を鳴して入つて行くと、其民家には第一軍から鏡子窓の海岸を傳つて遣つて来たといふ酒保とも附かず、無論軍人でも御用商人でも無い男が二三人居て、民家の大釜に支那アツキを煮て、中に麥粉を丸めた怪しげなものを容れて、それをして居るの御座いと賣つて居るのである。けれど甘いものは久し振ると、舌鼓を鳴して二三杯吸つた。此人達は何か面白い商買でも始めやうとして遣つて来たので、金も二三千圓持つて居た相であるが、軍政の嚴肅ある、二三日経つて、軍政署に收容せられて、たゝか大目玉を頂戴した後、嫌應なしに本國に送り歸されたとの事である。夜、月明かに、海かゞやき、――頻りに詩興を催して郷國を憶つた。

六月二日（木曜日）晴、曇、夜雨

金州城外の宿舎は比較的清潔で、何方かと言へば紀念の多い家であつたが、先月廿九日から今日に至る迄は、寺崎君の書を作る間に觀戰記を書いたり、面白い饒舌を爲たり、其際にはよく金州に出懸けて行つては、例の料理店に入浸りの有様であつた。宿舎から金州南門に至るの道、其處

には輜重車、牛車、馬車が陸續として、空には熱く照り渡る初夏の日影、其の潤々した平野を辿りつゝ、自分等は如何に面白い興味深い物語に耽つたであらうか。路の南門に稍近いところに露兵の伏屍の其儘に横れるを、初めは見悪しとて避けて通つたが、三日目には誰か其上に薄く土を懸けて、通行の人々の眼に留らぬやうに爲た。けれど、其の懸けた土が薄いので、手の尖が出る、足の腿のあたりが出るといふ始末で、最終には其の腐敗した臭氣が通る度毎に鼻を擧げて、遼東に特有な腹の白い鳥が絶えず其傍を離れぬので、これなどはかのドオデエの短篇集に見らるゝ戦後の慘狀であると思つた。

金州北門外の野戰病院を見たのは五月の卅一日。それは第四師團ので、とある寺院を借りて病院に爲て居るのであつたが、院長伊藤百藏氏（三等軍醫正）の話では、患者の数が普通二百五十名が制限であるのに、今は六百人から入院して居て、其忙しいことは殆ど虚偽のやうであるとのこと。祖國の爲め、自から潔い犠牲となつて、此の異郷の高梁穀の上に横つて居る勇敢なる士官兵士に就いては、實に悲壯なる涙の溢るゝのを禁じ得なかつたので、殊に、重傷、輕傷患者の支那寺院に特有の佛像の下に縦横に横臥せる傍に、今朝死せしと言へる一人の兵士の硬くなりて扉に身を寄せ居るさまを見ると、涙は意味もなく烈しく溢れ出して、自分は殆ど長く其處に立つて居るに

堪へなかつた。病院を出ると、寺の門前には、戦死者負傷者の靴、背袋、水筒、彈藥袋、帶皮などが山のやうに積まれてあつて、其附近に赤十字の徽號のある衣を着た輕傷者がぶら／＼と五六人逍遙して居て、其向ふに金州の城壁、城門、其に添うて馬を駛らす將校、馬車を鞭で清苦力—この上に初夏の日影が美しく照り渡つて、涼の彼方に涼しい蔭をつくれる楊柳の幾簇、面白い光景だと言つて、石橋の上に腰を懸けて、色鉛筆を隠袋から出して、三浦君がこれを寫生したのを未だに忘れぬ。

昨日は金州城中にはまだ露兵が残つて居たとか何とかで、各城門には哨兵を立たせて、嚴かに出入の人々を改めるので、毎日行かぬ例の無い城中の料理店にも南門から引返して了つたが、今朝不意に、何うだ是から

青泥窪

に行つて見やうてはないかと發議する人があつて、誰も皆忽ち同意。て、一行の中の二人は支那馬車の周旋に金州に出懸けて行く、自分と寺崎君とは副官部に許可を乞ひに行つて、河村副官から守備隊長への紹介状を貰つて来る、準備が時の間に整つて、出發したのが、丁度十一時半頃。

支那馬車一輛に寫真機械一切と自分等七名とが乗つて、がた／＼と金州城を後に、南山の裾を縫つて向ふに進むと、老虎山を後景にした海は、折から薄鼠色の曇つた空に怪しい薄暗い色を漲らして、大房身停車場から難關嶺に至る間の風景の佳さ！低い丘陵の鞍部を鐵道線路にのり上ると、柳樹屯を中心に爲た大連の海は弓弦を張つたやうに濶く展開せられて、三山島の波打際に白く怒濤の寄せて居るのも歴々と眼に映る。丘を越えたと難關嶺の村落の山は両面から感つて迫つては居るが、名に呼ばれたる程の越え難い時でも無く、やがて、それを向ふに出て、あれが三十里堡だと言ふ楊柳の簇々の少し手前から左に入つて、小山矮嶺の壁のごとく連れる間をがた／＼と二里程も進むと、糧食縦列の長い群が陸續として向ふから遣つて来るのに邂逅した。君等は何師團かね？と其中の一人の兵士を捉へて聞くと、善通寺師團で、二三日前柳樹屯から上陸したとのこと。第十一師團がもう上陸したかと我軍の機敏なる行動に耳を聳てながら、其の主力の全進方面を聞かすと、よくは知らぬが、師團司令部は何でも青泥窪から西南の山中を志して旅順方面に向つて進んだとの話。此間からの風説では、第二軍は旅順には向はんと云ふのが専ら行はれて、第一師團、第十一師團、それに今一つ他の師團が加はつて、乃木陸軍大將が第三軍を組織し、この力で旅順を攻め、第二軍は時機を見て、直に北進するのであるとの噂は何處から洩れるともなく自分等の耳に入つて居つた